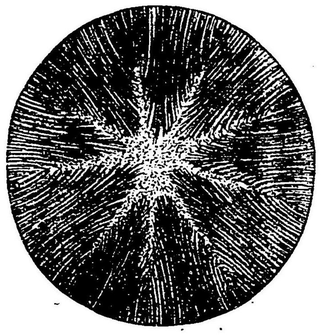
前に掲げてある第三圖は、即はち此のシルク、ハットの外形を描いたもので、此のシルク、ハットに於いて、山の高さは鍔の長さに等しく出來て居るのである。それにも關はらず、何うして見ても、山の高さの方が、鍔の長さよりも、遙かに長く見えて居るのであります。これは即はち、地平線より上の方へと辿る各自の視力の範圍といふものは、同じ地平線上に相並べるものを見る場合の半ばより少ないといふことを證據立てゝ居るのでありまして、その上同じ地平線を辿つて或る物體を見るよりも、地平線より次第に上の方へと眼を辿らせて物體を見る方が、遙かに眼の筋肉を勞することの多いことを證據立てゝ居るのであります。それが爲めに、各自の判斷力までを誤らせて終ふのであります。



第十圖

それから、今一つの眼の不思議な作用はツォルチル(Zöllner)といふ人に依つて發見されました。抑も此の人の發見した事實は、何ういふことであるかと申しますると、若しも或る若干の平行線が或る他の若干の短線の一列に依つて、或る一定の

角度を保ちつゝ交叉さるゝ場合には、彼の長き平行線が、此の短き平行線の傾斜して居る方向に於いて、漸次に其の間隔が廣くなつて見えるといふ、此の事實なので御坐いまする。

第四圖は即はち此の事實を示したもので御坐いまして、若しも讀者諸君が、本誌の下端を手に持つて、斜めに傾けて此の圖を御覽になると、此の圖に對する眼の不思議な作用は、愈々著しくなつて見えるのであります。

第十二圖

それから、次に第五圖に示して御坐いまするのは、垂直なる平行線に依つて分かたれたる正方形よりも、その高さが稍や低く見えることを示したものでありまして、此のような眼の不思議な作用を利用いたしまして、身長の低い人は、勉めて縦縞よりも横縞の衣服を着て、その身長の補はれて見えるように勉めることで御坐いまする。

それからまた、若し一個の直線が他の、それより短き平行線に依つて圍まるゝ時は、同じ長さの直線が、他の、それより長い平行線に依つて圍まるゝ時よりも短かく見えるのであります。これは第六圖に其の意を示してあります。それから第七圖に於いて、AB線はCD線よりも實際長いのであります、けれども、各自の眼には何うしてもABがCDよりも短く見えるのであります。

その次ぎは第八圖。これは白く光つた物體は、いつでも比較的に大きく見え、その椽は、光りの

少いものよりも、少しく明諒を缺いて見えるといふことを示したものでありまして、即はち此の圖に於ける白い平板面は、黒のよりも多少大きく見えるのであまります。これは射光（irradiation）に基づける、眼の不思議な作用でありましてその理由は、非常に光つた物体を寫眞に取る場合に於いて、カメラの中の感板の上に生ずると同じ作用を、網膜の上に生ずるからのことであります。

第九圖に於きまして此の圖を二三尺の距離を隔てゝ眺める場合には、この圓形は次第々々に脹れ出して來るように見え遂には圓形が互に相接近して、若干かの列を爲す

One of the girls who possessed real artistic ability resolved to enter the competition for the design of the new crown. Only the circular base pon plussed her a little. The father, a man of resource, and anxious to help his daughter, took the lid of a small sauce pan, and knocked on the top.

第十三圖

ように見えるのであります。そして、此の圖に於いて、黒と白との對照が著しければ著しいほど、眼の不思議なる作用は、いよ〳〵著しくなるのであります。

第十圖に示してあるのは、夜、空を仰いで星を見るとき、その光が吾人の眼に映ずる樣を描いたものでありまするが、全く此の圖に示した如く、天上の星は、われ〳〵の眼には決して光の幾點かの如く見えないのであります。斯く星の大きさが實際見るべき筈のものより大きく吾人の眼に見えまする理由は、次の第十一圖に依つて證明さるゝことが出來るのであります。即はち此の圖に於ける線の一對は灰色を爲して、他の一對は黒色を爲して見えるのであります。而して此の畫を漸次回轉いたしまするとき、此の灰色と黒色との位置が漸次變つて來るのであります。これは即はち、われ〳〵人間の眼の正面に於ける部分は、決して完全なる半圓形を爲して居らぬ證據でありまして、

而が其の一端よりも、他の端の方が餘計屈曲して居ることを證據立てゝ居るのであつて、これが爲めに、天上の星も、その正しく見ゆべき如く、われ〳〵の眼には寫らぬのであります。

それからまた、われ〳〵が横文を讀むとき、われ〳〵は、その文字の活字でとに、一々全体を眼で見ながら讀んで行くことゝ斯う思ふて居るのであります。が、しかしながら實際に於いて、われ〳〵は各文字の上半部のところだけを見ながら讀んで居るのであります。第十三圖の上半に各文字の上半だけを寫してある文章は、容易に讀むことが出來ますが、その下半、各文字の下半だけを寫したのは、何う骨を折つて讀まうとしても、仲々讀めることではありませぬ。この事實は、即はち、われ〳〵が各文字の上半だけを見つゝ何時も書物を讀んで居ることが分るのであります。

この他、第十二圖に示す如く射撃する場合に於きましても、また、この眼の不思議な作用の爲めに起るいろ〳〵の面白いこともあり、それからまた、畫家なぞが、この眼の不思議な作用を利用する上に就いても面白いお話が澤山ありまするが、此處にはまづ此の位にいたして置きまして、またの折、この事について認めることも御坐いましようと思ひます。

それは兎にも角にも、われ〳〵が最も信を置いて居り、また、最も吾人に忠實なるべき眼にして斯くまで不思議な作用を持つて居り、われ〳〵が信じて、云々の如く見にねばならぬと思つて居るものまでを左樣見せぬといふのも、誠に不思議といへば、實に不思議なことではありませぬか。

希臘神話梗概

（アポロー流竄より「アルファベット」の由來まで）

杉谷代水 補譯

アドミータスとアルセスチス

(一)奴隷

デルファイより、北に方り海岸より遠からざる處に小さき市街あり。年若きアドミータスこれを司配しき。市民は彼れを尊んで「王」と呼びけれども、王國の小さこと、周く巡覧するに半日を費さゝる程なり、さればアドミタースは領内なる老幼男女の顔を盡くに知り、又その名をも知れりき。寛大にしてかと慈悲深き王なりければ、市民は皆これを敬愛しき。

さる程に或日の黄昏の事なりき、山颪の風いと寒く吹きて雨さへ降りいでたるに、一人の乞食王の門邊に來りて憐みを乞ふ。身には襤褸を纏ひ、

肌垢染みて汚く、且つ飢ゑて物言ふ力さへ無し。この國には斯る飢ゑたる者一人も無ければ、アドミータスは一目見て遠國の者なるべしと思ひぬ。兎も角も家に上らせ、物食はせ、浴などさせて後ち、我が着たる厚き上衣を脱ぎて彼れに着せ、さて家臣に命じ、臥床を設けさせて彼れを休ませけり。

斯くて翌朝に至り、アドミータスは親しく彼の乞食に向ひてその名を問ふに、彼れはたゞ頭を掉りて答ふること無し。アドミータスまた家と故郷とを問ふに、尚は答ふること無く、「殿よ、願はくは我れをば奴隷となして、一年の間御館に使はせたまひねかし。」と云ふ。

王は奴隷には要無かりしかど、熟々彼れの姿を見るに、市の中なる最下級の奴婢と雖もこれに比ぶれば眞かに幸福なるものをと思ひて、坐ろ憐れを催しつ。遂に彼れに向ひ、「然らば汝の請を許し一年の間我が用を命じて、家と衣と食とを與へて

ん。」と言ひ渡さる。

さてこの奴隷の爲し得る業いと少かりしかば、小山に行かせて、王の羊を牧することを命ぜられき。さる程に、彼れは日毎に小山に行きて羊の群を戻り、青き草のある處、清き水の流るゝ處に羊を連れ行き、又狼の害を防ぎなどしつゝ、斯くて一年を送りぬ。アドミータスは他の奴僕と同じく彼れをばいとやさしく使ひ、衣物も食物もいと良きもののみ與へけり。されど牧奴は竟におのが名を明さず、また故國の事も知人の事も一切語ることなかりき。

斯くて一年と有一日を過ごしたる日の朝、アドミータスその羊を見んとて、彼の小山に上り行きけるに、こはいかに小山の上にて音樂の聲あり、律のいみじく妙なること牧者等が吹きすさぶ笛の音などの類におらず。いと不審しと思ひて其方をさして行き見るに、一人の若人小山の頂に坐りて樂器を奏で、數多の羊彼れを取圍みて樂を聽けり

彼れ豈牧羊の奴ならんや。

只見る、丈高き一人の若人、王の衣よりも美しき衣を着け、顔は日の光の如く、眼は星の如くに耀けり。肩越に銀の弓を負ひ、帶のあたりに胡籙を下げ、手には黄金の琴を持てり。アドミータスは驚きて一歩も進む能はず。この時若人詞を懸けは「やよ賢王アドミータス、我れこそ御身に助けられたる乞食なれ、御身にやさしく使はれたる牧羊の奴隷なれ。約の如く一年の間御身の用を務めたれば、今ぞ故郷に歸り行かん。御身我れに願事無しや。」と云ふ。

「いで足下の名は。」とアドミータス問ひ反せば、「我れこそはアポローなれ。十二ヶ月以前我が父デュピタアの大神我れを逐ひて下界に墜し、一年の間人の奴隷となりて使はれ來るに非ざれば再び山に還るべからずとありき。それより我れは繩縷を纏ひ、飢ゑに飢ゑ、疲れに疲れて御身の門邊に立ち寄りしに、御身は嬉しくも我れを助け、我れに

食を與へ又衣を與へたまひき。かくて御身の奴隷となりて奉公せしに、御身の我れを遇せしこと、實の子かなんどに異ならず。我れ豈この恩を忘れんや。いで何にても御身の願は叶ふべきぞ。」と宣ふ。

アドミータスは再び驚き、

「さては銀弓公子にておはせしか。我れは國王なれば何人の願ひも身に足りて候なり。まして人間の分を以て尊き神に露の力を添へ奉りし面目これに過ぐべからず。この上に何の願か候はん。」

と云ふ。

「潔し、心地よし。然らば未來を誓ひかかん。此の後我が力を借らんと思ふことあらば、憚ることなく我が名を呼ぶべし。あなかしこ〳〵。」と宣ひてアポローは彼の七絃の琴を掻き鳴らしつゝ、彼方をさして立ち去りたまひけり。アドミータスも大きに悦び、跡見えぬまで見送りて、これも家に歸りける。

(二) 輕車

こゝにイオルカスといふ市府あり、アドミータスの市を距ること數哩、海の岸に立ちて殷富なる市なりき。王をピーリアスと云ふ。暴惡無慈悲の性にして、己れが身より外には何人をも愛せしことと無し。この王に一人の女あり、名をばアルセスチスと云ひて、美しきこと水無月の薔薇の如く、心の優に情あること父王と反對なりき。されば海のあなたなる諸外國の王子達聞き傳へて婚を求むるもの數を知らず、希臘の貴公子はた先を爭つて來り訪れけり。されどその中にて姫の心を動かし得たるものはたゞ一人なりき。憐國の賢王アドミータスこれなり。

是に於てアドミータス心を決して狂暴なる父王ピーリアスに會見し、姫をその身の妻に賜はらずやと請ふ。

ピーリアス言下に答ふるやう、「器量相應しきものならでは我が婿がねたるを得ず。御身さ程に姫

を得んと思はゞ、荒き獅子と猪とに輕車を牽かせて來り請はれよ。さらずば姫は與へ難し。いかにやいかに。」とアドミータスを尻目に見て嘲り笑ひやがて臣下を呼びて容を門外に逐ひ拂はせけり。

アドミータスは無念に堪へねど、せん方無ければ悄然として立ち去りぬ。猛き獅子と猪とに馬具を附けて輕車を牽かしめたる例會て聞かず。これ如何なる勇士と雖も爲す能はざる事なり。

かく思ひ屈しつゝ歩みける程に、やがてその領地の間近に來りぬ。小山の上には數多の羊、群をなして遊べり。アドミータスこれを見て忽ち彼のアポローの事を思ひ出しつ、彼の神別るゝに臨みて誓ひ置きたまへることどもあれ、「この後我が力を藉らんと思はゞ憚ることと無く我が名を呼べ」と宣ひき。さなり、今こそ神の力を借らん。

アドミータスは斯くと思案を定めければ、翌日いと早く、野原の中央に石の祭壇を造り、さて肥えたる野羊を屠り、火をたき、野羊の腿を炙りて

巍としつ。肉の煙高く立ち騰りてその香空に滿ちたる時、アドミータス彼の靈山の頂を望み、兩手を擧げてアポローの下山を請ふ。

「あはれ銀弓公子の御神、嘗て不幸の人を助けまゐらせたる功德によつて、願はくは來り現はれて我れに御力を添へさせたまへ。今や神力を賴むの外候はず。誓の御詞空しからずば願はくは來り現はれたまへ。」

と高らかに祈りたるその詞未だ畢らざるに、銀の弓胡簶を負ひたる赫奕たるアポローの御姿アドミータスの前に現はれたまふ。

「やよ恩人、足下の願とは何事なるか。」

アドミータスは喜びて一伍一什をアポローに語る暴慢なるピーリアス王、荒き獅子と猪とに輕車を牽かせて來らずば姫を何人にも與へじと云へる由を白す。

アポローは默頭かせたまひ、「いで我れに隨ひて來よ、せん樣あり。」とて彼方へ歩み行かせたまふ

アドミータス後に引き添ひて行くに、遙かあなたなる森の中に入り、やがて一頭の獅子を驅り出して、直ちにその鼠を捉へたまふ。獅子は怒りて咆え哮り、牙と爪とにかけんとすれど、アポローをば少しも傷くる能はず、遂に尾を垂れて足下に伏しぬ。アドミータスも亦茂みの中より猪を驅り出すに、アポロー彼の獅子を犬の如く側に從へてまた忽ちに之れを捉へたまふ。かくてアポローは獅子と猪とを左右に隨へ、アドミータスを伴ひて森を横ぎり、彼方の野へと出でたまひぬ。

この時日は未だ午に達せず、向ひの方に海見えて、イオルカスの市街はその前にあり。金色燦爛たる一輛の輕車森の外にありて人待顏に横はれりアポロー即ち轡を取りて彼の獅子と猪とを羈に繫ぎたまふ。奇なる哉二個の猛獸は相併んで輕車を引けり。而も兩雄並び立たず、忽ち劇しく相鬪ひしが、アポロー鞭を揚げて連打したまへば、二匹はやがて鬪を止めていと柔順に歩を進めつ。アドミータス乃ちこれにうち乘り、アポローは側に立ちて手綱を控へ、そのまゝ徐々とイオルカスへぞ押し行きける。

さる程にピーリアスの老王は想ひもかけぬ猛獸に輕車を牽かせて、異常の丈夫の御して來りたる有樣を見、驚き怖るゝこと大方ならず、遂にアドミータスの婚を許しけり。やがて婚姻の日も定まりければ、アポローは兩つの猛獸を彼の森に連れ行きて、また解き放したまひけり。

かくてアドミータスとアルセスチスとは目出度大禮を行ひつ。狂暴なる父王ピーリアスを除くの外、兩國の市民祝せざるもの無かりき。されどアポローも親しくその宴に列して、新郎アドミータスにいとも奇しき賜物をば贈りたまふ。そは「山上の神々よりの誓約」にして、アドミータス病んで死せざるべからざるに至りたらん時、誰にもあれ彼れを愛する者のこれに代つて死せば、アドミータスは命助かりて健康に復すべしといふことは是

れなり。

(三) 冥府の使者

斯くてアドミータスとアルセスチスとは市民の敬愛を受けていとも幸福に月日を送りしが、或年アドミータス不圖せしことより病に罹りてうち臥しぬ。療養もとより怠りなかりしかど、五體は日增に衰へて、はや快癒の望みも盡きはてけり。されば王后アルセスチスの歎きは言ふも更なり、人望多き王なれば市民の憂慮も一方ならず。

さる程に過ぎにし大禮の時アポローの誓はせたまひしことあるを思ひ出で、王に代りて命を捨つる者は無きかと急ぎその人をぞ求めける。

こゝにアドミータスに老父母あり、この世の歡樂既に盡きて行先短き齡なれば、或は我が子の爲めに命を捧げんと望まるゝ事もやとて、或人その意を候ひけるに、二人は均しく頭を掉り、假令ば明日の日知らぬ齡なりとも、我れから天壽を縮むべからずとて聽かれざりき。

さらばとて王の弟妹のうち命に代るべき人は無きかと尋ねけるに、これも同じく頭を掉り、その身の命には代へ難しとて聽かれず。百官萬民皆王を敬愛せるものから、餘事の奉公とかはりて一つの命の事なれば、我れ代らんと言ふ者なきぞ是非も無き。

上下かゝる騷ぎのうちに、后アルセスチスは斯うと覺悟を定め、人にも言はずたゞ一人居間に引き籠りてアポローの神をぞ念じける。あはれこの身を以て良人の命に換へさせたまへと心をこめて願ぎ申しつゝ、斯くて恐るゝ所無くまうけの臥床に入りて眼を閉づれば、不思議やその儘息絶えて、后はみまかりたまひけり。かくとは知らずやゝありて后の侍女は居間に入り來り、美しき姿の冷やかになりいますを見て驚くこと大方ならず。

これと等しく彼方にはアドミータス王、遽かに心地輕く覺えしかば、試に起ちて見るに、不思議や手足に力あり、五體の有樣ありし昔に少しも變

らず、さしもの大病夢の覺めしが如く平癒せしかば、且つは驚き且つは悦び、この由后に知らせんと、急ぎて居間を驅け出でつ、后の居間に至り見れば、こはそも如何に、最愛の后はことときれて床の上にあり、仔細はそれぞと知られけり。王は悲歎に物をも言はず、后失はん程ならばこの身その儘死にたらんものをと、身を掻き挘りて悔い怨めどもそのかひ無し。

凶事やがて公けになりければ、やさしの后の御心やとて泣く者市に滿ちて、その聲屋外に聞こえけり。アドミータスは死したる后の側に坐を搆へ后の冷き手を握りつめてはうちくどき〳〵、その日も暮れて夜となれどもその儘に側を去らず、かくて夜一夜を明して薄明の光窓を漏れども名殘はなか〳〵に盡くべしとも見えず。

兎角する間に日は高く昇りてあか〳〵と居室を照しぬ。アドミータス尙は后の手を握りてあるにその手や、暖かになれりと覺えつ。と見れば后の

青き頰の上に花の如き赤味を帶び來たるが如し。刻又刻、手は次第に暖かになりぬ。頰は赤くなりぬ。后は遂に眼を開きて起き上りぬ。命甦りて喜ぶこと限り無し。

後の蘇生りたる所緣は下の如し。

后臥床に入りて眼を閉ぢけるに、身はそのまゝに死して玉の緒のみぬけ出でけり。この時彼の無情なる冥府の使者來りて后を幽界の王后プロサルピンの廟に率て行きぬ。

「いみじくも從順に來つるもの哉。何人ぞ。」と蒼面の后の問ひたまふ。「これはアドミータス王の后にてアルセスチスといひ侍る。若く美しき身を以てやさしくも良人の命に代りて此處に來ませしなり。」と答ふ。冥府の后あはれと思召し、やがて彼の使におほせて、后をもとの樂しき明界へと送り返させたまひけり。

かくてアルセスチスは黃泉より還り來つ。それより長き間最愛の良人アドミータスと共に彼の市

府に生を送りぬ。山上の神々もよく護りたまひければ、いとも幸福に齡を重ね、友白髮の翁嫗となりて後ち彼の冥府の使は二人を一度に誘ひ行きけるとなん。

（註）

(一)アドミータス――希臘大陸部セッサリーの一州フィーリーといふを領し、アルゴナウッといふ勇敢なる部族の一人なりと。

(二)アイオルカス――同州の海岸にあり。

(三)ピーリアス――海神ネプチユーンの子なりといふ。後その子の爲めに慘殺せらる。

(四)アルセスチス――一書に、英雄ヘルキュリーズ親ら冥府に下りてアルセスチスを救ひ還りし由見ゆ。

ケドマスとユーロパ

(一)牡牛

希臘神話梗概

小亞細亞の或地方に某といふ國王あり、二人の子をもてりき。一人は王子にしてケドマスと呼び一人は王女にしてユーロパといへり。領地いと小さければ、塔に上りて國見するに殘る隈なく見えけり。かたへには山を負ひ、かたへには海を控へたり。王はこの國を以て世界の中心にして最も好き處なりと思ひければ、敢て他國の事を聞かんとも思はざりき。

實に小さき國ながら王はいと幸福に世を送り、二人の子を鐘愛してその人と成るを樂み居けり。二人もまたいと滿足に成長しぬ。ケドマスの勇氣あることと國中に並びなく、ユーロパの美しきこと曾てためし無しと稱せらる。されどゆくりなき凶事の遂にこの國をおとづれけるぞ是非も無き。

或日の朝、ユーロパ草の花を摘みにとて、海邊に近き野に出でけるに、父王の飼ひたまへる數多の家畜芳ばしきげんげ草の中にて樂しげに遊び居けり。牛も羊も王女によく馴れ、王女もまたそ

の名を知りて呼びたまへば、皆嬉しげに足もとに驅け來りぬ。牧者は樹の蔭に身を横へてしきりに草笛を吹けり。ユーロパはこの野に來りて遊びしこと幾千度といふこと無ければ、今日しも不思議の變事の身に起らんとは何人も推せんやうは無かりしなり。

さても家畜の群の中に、見慣れぬ一頭の牡牛あり。體いと大きく、眞白にて美しきこと雪の如し。眼の茶勝にしておとなしげなるはたその性の柔和なるを示せり。牡牛はユーロパの方をば見んともせず、此處に彼處に嫩草を食ひ歩きて居たりしが、ユーロパ前垂を擴げて野菊、毛莨なんどを數多摘みける時、牡牛は徐かに王女の方へと歩み寄りぬ。王女も恐るゝこと無く足を留めて美しき牡牛の來るを待ち居たるに、徐々と歩み來りて王女の手に鼻を擦り寄せ、「めでたき朝にこそ」と云はまほしき樣をなしぬ。

王女は柔かなる手に牡牛の頭と頸とを撫でなどするに牡牛はいと喜べる樣なり。王女やがて手すさびに野菊の花圈を造りて牡牛の頸に掛け與ふれば、牡牛は柔和なる眼に王女を視つめ感謝の聲を出さまくしつ。やがてげんげの中に身をうつめて徐かに横りぬ。王女は又小き花圈を造り、彼れが角に掛けんとてその脊の上に乘りけるに、那の時早し牡牛はすゝくと身を起して忽ち一散に驅け出しぬ。ユーロパはあなやと驚き、角に取りすがりて纔かに身を支へつ。怖しさいふばかり無ければ脊より飛び下りんとすれども、走ることいと疾ければ下りも得やらず、せんすべを知らずにたゞ聲を揚げて救を求むるのみ。

牧者は聲を聞きて驅けつけ見れば、彼の牡牛王女を脊に乘せて一息に海の方へと走れり。驚破とばかり足を限りに追つかくれどもなどか及ばん。牡牛ははや王女を脊にしたるまゝ海の中に躍り入れり。兎角する間にこの有樣を王に報じたるものありければ、城中城外遽かに騒ぎ立ち皆濱邊へと

馳せ出でぬ。されども眼に入るものは水青く雲碧なる遙かの沖合に白き動物の波を掻きてしきりに泳ぎ行ける姿のみ。

王は狂氣の如く聲を嗄らして人々を叱り勵ましつゝ。海路遙かに曾て來しこと無き邊りまで追ひ行きけれど王女の姿は竟に跡だにも見えざりき。さて詮方なければそのまゝ歸りて斯くと言上するに、上下いづれも力を落し望を失ひ、城中の兒女はやはや聲を揚げて泣き悲みけり。王も流石にせんすべを知らず、一室に籠り三日の間飲食をもなさで歎かれしが、遂に決然として王子ケドマスを呼びて言ひ渡さるゝやう、「汝これより船に乘りて王女の行方を尋ね出すべし。如何なる危險の事なりとも王女の消息を得ずして再び歸るべからず。」と思ひ切りてぞ言ひつけらる。

ケドマスも望む所なれば、直ちに二十人の勇士を選びて艤し、はや翌日は纜を解きて乘り出しぬ。これ當時に於て實に稀なる冒險なりき。はてしも知らぬ海の上にて如何なる國に着かんとも定かならず、漫々なる波又波の上に日を重ねて或は暴風に遭ひ、或は方位を失ひ、遂に食盡きてはてんやも知るべからず。されどもケドマスの同勢は如何なる艱難をも辭せざる覺悟なれば、恐るゝ所なく漕ぎ出しぬ。

數日の後サイプラスといふ大きなる島に着きければ、ケドマスは王女の消息を尋ねんとて直ちに上り行きぬ。さて島人は親切に彼れをもてなしけれど言語更らに通ぜず。やう〳〵手まねなどして王女や白き牡牛を海上に認むること無かりしかと問ふに、島人は皆頭を掉りて整しく西の方を指し示しぬ。

ケドマスは船にかへりて又西の方へと漕ぎ出しつ。これより西は多島海と呼ぶ海なれば小き島々いと多し。ケドマスは一つ〳〵に船を寄せて妹の

消息を尋ねけれど、一人として知れる者無し。行き〳〵て遂に希臘の國に着きぬ。ケドマス同勢と共に例の如く上陸しつ。この國今纔かに開けしばかりにて住民も多からず。ケドマスは先づとの語をは習ひ覺ね、さて市より市へと遍く巡り行きて王女の行方を尋ねしむること數年に及びぬ。

(二) デルファイの巫女

或日一人の老人ケドマスに教ふるやう。御身ユーロパの行方を知らんとならば、デルファイに行きて彼處の巫女に尋ぬべしと教へけり。ケドマスは「デルファイ」といひ「巫女」と云ひ未だ聞きしことと無き名なれば、そは如何なる仔細ぞと問ひかへすに、老人、

「デルファイとはパルナッサスといふ高山の麓になる市街なり。この山世界の中心と稱せらる。光の主アポローの大神遠の昔彼處に怖ろしの蟒蛇を屠りてそこに神殿を建てたまふ。デルファイは即ちその城下なり。神殿は世界一の靈蹟と稱せらる。內の廣間の中央に大きなる裂目あり、地底の磐石を劈きてその深さ測り知るべからず。異しの氣その裂目より立ち騰りて、これを吸へば忽ちに昏絕す」といふ。

「いでその巫女とは如何なるものぞ。」とケドマス急きて尋ぬるに、老人答へて、

「巫女は神殿に奉仕せるいと尊き婦人なり。人々就きて大小の事を問へば、彼れ三脚の床几を彼の裂目の上に据ゑ、自らそれに乘りて、立ち騰る靈氣を吸ふに敢て昏絕すること無し。かくて遙かにアポローの大神と物語してその神意を承く。靈現いといやちこなれば世界の人々遠きより近きより來るもの日に絕えず、齎し贈りたる黃金寶玉の類殿內を耀せり。さて時として明らさまに神意を告ぐることあり、又時としては寓言隱語を以て告ぐることあり。されども的に中りて錯らざるは一なり。」といふ。

ケドマスは悅びて老人に謝し、直樣デルファイへ

と向ひ行きぬ。さて神殿に詣でゝ巫女に會ひ、來意を告げて齎らしたる黃金の盃を贈りけるに、巫女は快く承引つ。やがて三脚の床几を土間の裂目の上に置きて、地底の靈氣を吸ふに、顏色見る見る蒼白となり、目は爛々と輝きていたく苦しげなる樣なり。ケドマス問ふ、「ユーロパの行方は何處なりや。」

巫女儼かに答ふるやう、「ヂュピタアの大神白き牡牛となりてユーロパを率ておはせしなれば、もはや王女を尋ねるの要なけん。」

ケドマスは驚き悲み、「あはれ我れは何とかせん王女に會はずして再び父の國には歸られざるものを。」といふ。巫女は聞いて頭を掉り、

「いやとよ、御身の父は既にみまかり賜ひ、他國の領主入りて朝に臨めり。御身は希臘の國に止まらざるべからず、この地にて御身の爲すべき事こそあれ。」といかにも仔細のありげなるに。ケドマスは重ねて、

「我が爲すべき事とは何事なるか。」と尋ぬれば、

「されば、白き牝牛の後に尾きて小山を上り牝牛膝を屈げて伏したらん處に御身は一つの市街を建つべし。あなかしこ〳〵。」

とて、ケドマスの其の意を尋ぬるに答へもせで、巫女はそのまゝ立ち去りけり。

ケドマスは不審に堪へねど、これぞ彼の寓言隱語の類なるべきと心に思ひて、やがて神殿をぞ立ち出でける。

(三) 火龍

ケドマス神殿を出でゝ行く事未だ幾許もあらざるに、一頭の白牛途に立ちて戲れを待てり。柔和なる茶色の眼を擧げてケドマスの面を視、やがて向き直りて徐かに步みぬ。巫女の語りたる白き牝牛とはこれなんめりと思ひて、兎も角も後に從ひ行きぬ。寂として人影無き曠野の中を一日一夜の間步み行きつ。彼の二十人の勇士のうち大方はあとに殘してたゞ二人のみ從へり。

かくて夜明くる頃小山の頂に着きぬ。右には茂れる林あり左には青き牧場ありて景色いとよき處なり。牝牛は此處まで來りて、足を留めて草に臥しぬ。

ケドマス「これ我等が市府を造るべき處ならん」とて、やがて二人に命じて枯枝を集めて火を炊かせ、自らは彼の牡牛を屠りけり。そはこの肉を炙りて香大空に騰りたらんには、デュピタアを始め山上の神々必ず善しと享けたまひて、三人の新しき事業を妨げたまはざるべしと思ひてなり。

さて肉を洗ひ手を淨めんとするに水無ければ、一人の從者を麓に下りさせて小川を求めしむ。然るに彼れ行きたるまゝ久うして歸り來らず、いと心もとなければ、また一人を遣はしそのあとを尋ねしむ。

かくてケドマスは追々に消えなんとする火を守りて二人の歸り來るを待てり。されど二人は歸り來らず、待ち〳〵ける程に日ははや午に上りぬ。

聲を揚げて幾度か呼べども應ふるものは谷間の木魂のみ。是に於てケドマスは覺悟を極め劍を拔き持ちてまたも麓に下り行きぬ。

さて二人が行きたりと思はるゝ跡を求めて下りける程に、間も無く一つの泉の邊りに來りぬ。間近き林の中にて物の動く影あり。瞳を定めて熟く視れば怖ろしき火龍にして、ケドマス寄らば飛びかゝらんと巖の蔭に待ちてあり。大地の草に血痕の斑々たるを見れば問はずして二人の從者の消息を知るべし。

火龍は遂にケドマス目懸けて飛びかゝりぬ。王子の五體鋭き爪にひき裂れしかと見るまに、こなたは危く身をかはし、劍を揮つて發矢を一打火龍の頭を打てば、闇血煙の如くに湧きて怖ろしき叫びの聲もろとも火龍は韲と地に仆れぬ。

ケドマス火龍を倒してよくその形を視るに、怖ろしの姿有樣今更に身の毛もよだつばかりなり。さて二人の從者のはかなき最期を憐み、且つはそ

の身獨力にして如何にして市府を營むべきかと心細さはいふばかり無し。

四　新市街

斯くてケドマス獨り歎き居ける折しも、何處とも無くその名を呼ぶ聲あり。驚き立ち上りて四邊を見るに、岡の半ばに丈高き婦人、頭に兜を戴き手に楯を携へて立てり。眼は瀟洒にしてやさしく顏は美しとにはあらねど極めて崇し。これ空氣の司にして人に知慧を授けたまふアセナの女神ぞと推せらる。

アセナはケドマスに向ひて宣ふやう、

「やよ勇士、徒らに歎きてあらんより、その火龍の齒を拔き取りて地に蒔きね。いやとよ惟むを休めて我が敎へたる如く試みよ。新しき市街を造るに助けとなるべき人を得んこと疑ひあるべからず。」

と宣ふ。

ケドマス喜びて謝せんとすれば、女神の姿はいつしか消えて影だにも無かりき。

不思議の神託にケドマスは驚きながら、劍を以て火龍の口を剖きて齒を採り集めけるに、その數いと夥しく、兜に盛るに溢れなんとす。さて蒔くべき地を選ばんと泉を後にして行くこと未だ遠からざるに、若干の牛など輒に羣りて廣き草原の中に立てり。近づき見れば鍬、鋤、大鍬、なんど餘す所なく備はりて人の使ふを待つもの〳〵如し。神の與へと大きに悅び、ケドマスは直ちに此の牛を追ひて地を耕しつ。土は黑く柔らかにしていと肥えたり。心の儘に長き畝をいくつと無く作り、さて彼の火龍の齒を一つづゝ畝に置きて和かに土を被けつ。

かくて盡く蒔き了りければ、小山の邊りに坐を構へて徐かにその有樣を眺め居けるに、幾程も無く畝の中なる土少しづゝ動く樣に見ゆ。暫くにして草の芽の如き光あるもの頭を現はしぬ。そは黃銅の兜なり、この兜先づだん〳〵に地上に出で、やがて人間の顏出で、次ぎに肩出で、兩の手出で

全形遂に悉く出でぬ。驚くべし、蒔きたる齒はかくて皆人間となりて表はれ、その數總べて百餘人の牡馬手に長鎗を執り弓手に楯を支へ、一時に武者振ひして立ち揃へる姿、勇ましなんど言ふばかり無し。

ケドマスも餘りの事に驚きて暫時せんすべを知らず。よく〳〵見れば相貌何れも逞しく、闘を好む姿一目に著く、若し我れを見なば來り殺さんは必定なりと思はれければ、すばやく耒耜の蔭に身を潜ませ、ありあふ石を拾ひて矢つぎ早に投げかけたり。戰士等はこの石の何處より來りしかを知らねば、遂に栢咎めて鎗を揮ひ、見る〳〵一場の亂戰起りぬ。かくて一人斃れ、二人屠られ、殘る者僅かに五人となりければ、ケドマス即ち小蔭より立ち現はれて聲を勵け、

「やよ無益の闘なせそ。おこと等は皆我が部下なり。我と共に來りて市街を建つべし。」

と呼はりけるに、皆々バタと鎗を投げ棄て、戰を止めつ。斯くてケドマスに隨ひて小山を上り、彼の牧場に行きて力の限り働きつつ、數日を出でずして曩の牡牛の止まりたる處に一つの家をうち建てけり。

さて次々に數多の家を建て列ね、遠近の民どもを移り住はせける程に、程なく一つの市府となりぬ。是に於てケドマスその王となり、市府の名をケドミヤと定めつ。この市後に至りて大いに盛大となり遂にシーブスと改名しぬ。

ケドマスはいと賢明の王にして、デュピタアを始め山上の神々に愛せられ、加護を受くる事一再ならず。やがてマアズ神の御女にてハアモニヤと呼べる美人を娶りて妻としつ。この時彼の神々は來りて婚儀に列せられ、就中アセナの女神はいとも妙なる頸飾を新嫁に贈らせられき。(この頸飾につきて後の章に物語あり。)

さる程にケドマスはいと幸福になりければ、親しく市民を集めて文字といふものを敎ふ。これ希

臘文字の始めなり。その時第一の字を「アルファ」と云ひ、第二の字を「ビータ」と呼ぶ。故れ今に至るまで國々の文字を「アルファベット」と云ふなりとぞ。斯くて希臘の人々普くこの文字を傳習し、自由に物書き物讀む樣になれりければ、やがて書物といふものも出で來にけり。

* * * * *

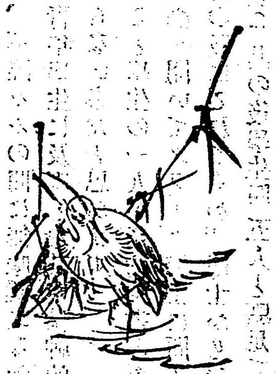
さても彼の王女ユーロパは、海のあなたに失せにしこの方、杳として竟にその姿を見ず。デュピタア白牛となりてそを連れ行きたまひしなれば、人の知らぬ國にてこれも幸福に生を送りしは確かなり。その國今に至るまで王女の名に因みて「ユーロープ」(歐羅巴)といふ。王女の國人に愛敬せられしこと知るべきなり。

(註)

(一)ケドマス及ユーロパ——フィニシヤ王 Agenor の子女なる由一書に見ゆ。この邊の傳說多少事實もあるべし。ユーロパはその後デュピタアの間に數多の子を擧げしとなり。

(二)サイプラス——小亞細亞の有名なる島。王女はそれより遙かの西方クリート島に連れ行かれしなりと。

(三)アルファベット——ケドマスの傳へたるは本國フィニシヤの文字なりしならん。



半面の新渡戸博士

遥幼生

いつも〳〵古煤けた鎧冑をつけて鋼刀でもふりまわす様な佶倔な筆で、鹿爪らしい肩の凝るやうな事許りかきならべて諸君を苦しめたから、今號にはちと風變りな、讀んでゐる諸君も思はずにつこりなさるやうなものを御話しやうと思ひましたが何も考へ浮ばない、とう〳〵こんな題を掲げて埋合をする事になりました。いづれも眞面目な興味津々たる諸講師先生の御講話の后に、時たまにはこんなのを讀んでも、爲めに食あたりする様な事はあるまいと思ひます。

新渡戸博士は札幌農學校の出身です、一体札幌農學校は隨分異色の人物を出して居ります、學校を出てからの經路が往々にして專門以外、寧ろ毛色の變つた方面に成功してゐる人が多いやうです是れは、はじめて北海のはてに教育の新天地を拓いたクラーク博士の人物が、さすが剛情我慢の黒田伯をも屈服させた位氣象の勝つて居た人だけ、其の神につける信念が飽くまで高く清く、おのづから其の身邊より盡きざる泉のやうに流れ出づる靈的感化が、不識々々の間に無味雜駁な教科書や講義以外に青年學生に及ぼした其の精神的教育の結果に外ならない事だと思ひます。

ある時のこと學生の一人が新約聖書の馬太傳五章山上の垂訓を開いてクラーク博士に問ふていふのには基督の教はこれですか。博士おもむろに頭をふつて曰く其の後學生四五人と騙足で藻岩山に攀り、また騙足で山を下りてさていふには、わが基督教は實にこれである。博士のいふ所は丁度こんな具合でいつも人の意表に出る事が多かつたのです。其の博士が播いた種のうちでも殊に肥沃な地に落ちて、最も美くしい實を結んだのは即ち世界の植物學者として有名な宮部農學博士（金吾）工學界に於いて盛名隆々たる廣井工學博士（勇）そ

れに博渉多識天下稀に見る所の新渡戸農學博士、（稻造）の三氏でありませう。各々專門の學力はいづれ勝り劣りはありますまいが、其の學問の博い精しい點からいへばまづ指を新渡戸博士に屈しなければならないと思ふ。博士號そのものが必ずしも尊いではありませんが、然し、日本の農學博士ばかりではなく、英、米、佛、獨、伊の各國至る處で、哲學、醫學、文學、農學の各方面にわたつて皆其の蘊奥を極め、博士號ばかりでも三つも四つも持つて居るといふ其の精力に至つては驚くの外ありますまい。

三博士はいづれも農學校の第一期の卒業生で、眞先に外國留學を命ぜられたのもまた此の三博士でした。米國留學中に新渡戸博士に就いておもしろい話があります。

博士がハーバード大學に文學を修めて居た時の事でした。ある日教會で何の集會であつたか忘れましたが一つの集會が開かれた。隨分盛大な會合で各國人の集つたものも少くありませんでした。

英國人、亞米利加人、佛蘭西人と、各々其の國を代表してやる事ですから、いづれ天真爛漫の其の特色が現はれて、滑稽顎を解くものもあれば、謹嚴襟を正して聽くやうなのもある。コスミテックで髪を美麗にわけて、香水のかほりがむせるやうなハイカラ男が壇上にあらはれたと思ふと、今度はまつくろい髯の中から眼ばかり出したやうないかめしい男が、黄ろい聲を出して懸河の辨をふるふといふ有樣。さあ最後に當つたのは日本人。其の時列席して居たのは新渡戸博士の外に宮部博士に廣井博士の三人っきり。こちらでは大爭ひだ、貴樣やれ、いゝや君がやれ、僕はいやだ君こそと、

互に讓合つて暫く爭つたがとう〳〵負けて引張出 蔑の眼で色々と批評して居ります。こちらは新渡
されたのは新渡戸博士でした。宮部博士は植物學 戸博士、もう懸命の仕事です、うつかりした事を
廣井博士は工學といふので、話してもあまり面白 いつて拙劣に失策つてはつまらないから是れは一
く成るまいが、それに三人中でも新渡戸博士が一 つ破天荒の日本神代史を述べて赤髯どもを驚かし
番英語をしやべる事が得意な上に、其の修めて居 てやれと、まづ度胸を据へる積りで會衆をずつと
る學科が文學といふので、新渡戸博士が無理やり 見渡したが、不思議に眼は薄霞でもかゝつたやう
に引張り出された譯です。博士とてもまだ二十代 にぼんやりとして何も見えない。もう觀念の眼を
の事であるから、いくら英語が出來るといつても 閉つて、さて說き出す神代のまき、天の窟戸の古事
まだ萬人稠座の前に現はれた事なんか且つてない から、素盞嗚の大蛇退治、さては大國主命の出雲を
のであるから、さあ心配で心配でたまらないので 平げた昔話から三種の神器のいはれに至るまで、
す、胸は早鐘をつくやうに動悸がうつ、手足はわ 例の流暢なる英語でもつて口まかせに滔々として
な〳〵と震へるといふ始末。そのうちに愈々亞米 述べ來る事約そ一時間ばかり。さすがは此の方に
利加人（だつたと思ふ）の演說が終つて聽衆はいづ かけては博士はくわしい、殊に詩的の眼光から見
れも次の辯士は誰であらうと鳴りをしづめて演 とうした神代史がおもしろくない筈がない。聲は
壇を見詰めて居る。ところへちよこ〳〵と顯れい 焦つて居るが聊かも淀みがありません。さあ外國
でたのは身躰の比較的に小さい色の黑ろい當時の 人は皆なびツくりしてしまつた。どうしてあんな
新渡戸博士です。『何國人だらう？』『さうさな、 ちつぽけな身躰をして居ながらあんなにうまく嘘
日本人だらう』『どうも小さいな』など、赤髯は輕 舌れるのかと、いづれも眼を白黑――ではない

白碧にしながら見戍つて居る。併し博士にはそん なところではありません、自分ではもう何を言つ て居るかわからない位、とう〳〵どうにか論を結 んではつと息を吐いた時には油汗が一斗二升、折 角のフロックコートが代なしになつたとこぼした かどうか、それまでは知りませんが、滿場わる〳〵 やうな大喝采も冷評されたのやら、讃められたの やらまるで夢中であつたそうで、そこそこにホテ ルに逃けかへつたそうです。

其翌日になると驚きました。さすがは米國人、 そこに來てはえらい、ちつぽけな島國根生なんか 是れんばかりもない、人の美德を見てはどこまで も賞讃の言葉を惜まないのは米國人の特色です。 その點は日本人なんか誠にお恥しいものである。 惡い事でも聞付けやうなら針程の小事も棒程に吹 聽する癖に、善い事になると、僅かに『其の心情 感ずべし』位が關の山、心細い限りでありません か。閑話休題、其の朝の新聞を見ると驚いた。而

も第二面に日本ならば二號活字かなんかの題號で 日本新渡戸留學生の大演說と題して、一段二段を 惜しげもなく埋め、其の態度といひ、其の流るゝ やうな辨舌といひ、天晴れ當日第一の演說であつ たと口を極めて賞讃してゐるではありませんか。 博士は思はず冷汗を流したそうです、それから他 の二三種の新聞を取りよせて見ると、いづれも同 樣の讃辭を連ねて居ないのはない。ある新聞なん か當日の博士の態度を書いて挿んだものもあつた 位、町の處々に同樣の揭示がある。さあ留學生で は大評判となり、博士の顏を見ると『やあ新渡戸 君御目出度ふ、おめれ〳〵』といふ具合で散々に 油を取られた上に飛んでもない散財をさせられて 博士も閉口したさうです。博士の名は米人間に大 層評判よく、交際社會に博士を知らない人はない 位だつたそうでした。

つでい其の年の基督聖誕祭には教會の人達か ら、是非〳〵新渡戸さんの演說を聽きたいといふ

懇望で、再び壇上に上る事になりました。其の頃はもうそんなに恪々しない、あの位で讃められるなら、なにといふやうな譯で、博士も喜んで承諾されたのです。何しろクリスマスといつても日本の教會のやうに小供ばかりではない、雲に聳ゆる大會堂に於いて二千人もある紳士、貴婦人を相手にしてやる事だから博士の得意想ふべしです。題は日本の中古史で、後年博士が世に公にせられたあの『武士道』といふ書にあるやうな事を二時間もぶつとうしに、艶をつけ油をかけて建板に水をかけたやうに演べられたのです。聽衆は殆んど感に入つて一人の倦きた人もなかつたそうで、壇を下りる時には、さすがの大會堂もゆるぐばかりの大喝采であつたそうです。

翌年は愈〻大學を卒業して、更に志を決して獨逸に向ふ事になりました。そこに面白い――ミルトンではないが、紫の靄の一頁があるのです。

ある日の事、宿に博士あての一封の手紙が屆い

た。怪しみながら開いて見ると、其の中には百五十弗（だつたと思ふ）の銀行小切手がはいつて居りました。其の文面は極く簡短なもので、唯一通りの挨拶だけ、承はれば愈〻獨逸へ御留學になるさうでかげながら喜んで居ります。聞けば獨逸は寒い國だそうですから、決して御身体を無理にしない樣に願ひます。別紙小切手は少〻御坐いますか、毛皮裏の外套と防寒靴を買つて下さい。今は名は申上げませんが、いづれ御成業の後は亞米利加にお立寄りなる事だらうと信じますから、其節は父と同道御目にかゝりませうといふやうな極めて淸いものでした。女といふ事はわかりましたけれども其の人の誰なりやはさつぱりわかりませんかつた。併し人が厚意で送つて呉れたのですから博士は喜んで是れを受け、早速と例の毛皮裏の外套と防寒靴とを買ひ求め、其の餘のものには少しも流費しなかつたそうです。

其の後二年ばかりして獨逸の大學を卒業し、米

國に立ち寄りました時に、早速と一人の父とも見ゆる年輩の紳士と共に博士を訪問して來た一人の貴婦人がありました。これが別人ではない、クリスマスの演說から博士を知り、留學中に無名の手紙に百五十弗の小切手を添へて送つてよこした其の婦人であつたのです。父は市の有名な旅宿の主人で其の婦人は其の宿の一人娘でした。これが緣になつて其の父なる人から是非養子に來て下さるやうにとの事でしたが、博士は新渡戶家を嗣ぐへき人故その由を申して斷りましたら、それではどうぞ不束なものですが娘を娶つて下さるやうにとの事で。そこにはじめて目出度く結婚の大禮をあげる事になつたのです。御斷りして置きますが此の話はふるい頃聽いた話しですから多少違つてゐる處あるかも知れませんよ。

札幌農學校に敎鞭を取つて居られた時分の博士を知つて居る諸君は、午後の三時頃になると、みをりしたゝるやうな木影から、花の樣なその美くしい夫人と携へて睦しげに校門を潛つてゆく博士を屢々見た事と思ひます。夫人は顔が美くしい許りでなく、學識も大學出の文學士で、ごく〳〵優さしい淑德ある婦人なのです。可愛らしい名刺には日本字で新渡戶まり子と書いてあります。

博士は今臺灣總督府に奉職して居られます。極く温厚な、眞摯な基督敎的紳士で其の品性の美しい事は、出ては敎壇に倫理の大本を說きながら、かげにまわつては敎科書の周旋で賄賂を貪る滔々たる僞敎育者間に於いて、稀に見る所の模範的人格を備へて居られるのです。今の世に於て博士の樣な高潔な人格を見出し得る事は學界の爲めに大に慶賀すべき事であります。自分はわが會員諸君のうちから博士の樣な人格ある紳士が續々出でん事を切に祈つて居るものです。

中學日記

披露 第十回

今月は少しく締切を早くしたので集つたのは三十幾枚、一番嬉しく思ひましたのは大方の諸君が記者の注意に基いて字体をきれいに書いて下すつた事で特に德川、梶川、秋田、長繩、松井、原、小松、奥、深尾、中山、門脇、美土路、下島、和田君及び鎌瀧憲一、齋藤信義の諸君のは誠に奇麗でした、選外で面白く讀みましたのは白星、下島、央合志、松下、高橋、德川、秋田、長繩、松井、小松、深尾、中山、門脇の諸君でした。次號にはもつと澤山に願ひます。

三月一日しるす

如月

立ちかへりまたきさらぎの空さへて　　爲綱朝
天ぎる雪に霞む山の端

初午（十一日）節分（二四日）紀元節（十一日）
仁孝天皇祭（廿一日）

七日（土曜日）

滋賀縣八幡　梶川新吉

來週の今日は發火演習があるといふので今日は其豫備演習があつた、自分は假設の敵となつて赤旗を持ちながら林の中に隱れて居た、すると丁度三名斥候がやつて來たので愈々息をこらして待ちうけるとも知らず恰も眼の前に來たと思ふ頃突然旗をふりまわして飛び出したので、斥候め驚くまい事か一目散に逃げて行つた、間もなく兩本隊の衝突があつて此日は中止になつた。

午後三友と安土の城跡を見にゆいた、大手口より入り家康の屋敷跡に建てた某寺で地圖を求めて本丸に入り御臺所を通り天主臺の跡にたつた、前は廣々な平原で後は洋々たる琵琶の湖である、思ふ

昔關八州になり響いた名將軍の當年の意氣はどうであつたらうか。もし里を隔つる觀音山と相應じて戰ふならばなど打かたりながらぶらり〳〵とかへつた。

孤城落日長し、孤客ひとり佇む縞々の情……（村）

十八日（水曜日）

福岡縣筑紫郡春日村　原　謙三

七時起床、風寒くして時々糞がふる。

戸水博士の羅馬嫁時貸資より一五〇頁迄と數學を二時間許り調べたので昨日着いた中等教育を讀んだ。第一番に繙いたのは『天籟』である、雄渾そして一種人を魅する底の才筆に紹介せられた大詩聖ミルトン！自分は勘からぬインスピレエーションに接した、未だ忘れぬのは『馬蹄の響千古の波音』だ、矢張同先生の筆だらう、中學日記中の齋藤君のは實に一の美文である、自分のは叙事的で趣味に乏しかつた事を覺つた。

午後從弟草壁才吉來る　聽けば視神經乳頭炎とかで學校もやめたとやら、あゝ天はなぜこんなに無情だらふ自分が仝じ眼病で中學を退いたのは一昨々年である今全癒したとはいふものゝ何やかにやの事情で學校にも入れず獨學自修、早稻田の入學試驗を受ける許りに斯迄に苦心しておるのだ、それを思つても前途有爲なる少年が心にもない眼鏡をかけて遊んでおる心中が察せられるのである、此夜不幸なる從弟の爲めに嘗て經驗した養生法などを敎へて十時頃床に就た。

あゝ忌まわしい病魔！お互に前途に期する所多きわれ〳〵は一層注意しなければならぬ事と思ひます（村）

五日（木曜日）

大阪府南泉郡田尻　奥　健藏

朝七時起床、九時出勤、

昨日の夜遊にて今朝はまた何時にない朝寢坊、時間割の日課も出來ず僅か豫算表一部を書きあげた許りで朝飯の箸を措くと其の儘大急ぎで役場に出ると豈計らむや重役は唯一人も顏が見えない、小

便先生も悠々寛々たるもので今漸く火を焚きかけた處である、取り敢へず暖を取りながら例の帳簿を繰て居るとやがてぼつ〳〵外の連中もやつて來たが皆老人許りで話しにならないので自分はこつ〳〵千遍一律の仕事に從事して四時の退出を俟ち兼ねた、中食後の休息時間に往復はがきで關西商工學校あて生徒編入試驗の件に付き不審のかどを照會した、遲くも明後日の午前には返事が來るであらう。

チン〳〵〳〵そーら四時だ。驅足！

（はつきりしていやみがない（村））

十六日（月曜日）

東京麹町區下六番町一、草間時由

學校より歸宅後中等教育第十一號を讀んだが松浦清吉君の中學日記を見てそぞろに我兄の事を思ひ出したのである、兄さんが大坂の兵營に入營せられたのはもう三年の昔である、此間の苦しさ辛らさは實に思ひやられる、加之昨年の夏守備隊として渡台（台中）せられた此方は堪れぬ氣候の殊には金をとかす暑さの晝中の練兵はどんなに辛らいだらう、あゝ兄さんよ、此の夏をも健康に過ぐしどうぞ目出度歸郷してお父さんやお母さんや私共に逢者な顏を見せて下さい。我々は日々兄さんの歸郷を俟つておるのである。

あなたが兄さんを俟つてお出のやうに兄さんもまたあなた方を思つてお出でせう、ふら〳〵と流れる朝の雲、あれ御覽なさい、一旦はわかれ〳〵にちぎれるけれども末はまた一所に會つて流れてゆく、三千里外人の思はどこしへに通つております（村）

十三日（金曜日）

福島縣河沼郡堂島村、齋藤信義

朝の程風少しくわりしも十時頃には和きて空もまたよく霽れたり。今日は陰暦正月十六日に相當し世俗地獄の蓋さへ開くといひて都も遠き鄙の習、凡ての生業も休みて樂しき日なれど授業は前十一時にて終りぬ。午後零時半より招せられて編入會

に出席しぬ、會員の集る者十九名客員の臨席せるもの五名。山田三郎氏（離婚に付き）鈴木德馬氏（爪の衛生談）荒川忠次氏（坤道）等各流暢なる雄辯もて耳新らしき說を述べられ、會員は頗る趣味を以て清聽されたり。後は茶話會に移り、此間予も亦切に強いられて貞婦服部香遵女の逸話を語り僅かに責を塞ぎぬ。四時閉會。

夜、今日故郷の弟より上京したしなど言ひこせる手紙に對し、我が知れる限に於いて都會といふものの好き處に非ず、血氣に逸りて輕擧一身の方向を誤るなからむ事を望む旨細々〳〵返書認めぬ。折節七時半頃にやあらむ外面に人聲喧びしきに障子押し披けば部落々々の若衆どもサイノカミ祭とかにて門松〆飾など集めて燒ける也。

米澤なる友一葉子今月中に歸省すべき用向出來たれば不日訪問すべしと美くしき繪はがきにて嬉しき便りいひこしぬ。あはれ相見る日の俟るゝ哉。

いつもながら兄上の懇々の御敎言誠にありがたく、自ら省みて今年の上京はふつりと思ひ留り申候、御安心被下度…（村）

新刊紹介

●**失樂園物語**（繁野天來氏編）　通俗世界文學の第一編として坪內博士の校閱を經て發行されし本書は、彼の名高きミルトンの「パラダイス、ロスト」の實質を味はしめんとて最も平易なる散文を以てものされたれば、世の「パラダイス、ロスト」の名のみを知りて未だ其の原文を味はざる人々には勿論、同樣にまた家庭の讀みものとして最も有益なるものなるべし。紙質、製本ともに精巧を極め、且つ卷中の挿畫は佛の名匠ドールの作にかゝるもの、爲めに一段の精彩を添ふるものあり。（定價二十錢、東京神田表神保町九番地合資會社富山房發行）

●**沙翁物語**（杉谷代水氏編）　同じく通俗世界文學の第二編としてシエークスピーアの劇中エリマクベス、テムペスト、ツエルフス、ナイトの三編を選び最も平易なる原文一致の文體を以て其の要最を紹介せるもの、卷中の挿畫も亦たそれ〴〵知名泰西畫伯の原畫に基きて最も精巧を極めたり。（同上）

●**青葉若葉**（繁野天來氏編）　遽きに發行されし杉谷代水氏の「學童日誌」にひきつゞき春陽堂より發行されし敎育小說なり。

エッヂワース女史の作に基き翻案せるもの、上下二卷に分かたれ、上卷にはストライキ、白鴎館、夢物語の三篇、下卷には京人形、偶勉強家以下五篇を載す、頗る面白き讀みものなり。挿畫は一條成美氏の筆にかゝる。（定價各三十錢、東京日本橋通四丁目角春陽堂發行）

●米國教育制度（納富忠一氏著）　この書は我が日本の學生にして米國に留學せんとするもの、案内として、また我が學制改革家の參考に供せんとして著述されしなりといふ。筆を教育の發達に起し、米國政府と教育に結ぶ。（定價四拾五錢、東京麹町永田町二丁目二十九番地納富忠一氏發行）

●教育學　言文一致普通學全書の第九編として富山房より發行されたり。上編には教育の理論を説き、知、德、体三育のことを述べ、下編には教育の方法を説き、管理、訓練、教授のことを述べたり。（定價二十錢）

●袖珍名著文庫　これまた富山房最近の計畫にかゝる叢書の一にして、高尚なる娯樂、健全なる文學を一般の家庭に注入して徐に之れを導かんの意、わが先達の間に急にして此の叢書を成しぬとぞ。その第一卷は幸田露伴氏の校訂にかゝる『芭蕉翁繪詞傳』にして句集をも附載せり。体裁はカツセルのシリーズに倣ひ最も目新し。（上製廿八錢、並製廿錢）

日記

月　日　曜日

學校にて

家庭にて

（和文英譯）……點滴石を穿つ

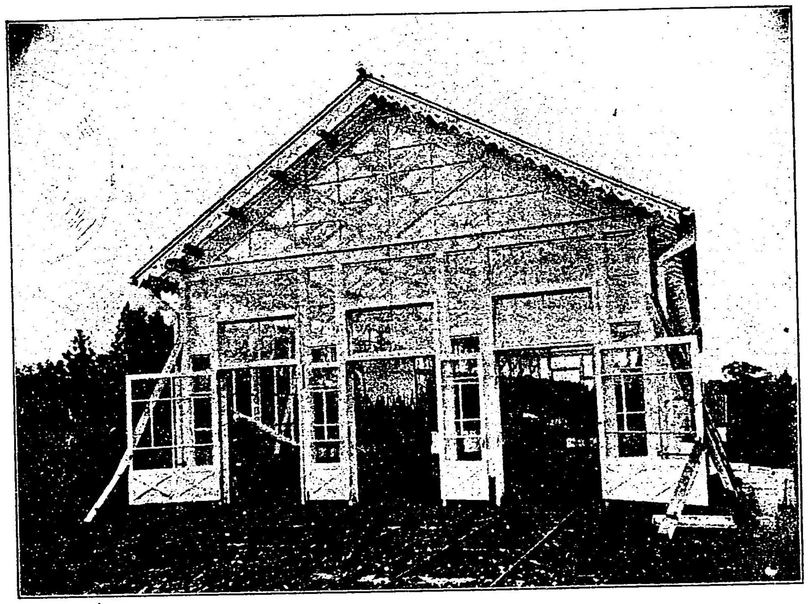
有の英譯……

Better be the head of a dog, than the tail of a lion.

（以上の和譯）……

姓名　　年頃

東京帝國大學農科大學



同　上　温　室

「中學日記」認め方

日々の日記を其の都度認め置き、他日の備忘に供するとの必要なるは、殊更に云ふまでも無し。吾人は、既に其の必要を感じて日々の日記を認め居らるゝ學生諸君に向かひては、愈々之を勵行せられむことを望むと共に、未だ日記を認められしことあらざる諸君に向かひては、一日も早く之を實行せられんことを望むこと切なるが故に、其の奬勵の微意を表せむとして、爰に「中學日記」を募る。其方法次ぎの如し。

一、此の紙の表面に印刷せる「中學日記」欄内には、諸君が日々各自に認めらるゝ日記の中比較的に記憶すべしと認めらるゝ一日の日記を選び、事實を飾らず、有りのまゝに認められたきこと。

一、和文英譯、英文和譯の問題を添付したれば、日記と共に其の譯文をも認め送られたし。但し、和譯の文体は、雅文、俗文、言文一致などの孰れを取るも隨意たるべきこと。

一、日記及び和英譯文共に最優等なる分をば特に之を本誌に掲ぐべきこと。

一、此の「中學日記」用紙は毎號これを添ふべく、而して、十二ヶ月以上繼續して毎月此の日記を送られし諸君に對しては、特に、その名譽を表彰すべきこと。

一、應募期限は、來月十日を限りとすること。

一、住所、姓名、及び、月、日、曜日等必ず明瞭に認められたきこと。

一、早稲田大學出版部内中等教育會宛にて送付ありたきこと。

古河市兵衞氏と淺野總一郎氏

白鳥九二

鑛山大王と呼ばれた古河市兵衞氏と、商界の健兒として知られた淺野總一郎氏とは此の程相前後して物故したことであつた。

古河市兵衞氏は勿論のこと、淺野總一郎氏と雖も、共に蘇峰氏の所謂『煩惱界裡の慈仙』であつた、而かも、その唯だ煩惱界の一慈仙たるに留り、肯て高尙な理想がなかつた爲めに、屢々世の誤解を招けば、非難を受くることも尠くはなかつたのであつたが、併し斯く高尙な理想はなかつたが、決して守錢奴ではなかつたのである。

古河氏といひ、淺野氏と云ひ、共に其の一生に少なからぬ浮沈があつた。而かも、兩者共に進取の氣象に富み、商機を見るに敏捷に、事業その物に向つては、殆んど無窮を趁ふて進んで行つたところが即ち彼等二人の大なる價値あるところであつて

古兎角小成に安ずる世の中、河移り氣の多き世の中、腰を市抜かす世の中、齷齪たる世兵衞の中に於て、このように度氏胸を据へ、堂々と仕事をして行つたところは如何にも頼もしく、また男らしく、

古河市兵衞氏と淺野總一郎氏

この邊のところが確かに、立志篇中の一人物たるに價値して居る故に、聊か本誌の餘白に、出來るだけ簡單に、その生前の一般を叙することも、決して無用であるまいと思ふ。

古河市兵衞氏

▲その幼時

古河市兵衛氏は京都の近郷岡崎村の出である。その家は木村と呼ばれ、世々代官役を勤めて居たのであつた。が、しかし、彼の父なる人は義俠心があり慈善の心に富んで居たが、その更り妙に豪傑風があつて、素行が修まらなかつたが爲め、遂に豆腐屋とまで零落したことであつた。

市兵衞氏は、まことに、此の人の次男である。然るに彼れ幼にして母を喪ひ、その上繼母の彼を待遇すること甚だ厚くなかつたが爲め、祖母なる人は深く之れを憫み、遂に京都の縫箔屋に奉公させることにしたのであつた。此の時、彼れは生れて唯だ九歳。

彼れは一年有餘、この家に止つて居たが、京都の商家一般の慣習は、奉公人に對する衣食の供給が甚だ薄いことであつた。それ故、父も其の情を憫み、遂に暇を乞ふて郷里に伴れ歸つたのであつた。

さて、彼が、かく再び其の郷里に引きかへしてからといふものは、他にせん方もなく、自分の弟と共に豆腐の荷を肩にして、日毎に近郷を行商して、その賣り上げ高百文について四文ゴヽの目錢を貰ふのを此の上もない樂みとして居たことであつた。かく、日々行商して歩くうち

『今に見よ、天晴れ名を揚げ家を興して、世間の奴原に一泡吹かせて呉れよう』

といふ、大決心、大奮發心を起すべき原因となつた一つの出來ごとに、彼は出會したことである。その出來ごととは……。

一日例によつて、彼は白河邊へ行商に行かけた

途中、一丁の駕輿を馳せて來るものがあつた。その駕輿があまり急ぎ足で來たので、彼はそれを避くる暇がなく、あなや、と思ふ間、忽ち輿丁に衝突して其の荷を覆へされたことであつた。それが爲めに、彼は荷を覆へされる。散々な目にあつたのである。それで市兵衛大に怒つて之れと詰つたけれど、輿丁等は彼の年少なのを侮つて可かず、反對に罵りかへして立ち去つたことである。そこで、彼は力及ばず、泣く〳〵して歩いて行き、纔かにそれを賣り盡すことが出來たことであつた。かく屈辱を蒙つたといふのが、子供心にも深く彼の心に染みわたり。

『斯く屈辱を蒙るも、畢竟わが營業の卑しく、家が貧しき爲めであらう』

今に見て居よ……と、これが即ち奮發心の大動機となつたのである。

古河市兵衛氏と淺野總一郎氏

▲青春時代

市兵衛氏、その年十八歳といふに、その年の秋例の目錢の貯蓄三分二朱を懐にして、その兄なる木村利助とて、當時盛岡にて勘定奉行を奉ぜるものをたよつて郷里を辭し去つた。これぞ、まことに、豆腐屋小僧が一躍して礦山大王となるに至れる第一歩であつたのである。

彼の長所は何かと云へば、所謂『根』――尋常一樣ならぬ氣根であつた。彼は此の氣根を、その青春時代から最も完全に具有して居つた。彼は、其の後ち勘定奉行を辭して金貸の業を營んだ兄を助くること暫時、幾許もなくして此の兄の周旋により、彼は盛岡なる鴻池支店に入り、その手代となつた。が、或る事情の爲めに此の支店は閉店した。それから間もなく、彼は再び兄の周旋により、遂に小野組の番頭古河太郎左衛門の養子となつた。時に年二十四。

これから以後の彼の傳記は、いかにして、彼は富を得たか、如何なる方法によつて能く礦山大王となるを得たかの歴史であるが、かゝることは一般の人の興味を呼ぶべきことでないから、わざと此處に省いて、この邊で古河氏のことは結末として置く。

要するに
膽大心小

これ、市兵衛氏の性格であつて其の氣根、即ち彼の成功を助けたる所以のものである。この氣根の強い爲めに彼れは小成に安んずるの時弊に陷るを遁れたといふ頗る重要な地位を占めて居つた。而かも、その初め、一「おでん屋」の貧しきから起つたとすれば、彼も亦た能く瞑し得べく、これまた「立志傳」の一二頁をば占めて價値あるべき人物であらうと思はれる。

淺野總一郎氏

東京は本郷赤門前の「おでん屋」から起つて、遂に我が商界の健兒とまでたとへられたものは此の淺野總一郎氏である。

彼、總一郎氏、その富未だ岩崎、三井氏に及ばず、その信未だ澁澤氏に及ばずして物故したとは云へ、彼は東洋汽船株式會社の社長であり、淺野セメント合資會社を設立した他に、十有餘種、各種類の會社の重役

▲天涯の漂泊兒

總一郎氏は、明治四年、飄然として、その鄉里を辭し、東京に來たことであつた。

彼は越中の人、嘉永元年三月十二日を以て、その國射水郡藪田村に生れたのであつた。彼の父を何者かといふに淺野泰順と呼ばれ、家は代々醫師を業として居つたのであつた。而して彼、總一郎氏は此の泰順氏の長男であつた。が、しかしながら、大志のある彼に、醫藥のこと固より其の脈ところ、大都の地にあらずは、遂に到底その驥足を伸すべからずと、かくして彼は上京したことであつた。

ところで、斯く上京はしたものゝ、素より天涯の漂泊兒。されば腰纏に餘裕のあらう筈なく、頼みとするものは、たゞ頭腦と手腕と、たゞ此の二つのみである。その當時の彼の胸中果して如何、實に思ひ半ばに過ぐるところがあらう。

古河市兵衛氏と淺野總一郎氏

彼は先づ本郷森川町の旅人宿に身を寄せて、唯管職業を求めた、が、しかし職業の道は仲々見つからうともせぬのであつた。そのうちに、嚢中は全く空しくなる、その困窮の狀は、殆んど眼もあてられぬばかりであつた。

そこで此の宿屋の亭主も見るに見かねて、彼に勸め、大學の赤門前に「おでん燗酒」を賣らせたのであつた。これが實に、彼、總一郎氏が商賈と名のつくものに手を出しはじめた發端である。

彼は、實に死身になつて持いだ。彼は實に非常な熱心を以つて、勉強して此の「おでん」屋の業に當つた。勉強は幸福の母といふが、かく彼が勵精勤勉した報酬は忽ちで、彼をして能く飢渇より遠ざからしめたばかりではなく、尚は彼をして、少小ながらも資金と名づくべき者を運轉することを得しめ、その上、冬はおでん屋の、夏は氷屋となるべき才覺までですることの出來るようになつたのである。

序だから、こゝに一寸一言して置くが、彼、總引さはらつて横濱に移轉し、小さな小舍を借受けて薪炭及び竹皮販賣をはじめたのであつた。この一郎氏の一生を通じて、彼が成功した所以のものは、まことに此の勉強の二字であつて、彼は誠に時、彼は妻を迎へたが、これからの勉強はまた、先天的の勉強家であつたのである。されば、彼の殆んど晝夜を分かたぬはどであつて、それが爲めに、生前、彼に向つて成功の秘訣を問ふものゝある場その得意先も、どん〳〵と殖へて行つたことに、合には、必ず此の勉強の二字を以つて答へたさうである。

▲五時間の睡眠

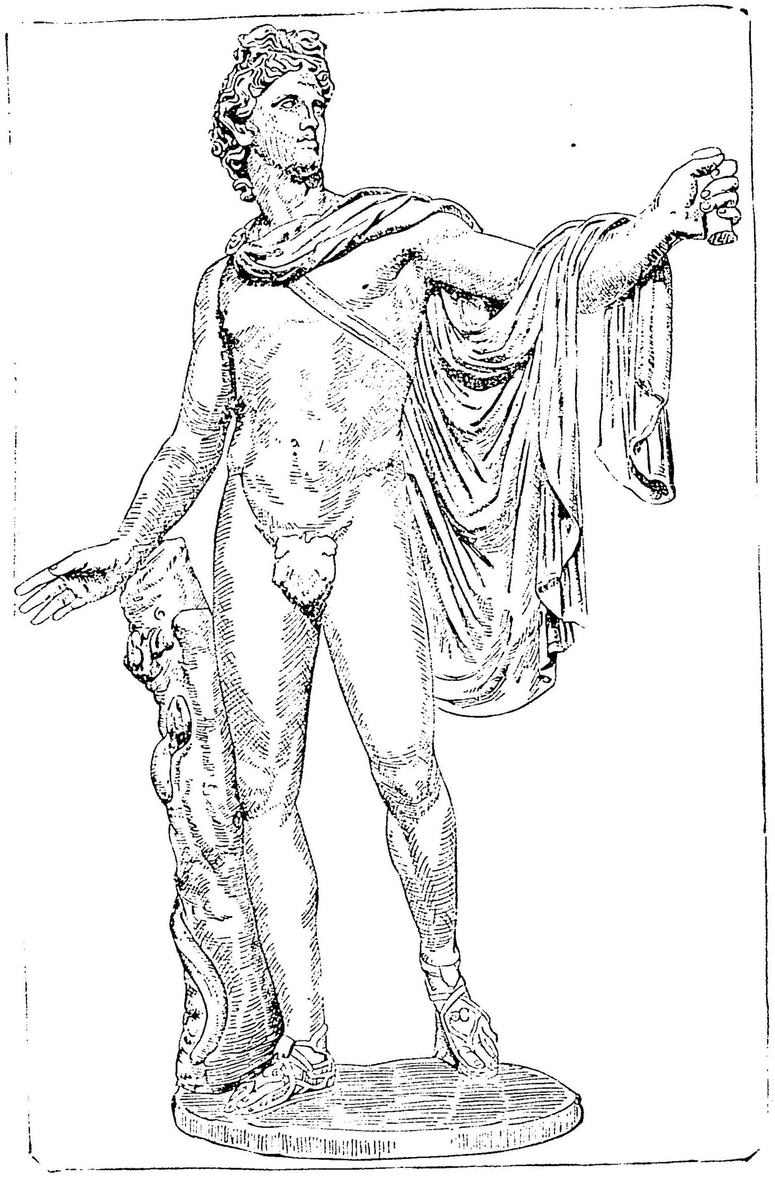
されば彼、その成功した後と雖も、夙起假寢、その睡眠時間の如きも、尚は五時間を出でなかつたそうであつて、決して「今日の仕事を明日に延ばさず」、その書齋には、常に

來ニ福運一從ニ勉強一

の六字を掲げて居つたそうである。

彼は、かく勉強家であると共に、また機を見るに頗る敏捷であつた。

かく機を見るに敏捷な彼は、明治五年、東京を



アポロ一の像

中等教育臨時增刊

第一講話集

紙數二百六十餘頁
正價金參拾錢
郵稅不要

挿畫

米國の軍艦……（新意匠原色寫眞版）
噴火中の鳥島と噴火觀察員一行……（着色寫眞版）
新案懸賞題……（八度刷石版）
第一講話會場の圖……（着色寫眞版）
法學博士高田早苗氏……（着色寫眞版）
浮田和民氏……（着色寫眞版）
法學博士和田垣謙三氏……（着色寫眞版）
理學博士田中館愛橘氏……（着色寫眞版）
理學博士坪井正五郎氏……（着色寫眞版）
中等教育綸はつき……（石版三度刷）
スコットランド人舞踏の圖……（着色寫眞版）
其他本文内刷込圖數面入

開會の辭……法學博士　高田早苗
歷史の効用……法學博士　浮田和民
少年老年論……理學博士　和田垣謙三
高天原の所在……理學博士　塚原靖
地下溫度……理學博士　田中館愛橘筆
戰場……會員寄送
古人は果して大なりしや……理學博士　坪井正五郎
體育の話……巽來次郎
唱歌なき國民……酒井勝軍
英語と佛語……永持德一
經濟雜話……伊藤正敎
渡邊華山……土屋詮敎
偉人の片影……梅澤精一
決鬪の話……長田忠一
奇談……正宗忠夫
社會餘興……塙季雄
サラゴサ苦鬪……村山敏雄
西班牙鬪牛の話……德田浩司
蘇國の風俗……K Y生

第二講話集

紙數二百六十餘頁
正價金參拾錢
郵稅不要

挿畫

新案懸賞文藝一不題……（新意匠一色版刷）
第一講話會場の圖……（着色寫眞版）
同上入口及入口の裝飾體裁……（着色寫眞版）
盤本出水公園の全景……（着色寫眞版）
文學博士ドクトル高山元八氏……（着色寫眞版）
文學博士同上巽來次氏……（着色寫眞版）
小波……（着色寫眞版）
秋濤……（着色寫眞版）
ユークサンブルグ大公園……（着色寫眞版）
大元帥陛下の御學問……（木版二度刷）
岡山後樂園の全景……（着色寫眞版）
其他本文内刷込圖數面入

開會の辭……浮田利民
現今社會黨の組ブブルフ……文學博士　箕作元八
教育上三期の比較……文學博士　村上專精
社會改良と少年教育……小波　巖谷季雄
非文學者論……秋濤　長田忠一
ユークサンブルグ大公園……文學士　田中阿歌麿
簿記學の必要……文學士　巽來次郎
書の話……文學士　金四郎
英詩評釋……文學士　内崎作三郎
保險の効用……法學士　伊藤秋南
旅行談……法學士　鳥山人
巴黎雜談……久保田竹齋
編澤翁の特性……木田側歩
古武士の本音……大塚素江
昔がたり……塙筆
陸軍の服裝……S生
雪花菜……（新体詩）……兒玉花外
創世神話梗概……杉谷代水
蠟の話……笠間雨陽
公園の話……水口微酔

發行所　東京牛込早稻田大學中坂部内　中等教育臨時增刊

會員寄送

希臘神話梗概

杉谷代水譯

メヂユサの頭

(一)捨小舟

同じ頃、アルゴスの國王に一人の子あり、髪いと美はしき女兒なりき、さて一人子なれば王も大方には鍾愛しけれども、尙ほ女兒なるが口惜く、あはれ王子にてあらましかば天晴の武夫に仕立てて我が跡を讓らんものをと、朝夕にうち口說けども詮無し。月日を經るまゝに王女は身丈ものびて青柳の姿やさしく心も怜悧に生ひ立ちぬ。されども王は、その身世を去らん時國土と重器とを孱弱き王女に讓らん事のいと不安く覺えければ、密かにデルファイに赴きて巫女にその事を諮る。巫女言ふやう、王は早晩世を去るべし、而も王の命を絕つ者は王女の生める一子ならんと。

王は聞きて大いに驚き、この上は如何にもして巫女の箴言を防がざるべからずと、樣々思案の末遂に王女を幽閉して生涯世に出づること無からしめんと決す。即ち工人に命じて地下に圓き土室を掘らせ、その中に黃銅の家を造り附けさす。家はたゞ一室にして窓無く、頂きに氣と光との入るべき穴あるのみ。やがてその家成りければ、王は王女ダネイをその中に這入らせ、一人の老女を附け衣類調度、遊びの具なんど不自由無く持たせて件の牢獄に閉ぢ籠めつ。王はこれにて、巫女の言葉の必ずしも信ならざるを見んとて、やう〳〵に氣を安めけり。

憐むべし、王女ダネイは罪無くして地下の牢獄に投ぜられ、語らふものとては隨ふ老女一人の外無く、年幼ければ未だ野も海も知らず、纔かに頂の窓より、白き雲の青空に往き來するを見るのみ何故あれば父君のこの身をかゝる處に押し籠めたまふぞとも知らず、又何時かは來りて迎へ取りたまふらんとも知らず。いぶせき一室に夕べを送り

朝を迎て夢現とも無く數年を過ぐしける程に、春の寒さに蕾の花の開くが如くダヽイは日毎にのびに整ひて、いつしか丈高く姿美はしき處女となりぬ。されば彼のヂュピタアの大神は雲の中より遥かに見そなはし、いと美しとぞ思ひたまふ。

さる程に一日、青空俄かに氣色だちて、金色の光驟雨の如く暫し彼の窓より室の中に降り込みしと見ゆるに、この光やう〳〵をさまりて、見れば一人の貴公子王女の目の前に莞爾とうち笑みて立てり。これ彼のヂュピタアに外ならず。されど王女は夢にも覺えず、大方は海のあなたの王子にして、この身の幽囚を脱せしめんとて、雨にまぎれて入り來しならんとのみ思ひけり。

斯くてヂュピタアは幾度もこの獄室を訪れたまひけるが、常に彼の貴公子の姿にてふはしければ王女も絶えてそれと得知らず。度重りけるまゝに互に思ひ思はれて竟に獄室の中にて結婚しぬ。王女と神との大禮に列りしは附き添ふ老女一人のみなりき。されどダヽイは相慕ふ夫を得ていと幸福になり、彼の貴公子のふはせぬ時さへ憂といふもの身に無さを覺ゆるに至りぬ。かくて一日貴公子は例の如く彼の狹き窓に攀ぢ上りて出で行きしに常よりも夥しき光、室内に滿ち溢れしと見えしがそれより後彼の貴公子は復びその姿を見せずなりたまひけり。

程なく王女愛しき男子を生む。パルシュースと名づく。姫と老女と二人していと密々に育てける程に、四年の間は何人にも知らるゝ事なくて過ぎぬ。日毎に膳部など運ぶ女さへそれとは曾て覺ること無かりき。されどいつまで斯くても得あるまじき運なりけん、一日父王の此處を過ぎられしに獄室の中にて幼き子の物言ふ聲なり。いと怪しと思ひて探らせけるに云々との事なりければ、驚くこと大方ならず。巫言の箴言は斯ばかり禦ぎてさへその實なるを證せんとするかと今更悔れてせんすべを知らず。

さてその身の萬全を圖らんには、二葉にしてこの嬰兒を葬るの外あるべからず。王は斯うと決して王女と孫とを彼の獄室より引き出させ見るに、その姿のいた〳〵しきこと今更目の前にて刃を加ふるに堪へず。王は臆病未練の人なれども人並に惻怛の心をば持たりしかば、他の苦むを見て心惡しきこと大方ならず。されども今は何事をか爲さいるべからざるを如何せん。

遂に彼れは臣下に命じて大きなる木の匣を造らせ、水にも波にも堅固なること船の如くにせさせ王女ダヽイと嬰兒とをこれに入れて海の上に押し放しぬ。思ふやう、王女と孫とを亡ひて目前にあさましき有樣を見ざるの策これに過ぐべからず。この匣やがて波に碎かれて水の底にぞ沈むべき、若しくは風に吹き流されて千里のあなたにや漂着せん、二人はまたアルゴスに歸ることあらざるべきなりと。

さても彼の匣舟は沖の方へと押し流され、世にも溥運なる二人を載せて、日となく夜となく波のまに〳〵漂ひ行きぬ。されど數日の間幸ひに天氣いと穩かなりしかば、小さき漣匣の緣を打ち、吹く風靜かに歌歌ひ、水鳥も頭の上を舞ひて回りぬ。目馴れぬ氣色のいと面白ければ、嬰兒は少しも恐るる事無く、或は卷き寄する漣に手を浸し、或は涼しき風に向ひてうち笑ひ、或は聲高く水鳥と呼びかはしなどしけり。

されどその翌日は天氣俄かに變りて恐ろしき暴雨となりぬ。空は闇の如くに掻き暗らみ、風すさまじく咆哮して、大濤は山の如くに動き來りぬ。されど嬰兒は母の肱にすがりて何事も知らざるさまに眠れり。ダヽイは眠れる乳兒の顔うちまもりつゝ絶えず瞼して歌ふやう。

眠れ、眠れ、我がよき兒
母がかひなに抱かれて、
怖れも知らぬ尊さよ、
海原いかにさわぐとも。

眠る衣のあたゝかに、
母がなげきは知らざらん。
波の怒りも知らざらん。
あらしは強く吹くものを。

星はかくれぬ、夜はすごし。
あらしに波におそろしや。
されど我が兒よ、よく眠れ、
知らぬぞ乳兒の幸なれば。」

* * * *

兎角するまに怖ろしき一夜は明けぬ。彼の匣舟は幸ひに壞るゝこと無く大波にゆられ〳〵て、朝まだき兎ある大島の砂濱に漂ひ着きぬ。濱のあなたには綠の畑あり。畑に續きて小さき市街見ゆ。折しも一人の男此處に來かゝりてこの有樣を見、急ぎ匣を引き上げて中を覗けば、美しき貴女嬰兒を抱きてうち臥し居り、いとも憫れの姿なれば、直樣二人を扶けて連れ出し、己が家へと導きていと親切にいたはりけり。ダネイは大きに悅びてその身

の不幸を物語するに、彼の男いよ〳〵懇に力を附け、ももはや恐れたまふに及ばず。心のまゝに此の家に止まりて我等と共に暮らしたまへ、力の限り助け參らせんとて、詞を盡してぞ慰めける。

(二)難題

是に於てダネイは女子はこの家に留ることゝなりしが、月日飛ぶが如く、嬰兒パルシュースは早くも姿美はしく力優れたる賴母しき少年となりぬ。こゝに此の島に某といふ王あり、ダネイの美しき姿を見て心を動かし、强いて后となさんと迫る。されどもダネイは王の狂暴黯愁なるを厭ひて應ぜず於是王は思ふやう、彼のパルシュースこそダネイの愛をこの身に向はしむるの妨げなれ。いで如何なる口實をも設けて彼れをば遠き國に追ひやらん。その後にてダネイを心のまゝにせんに應否はあらじと。

やがて島内の若者を盡く館に召し、假事をまうけて告ぐるやう、我れ這般遠國の王女を迎へて妃

となさんと欲す。就きては王女の父に贈品なかるべからず。汝曹各その我れに献じてんや。といふ。當時妻を娶る者は女の父に物を贈る慣ひなりしなり。

若者等聲々に、「さらば如何なる品をか献ずべき。」と問ふ。

「馬をこそ。」と王は徐かに應へつ。蓋し若者の中にてパルシュース獨り馬を持たざりしを知れゝばなり。

パルシュースは聞いて大いに困み、「君よ、如何なれば尚貴き品をば求めさせたまはざる。假令ばメヂュサの首ならんとも我等は決して辭せざるべきに。」といふに、王は得たりとパルシュースに向ひ、「メヂュサの首とや、それ大いに然るべし。然らば人々に馬を献ぜよ。パルシュースはメヂュサの首を獲りて來るべし。」

聞いてパルシュースも今更王の難題に驚きたれど、こなたも引かぬ若氣の一徹、「いかにも獲りて參るべし。」とて袂を拂つて出で行きぬ。人々は彼れが無謀の誓言を嘲り笑ふばかりなり。

いでメヂュサの首とは何ぞや。パルシュースの母嘗て彼れに語りしことあり。千里のあなた、世界の一端に、ゴルゴンズとて姉妹三人の怪物あり。顏も五体も並々の女子なれど、黃金の翼と眞鍮の爪とを持ち、千條の毛髮皆一つ〳〵に生ける蛇なり。されどその姿の怖ろしきこと何人も諦視する能はず、否一目見てさへ忽ち化して石となると傳ふ。その姉妹のうち二人は不知身の異體にして、斬れども傷かず打てども死せずと雖も、季の一人はこれに異り、若し巧みに劍を用ひて急處を打たば、或はその命を奪ふことを得べしといふ。メヂュサといふは是れなり。

パルシュースは一旦の意氣地に無謀の誓ひをなして館を立ち出でたれど、時たつまゝに聊か後悔の念なき能はず。あはれ如何してか此難事を仕了せん。ゴルゴンズの棲へるは千里のあなた世界の

端なりといへど、西か東か北か南かそれさへ覚とせて定かならず。さて彼等を尋ね得たりとせんに世にも稀なる怪物メヂュサをば一刀にして斃すべき名刀無きを如何せん。さばれ約束は約束なり。彼れが首を手にせずしては再びこの地に帰るべからざるなり。パルシュースは悄然として濱邊に立ち、海のあなたなる郷國アルゴスの方をば暫く眺め居けるに、落日波に入りて月はや後ろの岡より出でぬ。海の上より吹き來る風冷やかに肌を打ちて幽情言はん方無し。折しも二人の貴人髣髴としてパルシュースの前に立ち現はる。一人は公子にして一人は貴女なり。公子は冠と沓とに翼を具へ、手にも翼ある杖を持てり。黄金の蛇二條この杖に纏繞せり。

公子はやがてパルシュースに向ひて、汝が愁ふるは何事ぞと問はせたまふ。パルシュース包む所無く王の狂暴なる難題と、其身の無謀の誓約をなせし次第とを答ふ。この時貴女は詞をかけ懇ろに彼れを慰めたまふ。見れば、面いと美しとにはあらねど、灰色のやさしき眼先づ人を服せしめ、威ありて猛からず、姿宛然女王の如し。宣ふやう、恐るゝこと無く勇氣を奮ひてゴルゴンズを尋ぬべし。我れも力を添へて怪物メヂュサの首を獲らせんと宣ふ。

パルシュース問ふ、「されど我れに船無し。如何にして海を渡り候はん。」

前の貴公子應へて、「さらば我が沓を穿ちて行け海をも陸をも一飛びに飛び行かんこと心のまゝなるべし。」

パルシュース、「いで西か。東か、北か、はた南か。」

貴女宣ふやう、「我れ詳らに教へん。先づ北方氷寒界のあなたに住む蒼面白髪の姉妹を尋ね行くべし。姉妹は世の何人も知らざる秘事を知れり。汝彼等に迫りてその秘事を聞くを要す。聞くべき事は、西の國にて黄金の林檎を戍れる三人の處女にいかにして會ふべきかといふにあり。さて處とは如何にして會ふべきかといふにあり。さて處と

術とを聞きたらんには、急ぎ彼の國に赴くべし。處女等汝に三つの品を與へん、これ無くては怪物メヂュサの首は獲べからず。又彼等は汝に路を教へて、西の海の遙かのあなたゴルゴンの眷族が棲める國へと汝を往かしむべきなり。あな可畏、心得たりや。」と宣ふ。

パルシュース詳かに承りたる由を答ふ。是に於て前の貴人その沓を脱ぎてパルシュースに穿かせたまへば、貴女は又もこれを勵まし、いで〳〵直様出で行くべし。勇氣と誠とを心に懐きて毫しも恐るゝ勿れといさめたまふ。

パルシュースはこの貴人をば、一人は空氣の司アセナの女神にして、一人は夏雲の傳令神マルキュリーに外ならずと覺りければ、別れに臨みて身をひれ伏して謝せんとしたるに、二人はいつしか朧々夕闇の中にまぎれて失せたまひけり。

パルシュースも乃ち彼の沓の翼を飛ばして、虚空遙かに北をさしてぞ飛び行きける。

三　蒼面白髪の三姉妹

飛ぶことさながら鷹の如く、忽ち中天に翔け上りければ、やがて方向を北に轉じて一直線に進み行きぬ。海を踰えて彼方は名高き國にして、市府あまたあり、巨萬の人々住めり。市府盡くれば山脈にして、山脈のあなたには森林あり、平野あり、大小の河流海を索めて右に左に狂奔せり。この平野の上を暫く行く程に又一連の山脈あり。これを越ゆれば風土一變して沼澤悉く氷を敷き、皚々たる白雪一面に地を被へり。程なくして又海に出づ。これ氷海なり。身を斫るばかりの寒風に翼を打ちつゝ行く程に、或は大波のそのまゝに氷固せるあり、或は下底の潮勢によりて氷山の一方に崩れ落つるあり。曾て太陽も暖めし事無しと見えて、幽陰の氣さながら人に迫るを覺ゆ。兎角して彼の姉妹の住める洞窟に來りぬ。

彼の三人の姉妹は皆極めて高齢にして、自らも幾千百歳なるやを知らず、亦たこれを數へ得る者

も無し。頭には長き髪あり、生れたる當時より蒼白の色をなせりといふ。而も奇中の最も奇なるは三人にして僅かに一顆の眼と一根の齒とを有し、要ある毎に貸借して交代に使用せることこれなりバルシュース洞窟の口に來りし時、內にて何やらん小聲につぶやく音しければ、姑く立ちてこれを聽くに、一人が言ふやう、

「我等は山上の神々さへ知らぬ數多の秘事を知れり。姉御よ、さにはあらざるか。」

と云ふに餘の二人、

「然にこそ〳〵。」と同音に答ふ。

「いで齒をば借してたべ。又美しう若やぎて見たきに。」と此方の一人が云へば、隣の一人、

「姉御よ、妾には眼を借してたべ。外の世界を見て來う程に。」と云ふ。

「善しとも〳〵。」

と他の一人は答へて、兩手に眼と齒とを脫して、搜り手に前の二人に渡さんとす。

バルシュースは見るより矢庭に飛び入りて彼の二品を老女の手より奪ひ取るに、前の二人はそれとも知らず、

「齒は何處にぞ。」

「眼は何處にぞ。」

と聲々に騷ぎつゝ、長き手を伸して周邊を搔き搜れども無し。

「姉御よ、落しやつたか。」

「失くしやつたか。」

と狼狽へあはつる樣の可笑とも淺ましとも限なければ、バルシュースは思はず呵々と笑ひながら、つと立ち入りて聲をかけ、

「やよ、姉妹たち、眼と齒とは此處にあり。我れに秘事を告げなば返してん。西の國に黃金の林檎を成れる處女ありといふは何處ぞ。如何にせば彼處に行かるべきぞ。」

と云ふに、三人は驚きて此方に向ひ、

「いやとよ、御身は若く我等は老いたり。不具の者をば苦めぬものぞ。願ふは我が眼を返してたべ」

「喃、我が齒をば返してたべ。」

とて、或は泣き或は口說き、或は嚇し或は慰し、手を盡して頼めどもバルシュースは毫しも聽かず。間隔やゝ離れたる處に立ち、聲を厲して、彼の秘事を語らずやと罵る。三人はその言葉の無用なるを知りて歎き悲むこと限り無し。

やゝありて一人が言ふ、

「姉御よ、告げずばなるまじきか。」

二人は答へて、

「然なり、とても告げずば叶ふまじ。よし彼の秘事には離れんとも眼と齒にはかへられず。」

とて、遂に西の國の彼の處女にあふべき途を詳かに敎へければ、バルシュースは落ち無く聞き取りていざとばかり彼の眼と齒とを返しけり。

姉妹は喜びて小躍りし、「あな嬉しや、若き日は又も來りぬ。」とて、打ち連れて何處とも無く立ち去りけり。それより後彼の蒼面白髮の三姉妹は再び此處に姿を見せず、またその行方を知れる者も無し。風は蕭々として人無き洞穴を吹き、氷の波は氷の岸を打つて碎けては又氷結しぬ。今も此處には生物の影を見ずといふ。

（四）西のをとめ

バルシュースは又も虛空に向つて翔け上り、氷寒界を後にして南の方へと風よりも疾く飛び行きける程に、間も無く日影暖かなる一つの國に來りぬ。敎へられたる如く西の方へと路を轉じて進めば、綠の林、花咲く牧場、暖かなる岡、匂ひある谿なんど次々に目の下に見ゆ。かくて程なく一つの樂園に着きぬ。花として咲かざるは無く、果物として實らざるは無し。知るべし、これ三人の處女の棲ふてふ西の國の園なるを。バルシュース即ち翼を斂めて地上に下り、樹の間をくゞりて暫く行く程にやがて樂園の中央に來りぬ。尋ぬる三人の處女は果して此處にあり。金色の林檎の枝も撓に實れる一株の樹を匝りて踊り且つ歌へり。曾てデュノー

の女神、大神に嫁ぎたまひし時、大神、デュノーに此の樹を贈らる。デュノーいたくこれを愛し、この三人の處女をして日となく夜となく戍らしめたまふなりといふ。

パルシュース暫く足を停めて處女の歌を聽けば、

歌

「いざや蓄きを謳ひてん。新しきをも謳はいや。
我が喜びはいと多く、
我が悲みは稀れらなり。
いざ歌へ、いざ踊れ、
いざや心も浮れつゝ、
良きをば待たん、眞をば。
晝の光は薄れたり。夜こそ來らめ立ち代り。
日影は早もかくれたり、
星こそ見ゆれ中空に。
いざ歌へ、いざ踊れ、
心も空に浮れつゝ
朝をば待たん、春べをば。

霜には樹々も枯れぬべし。風には果も落ちぬべし。
悲み來り、死も訪はん。
いざ泣けや、歎けよや、
心も空に亂れつゝ。
されど我れには望みあり。
讀みなば文もはてぬべし。歌はゝ歌も終りなん。
眞弓も琴も絃斷れて、
いざ泣けや、競べよや、
心も空に亂れつゝ。
風に快樂の飛ぶを見よ。
されども復る春の陽や、老木は幹の若やぎて、
花のくれなゐ、葉のみどり。
いざ〳〵笑へ、いざ踊れ、
心も空に舞ひ狂へ。
枝に黄金の果實なり。

＊　＊　＊　＊　＊

パルシュース時分を見計りて聲をかくれば、處女

は歌を停め、いたく驚ける樣なりしも、彼の穿てる沓を見て心を安んじ、皆馳せ寄りて彼れを花園に迎へつ。

さて云ふやう、「妾は御身の來ますんを知りてありき。そは吹く風の告げたればなり。いで如何なる用事ぞ、語りたまへ。」と云ふ。

パルシュース殘す所なく幼少よりの身の上を物語し、今云々の故ありてメヂュサの首を獲んと思ふにつけ、御身等にゴルゴンの眷族と闘ふべき三つ品を請ひ受けんとて來れるなりと語る。

處女はうなづき、いと易きことなり。いで三つの品ならで四つをば參らせんとて、一人は鎌の如く彎曲せる銳き太刀を與へてそを彼れが帶に結び付く。一人は鏡の如く照り輝ける盾を與ふ。さて一人は奇しき革囊を與へ、長き紐もて彼れが肩に懸けさす。さていふやう、

「此の三つの品はメヂュサの首を獲んに缺くべからざるものなり。されどこゝに今一つあり、これ無くては彼れを尋ねんこと恐らくは難かるべし。」とて、いとも奇しき兜を取らす。これ「闇隱れの兜」なり。パルシュースこれを執りて頭に戴くに、天上地下の如何なる者も彼れが姿を認むる能はず斯くて用意盡く調ひければ、三人の處女は更らにゴルゴンズの棲へる處を知らせ、彼れと戰ひてその首を取り、身を全うして歸るべき術を懇ろに授く。さて別れの接吻をなして勇士の爲めに幸運を祈り、直樣冒險の途に上れといふ。パルシュースは會釋して彼の闇隱の兜を戴き、その儘一飛に尙も西方大地の端へと急ぎ行きぬ。

處女はやがて彼の樹の下に立ち歸り、又金色の林檎を成りつゝ、舊きをば新しきに老いたるを若きにと、前の如く歌うたひつゝ舞ひて匝りぬ。

（「メヂュサの首」未完）

山びこ

人の眼に映じたる押川師

不紡生

一

聞ならく、獨逸の頗學某博士（今名を逸す）嘗て萬國史を編せんの志あり。博引廣渉、洽く萬國にわたりて史料を探る事爰に年あり。精細詳密殆と大成に近し、即ち筆を取りて稿を起こすや句を練り章を追ひ有形よ。り無形に論及し、興亡盛衰の跡を明らかにし、研鑽甚だ力む。一日全く黒白を表裏せるものあり。博士是に於いてか

押川方義氏

倦んで窓に倚る、階下騒然の響きあり。唯見る勞に食するの徒三五、事に相爭ひて各力に訴へ、囂々然として撲る、蹴る、踏む、叫ぶ、宛然の修羅場なり。已にして警官來り誰何するに及んで、見る〳〵蜘蛛の子を散らすが如く又隻影を見ず。

呵々として退き、椅子に踞して再たび紙にむかふ。たまたま階下の侍女いそ〳〵と博士の室に上り來り、街上人の相爭ふの狀を語る。事往々にして博士の見る所に異る。つゐて友人某來り、また此の事を語る。そのいふ處を聞けば博士の所見と

啞然筆を投し嘆じて曰はく、あゝ是れ目前の事實、三者等しく目擊する所なるに、其の語る處や各異なり。一犬虛に吠へて萬犬實を傳ふ、人の噂のよる所なく、口碑の信ずべからざる事此くの如し。況んや過去一年、十年、百千年、山變り海變り、星霜こゝに幾千載、此の間に醉生夢死せる人の噂と口碑とを綴り、得々として歷史といふ、事實を轉倒して千載に誤らるゝもの何ぞ限らんや。かも知れんはだらうとなり、更にですと斷定せられて掾々の人の口に喧炙す。危い哉信ずべからざる口碑によりて精確なる歷史を編まんとす、かくていい色よき布に包んで紫の綬を結び、金刻の文字を彫りて不朽の歷史と稱す。あゝ余は斷じて歷史を編むの痴を學ばざるべし、是れ知らずして永遠に人を誤るを敢てするに等しければなりと。直に稿を次いでまた史を言はざりしと傳ふ。

人或は其のあまりにも偏狹なるを笑はん。然れどもわれは、現時わが國思想界——文壇の趨勢を

見て、實に篤學博士の如き人に忠なるの士に俟つ處非常に多きを思はずんば非らず。あゝ片々たる人物月旦記者よ、卿等が靜念自ら顧るの時に於て心中忸怩たるものなきか、一度も其の人に接せず、其の聲色を知らず、其の人となりの一端をだに知らずして漫に人の噂々に聞き、興に乘る筆にまかせて蚯蚓走らす原稿紙の幾十枚、仰々しくも題して人物月旦といひ、是れを公にして盛に見て來たやうな嘘を吐く。知らず、風なきに何の響ぞ、調なきに何の樂ぞ、曰はく何々雜誌、曰はく何々新報、頻りに無責任の筆を弄して人をさばき、衆生を誤るを見る。もし神の審判の來るべき日あらば、正に燃ゆる紅蓮の燄にやかれむ。

二

此の故を以て予は全然世の所謂人物月旦なるものに眼をとゞめざりしが、本年一月知友の、雜誌春潮誌上青柳有美子の『押川方義』論あるを告げ、且つ一讀を勸めらる。青柳有美子の筆といふに、評

せらるゝ人は押川師なり、余は喜んで久々にて新聲を繙き、一讀して更に湘南に病に養へる山月川合信水氏に送れり。越にて三月に至り、新聲紙上山月氏の『讀押川方義論』あらはれ、四月に至りて明星誌上岩野泡鳴氏の『讀押川方義』出でたり。余は順次、多大の興味を以て三氏の所論を通讀し、幾分か押川師の面影を目睫の間に浮べ得たるを感せり。

三氏の見る所各々特色あり、たとへば、仝じ富士山にても、遠はく東京より見たると、近く駿河甲斐より見たるとは多少其の趣を異にするがごとく、遠く離れて見たると、近く之れを見たると、深く之れを極めたると、近く之れを觀過せるとは自ら別ありて、三氏の識らず〳〵の筆が各自の人格を表はせるは最も妙なり。而して評せらるゝ押川師の大なるだけ、高さだけ、讀者の感興を惹き起す事大なるは更に妙なり。

青柳氏は巖本善治氏に師事するの人にして、頗る筆まめなる人也。或人が氏を評して奇矯を衒ふと罵りしもまた理なきに非ず。『戀愛文學』を讀み、『有美臭』を讀みたるの人は、必ずや一種人を惱殺する的の臭味——深刻なる、皮肉なる、得て模すべからざる幻影の躍々として紙上に跳るを見しなるべし。更に『禪の原理』『煙草の原理』等を讀まば、思ふに誰人と雖も噴飯せざらんや。而して藝者と語れるの惚話を書し、自分の子供を俳優たらしめんと公言する氏は、安んぞ知らん基督の前に最も忠實なる、謙遜溫厚なる巖本如雲氏に師事し、明治女學校に教鞭を執り、基督教會堂に牧師たりし經歷を有するの人ならんとは。

川合氏は悟道の人也、改革の人也、言はゞ押川師の半面を其のまゝの人也。其の神につける高き道念は敬しへられたるに非ずして自ら得たる也。三度神の靈光に射られてはじめて「新らしき人」を衣たるの人也。曾つて長く東北學院の舍監として押川師に接し、心より之れに師事せるの人にし

て、雜誌芙蓉峰の主幹たりしが、後ち鶴岡教會の牧師となり、ミッションと合はずして飄然去つて函館毎日新聞に主筆として文名隆々たりき。其の文は毫も文なく彩あるなし、言はゞ油ッけのない文なり。而も一道の生命凛として貫徹する所、咀嚼するに從つて味愈〻加はり、人をして再讀し三讀して猶は飽く事を知らざらしむ。

岩野泡鳴氏に至りては余は全く知らず。唯だ且て韻文朗讀會の席上、詩歌の格調に付いての演說を聞ける事ありしのみなるが、其の文を讀んで氏もまた東北學院にありて押川師の薰陶の下に、氏が所謂土方的の教育を受けたる人なるを知れり。而して仝じく之れに師事せりといふ川合氏と岩野氏の見る所、感じたる處を讀んで、其の反映の極めて趣味あるを思ひ、基督の芥種の譬に適切なる教訓を得たるを感ぜり。

余は初めより白ず。余は多く押川師を知らざるなり。一度師の說教を聞いてより五年、猶は其の聲のあり〳〵と耳にあるを覺ゆる師が面目を、より多く師を知るといふ先輩の人々によりて、如何に評論せられたるかを諸君に紹介せんとするに止まらむ。如何となれば無責任なる臆測の屢〻青年を誤る事多きを思へば也。達人を知るは達人のみ之れをよくす。師の眞價を知るの人は必ず他に人あるべきを信ず。稿中私見を挾むにあたりて、必ず『もし果して然らば』なる前提を意味することを記憶せられんを望む。

三

押川師はわが基督教會に於いて鏘々の聲聞ある教師也。

明治三十二年頃なりしと覺ゆ、余は函館に於いてはじめて押川師の說教を聞けり。余はわが教會の教師と席末に列れり。時至りて佐々木教師の紹介によりて壇上に表はれたる師は年齒正に不惑、莊重なる態度の、たとへば大山巖々として搖がざるにも似て、一種の力あるありて頭上より押し

つけらるゝの感を禁じ得ざりき。題は今猶記憶すず一種の震を感ずるを禁じ得ざりし也。後ち教會
――『大國民の品性』是れ師が絕好の問題にあらの先輩と此の事を語りいでし時、一人の否とよ彼
ずや。山をも動かす信念の生命より迸しる其の雄れは山師なりとの一言を聞いて胸安からず覺えし
辯は、他までおせらず、他まで迫らず、滔々乎たが、間もなく、內村鑑三氏の獨立雜誌紙上『耶蘇
り、循々乎たり、而も一度國事の爲すなきを憤慨す教界の大山師』なる一文を讀み、また神學校出身
るに當つてや、意氣軒昂、聲涙共にくだり、靜かに の牧師傳道師が、屢〻押川師を目するにわが基督教
壇を叩いて唇をかめり。聽衆皆感に打れて瞑目撫界を毒する惡魔の如く批評するものあるを聞き、
然、余の如きも自ら涙の滂沱として下るを覺えざ余は略ぼ師の毀譽相半ばするの人なるを知りし
りき。皮相なる所謂愛國家を鼻にかくるハイカラも、師に對する崇敬の念は到底減すべくもあらざ
者流を罵り來りて『余は實に之れが爲めに、わが りき。
同胞より幾度か非國民と罵られ、賣國奴と譏られ
た。けれどもわが精神誠意、國を思ふ一念は凡ての痛苦、迫害にも忍び得てあまりあり』に至つては沈痛、熱誠なる其の一句々々、殆んどわが心根に徹する樣に覺えたりき。歸りて後ち牧師に感ずる所を語る。而かも寧ろ其の冷然たるを見て余は何となく物足らぬ心地せり。翌日もゆけり翌々日もゆけり、而して師の聲に接する每に、わが魂は必

越えて一昨年はじめて川合氏に就いて詳かに師の人物を聞き、氏が所謂『仰げば愈々大になり、殆と其極を知らず、一言に之を蔽へば天地の極まりなきが如き感あり』といふもの、決して過褒に非るに肯けり。

こは余が知れる押川師の一部分なり。請ふ三氏の言ふ所に聞かしめよ。

『彼は實に賓の大つとき者なり。代數學に於いてXなり、Yなり、Zなり。』に至つて三氏のいふ所符を合するが如く一致せり。思ふ、かの攘夷の迷夢いまだ醒めず、特に北越の地は一向宗徒の巢窟にして、耶蘇といへば直に邪宗の如く思惟し、耶蘇のやの字さへ蛇蝎の如く忌れたりし明治の初年、たま〳〵疾病大に流行して越後地方最も甚だし。而して基督教徒はいづれもよく衛生に注意せしを以て一人の之に罹れる者なし。是に於てか爲めにする者盛に流言を放ちて曰はく、是れ全く切支丹邪宗の徒が相謀りて毒を河水に投じたるなりと。正に燃ゆる焰に油を灑ぎたる此の流言に、さらでも凝り硬まり易き迷信の民の、いかでか此のまゝに默し居るべき。竹槍つぐに鍬鋤、大鼓を鳴し鉦を叩いて大擧して迫る、教徒皆恐れて爭ひ脫れ、一人の傳道者だに止り守るものなし。報橫濱に至る、某宣教師慨然として其の倚信の徒を聚め、神の名の下に、道に殉するの人を求む。時に席末聲に應じて起てる者あり『われこそ!』環坐耳を峙てぬ、是れ誰れならずわが押川方義師なり。年僅かに二十二才、辭色端然として直ちに裝を整へて越後に向ふ。一卷の聖書、一本のステッキ、彼れは悠々乎として單身敵地に深入し、觸らば切れむ血醒き蓆旗の間を、怯めず臆せず堂々と道を傳ふ、而かして一人の手をおろし得る者なかりしといふ。嗚昔ステバノ、エルサレムの巷、クベルテンの會堂に起ちて、主の證の爲めに從容として死に就けりと聞く。主曰はく『わが爲めに其の命をおしむものはわれにかなはざるものなり』と、あゝ異教の民に道を傳ふるは如何に難い哉。寄語す、講壇の上より美しき言葉と、みやびやかなる態度を以て羊の如き信者に臨むの宗教家、まつた牧師宣教師、四万の基督信徒よ、あらず名門權貴の門に媚びて貧しき婦のレプタに願みざるお怜悧極まる所謂名僧智識、渦仰の百万善男善女よ、卿等の中に眞に其の教の爲めに、一身を犧牲にして悔ひず、從容

として死に就くの士果して幾人かある。

五

神の道吾が國に傳へられてより最初の殉教者たる高橋傳五郎氏の如きは、實に其の一人といふべきなり。而して是れを教しへ、此の大精神を傳へたるものは實にわが押川師なり。川合氏のいふ所をきけ。

『郡司大尉千島移民に一身を献げ、道に仙臺を過ぎる。師大尉と大泉旅店に見、堂々として國防と團結と宗教との關係を説く、大尉大に感動し、坐を改め肅然として曰はく、久しく足下の高名を聞く、一度び高説を聽くに及んで、感激愈〻切なり。足下已に斯る精神を以て子弟を薫陶せらる、試に問ふ、足下の門生にして、直ちに身を挺して千島に傳道せんとする者ありやと。師答ふらく、固より多しと。時に高橋君坐に在り、卒然語を挿みて曰はく。私が居ります、私が參りますと。師顧みて曰はく、さらば祓征けと、是れ實に明治二十六年四月三十日の事なり。此の時の問答、何れも無心の間に出づ。師の誠意、大尉の誠意、高橋の誠意、三誠相照して心無意に動き、言無心に發す。……師は此の時、既に少くとも分身の押川——我が思ふ如く思ひ、我が感ずる如く感じ、我が意の如く動く門下數名を有せることを知るもの、何ぞもとより多しと即答するに躊躇せんや。而して坐に在りし高橋君は即ち其の一人なり。彼れが、私が參りますてふ一語を發するの時、何ぞ「親分方義の顔を立つる」などの考浮ぶ餘地あらんや。彼れ此の時年齒二十三歳と雖も、愛國の精神に富み、其心靈上の修養は相應に積み居たり。當時毎日曜日榴ヶ岡の貧民を訪問し、之れに職業を與へ、之れに道を與へ、且つ其の先輩知已には書翰を以て傳道なし居たり。彼れが平生の抱負は日本上流社會の傳道と、東洋の大傳道とにありし也。三十日の夜、仙臺日本基督教會に於ける送別會に於いて、彼れ衆に謂つて曰はく「願はくは我が骨

を以て教會の柱となし、我が肉を以て教會の壁となし、以て千島に新教會を創立せん」と。……加之彼れが東北學院に在りし頃は、屢〻赤毛布を被りて余の寓を叩き、相共に談ぜし事多きを以て余は親しく彼の心事を知れり。高橋君の傳道と其の死とは、俠客が親分の爲に身を棄つるといふよりも、より高く、より深きものあるなり。押川師の彼れに及ぼせる恩化と薫陶とは、己の爲めに死せしむるといふよりも更に高く、深く、且つ貴きものあるなり。』

温健着實、情あり、曲折あり、吾人の川合氏に肯くもの故なしとせんや。よし其の動機より生じたる結果が、師に關連する處等しかるべきも、之れを以て青柳氏の、『親分方義の顔を立てる』爲めとなし、殊に岩野氏の『忠實（誠實といはず）なる——キリスト教を聽かされし土方を出せる』に過ぎずとなすに至りては、あまりにも其の言の無責任なる放膽文に類するを思はずんばあらず。知らず岩野氏が「思想低き教徒に取りては」といふもの、夫子自らを言明するものに非るなきか。

三篇を對照して余は此の徹候の著しきを見るなり。局外者の位置——換言すれば、東京邊より遠く見たる富士山を詩的の筆にまかせ、想像たつぷりで書き下したるものは青柳氏の文也。より近く、御殿場邊より之れを見て、單に其の大と莊觀を瞥見したるのみにして、寧ろ箱庭的の盆山盆池に心を惹れ、たゞ漫然と筆をなぐりたる如きは岩野氏の文也。余が以て土方的口調の放膽批評（もしかゝる形容詞があるならば）となすもの、實にこゝにあり。川合氏に至りては自ら性を異にす。其の大を見、其壯觀に打たるゝと同時に、天地正大の氣、粹然としてあつまる雄渾の姿に伴ふ其の微妙なる靈覺を味ひ歌へるものは實に川合氏の文也。宜べなり、其の論、其の文に一點の浮華輕躁の風なき事や。

嘗つて米にわたり、かへりて後甲比丹チエーンス――熊本党なる徳富、海老名、横井、諸氏の舊師――を訪へるを語りて曰はく、彼れは毀譽相半はせるの人物なり。而して毀譽相半はするものは必ず常に凡を拔く傑人也と。青柳氏の評して、『移して以てわが方義それ自身を評するの語となすを得むか』といへるもの大にあたれり。寡聞余の如きにして猶ほ惡魔（ゴヒ）の如く咀はるゝを聞き、神と崇むるの讃辭を聞く事頻々たり。曰はく彼れは强盜せりと、曰はく彼れは强姦せりと、曰はく彼れは忠勇なるわが遠征の軍隊に腐れビールを賣りつけたりと、曰はく彼れは新宿の女郎屋にいれりと、曰はく彼れは待合に藝者を招げて騒けりと。惡聲屢〻傳へられて教會の老幼皆な眉をひそむ。而して師は一切泊々乎として知らざるものの如く其の狀恰も對岸の火事を見るに異ならず。崇拜者は口を極めて其の宏量を讃美し、嫌忌するものは唾して其の破廉耻を憤る。蓋しわが基督教界に知名の人間？多しといへども、いまだかくの如く褒貶の甚だしきは非るべし。而も、其の噂――あらぬ醜聞のよりて起こる所を聞くに、余は實に之れを筆にするに忍びざるものある也。由來國を誤るものは外來の敵にあらずして、多くは獅子身中の蟲なり。噫〻余が至る所に聳ゆる所謂基督教會堂なるものを見るの時に於いて、一種いふべからざる嫌忌の情を抱くもの故なきに非る也。其の説く處や一に眞愛也、正義也、眞理也。而して之れを語るの教師は如何。わ〻咀はるべき人の子よ、爾曹の主は爾の敵を愛せよとまで教しへたるに非ずや。余は事新らしく同志社の校長になれないが爲めに自暴自棄して俗界に墮落したる某をとがめざるべし。人の聲望を嫉んで之れを能々公衆の前に誣ひ、福音同盟會とかの席上に異端者征伐の醜を演じたる某や、人を陷れてまで己れ取つて代らんと焦りし某宗教學校の校長を呶々せざるべし。されども天には永遠の審判者の眼のあるあり。彼

七

其の强盜の噂に就いては、岩野氏の語る所最も詳かなり。事は師が東北學院に在りしの時に係る。師は此の奇禍の爲めに三日間豫審獄に繋がれしが素より無根の事實なれば直に放免せられたり。傳ふる者皆曰ふ、この强盜に會ひしもの、即ち所謂强盜にあらざるなきを知らんやと。

而して其の强姦や、不正の商賣の如きは、悉く揣摩譏誣に過ぎずして、爲めにする所ある小人の所爲のみ。青柳氏は之れを有邪無邪に附して筆を濁らしぬ。川合氏曰はく、

『其の清國北京に於ける師の行動の如きは、門外者何をか知らむ。師は東邦問題の爲めに死を賭して入清せし也。其の家族を東都の一友と仙台の一友とに托し、而して行きたる也（當時此の秘密を知る者天下唯此の二人のみ）其の渡航に先ちて、師は旅費の出處なきに窮しける際、偶然相知れる某商人の渡清せんとする者に會せり。彼の商、師が一切の旅費、滯在費等を負担するが故に、その代りとして、師が大臣將校等に交あるを機とし、自家商業上の便宜を圖り呉るゝやう願ひ出て、師は之れを諾せり。是れ後來種々の浮評の湧きいづる源泉となりし也。その軍隊慰問の事の如き、初め基督教會より別に人を派せんとせしが、金なくして未だ其の運に至らざりき。師は當初秘密に渡航せんとせしも、其の狀況を見聞して氣の毒に思ひ、自ら進みて、吾が任事の傍らに慰問をなしても可ならば、吾れ其が任に當るべしといひしかば、衆皆な渡りに船と喜びて師に依頼し、師乃ち仕事の傍ら之れに當りし也。

師が彼の地にありて李鴻章と會し、慶親王に面し、相圖りし事は極めて秘密なりき。そは、當時若し發する時は、內は支那通を以て誇る小野心家

より妨げらるゝの恐れあり。外は諸外國の交渉入るべければ也。而して戰後日本の軍隊が、戰に勝ちたりとて馬鹿威張をなし、諸外國の着々として戰後の經營に餘念なきにも係らず、我はたゞ戰勝の夢を語りて得々たるが如きを見て、師憤慨一番某將校を冷罵せし事あり。彼の將校の先づ歸國するや、押川の商賣、腐敗ビールの賣付け、其の他種々の風聞起れり。又入航の時同船して、事を以て師に不快を抱きし某政客が、未だ北京に入らず天津より引きかへしながら、北京なる師の行動につき、面り見たるが如く種々の風評を立てたり。』

風評！風評！燕雀何ぞ鳳鴻の志を知らんや。憐むべきは小人の行爲、江戸の敵を長崎にて取る斗胥の鬻なる哉、而して人の惡を聞いては、足下より鳥の飛び起つやうに態と囂々の聲を高くし、以て得々たる、醒め易き、熱し易き島國根生は至る所に發揮せられつゝあるを見て、人は何等の感あるか。

八

青柳氏曰はく、

『評していたいその混沌として偉大なるを知り、峭として多面なるに畏服し、豫言者にして能く爲政家たり、將軍たり、商賈たり、色師たり、詩人たりといひ得るに過ぎざるのみ……嗚呼わが押川方義や、實に其の心上は天に達し、下は地に貫き、その廣袤（アメンシヨン）は、廣く宗教の高さより情事の際にまで及ぶ』と、

Xといひ、Yといはるゝ師の怪容は髣髴として現れ來るを見ずや。教育家として彼れの成功は如何。活氣滿盈、隱然東北の雄鎭たるの感ありし東北學院の、師一度去るや宛然藻拔の殼の如き現況を見ずや。宗教家として彼れの成功は如何、聖壇に師の聲を聞かざるや久しく、教界寂として天籟の響を傳へず、其の狀恰も風雲の聲を收めて、俟ちあるのさゞめき天地に盈ちるの感なくんばあらず。

一度出でゝ東北學院の總理となり、ついで海外教育會の會長となり、一度教壇に立ちては、其の生命より迅しる懸河の雄辯に、滿堂の聽衆をして感泣せしめ、震慄せしめし師は、今や張三李四の徒が、徒らに信仰箇條を喋々し、正統派の信仰を裝ひ、裏面には傳道會社長の一小椅子や、一學社校長の位置を爭ひて日も足らざるの間に、全く有象無象の聲望を敵履の如く棄てゝ、湧き起る醜評讒謗をも平然として知らず顏に、汲々として所謂金儲けに餘念なき師の行動は、是れわが國の大疑問にあらずや。是れ素より、禁酒と禁煙と禁女郎とを以て斯教の根本義の如く考へ（青柳氏の言を借りて）妄りに大人を讒謗し、妄評し、而して其の讒謗妄評に附和雷同する所謂豫言者、所謂義人、所謂名士、所謂熱心なる信者（川合氏の言を借りて）給料に離るゝを心配して傳道に汲々たるを見せかけ、正義を賣物にして、人の弱點を食物と爲す流（岩野氏の言を借りて）の人々、非らず、自己の富貴榮達以外に眼もおはさぬわが大政事家、大教育家、大實業家諸彥の迎も〳〵解し得べき處にあらざらんか。

巷間傳へて曰ふ、彼は今やコンミツシヨンマーチャントと成つて白耳義の某シンヂケートを提へ大に外資輸入の道を開き、三井の人參トラストを成功せしめて幾万の借金を返濟せりと。塵事師を誤るを患ふる勿れ、英雄傑士の胸中必ず余裕綽々たるものあつて存す、事業は師の形骸なり、靈火に燃ゆる師の天賦の生命は常に躍々として神人の極美に瞑契す。頃日師談笑の間に語つて曰はく、天地間に於ける極高點は所謂世の最極高に非ずして凡てのもの〻中心にありと。味ふべき哉。

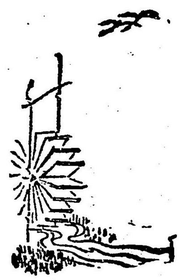
九

『あゝ師は實際不羈自由に行動すれども、流れて放蕩とならず、魔に入れども魔の奴たらず。毀る者、褒る者以上の境界に立てるを如何せん』彼れは而も何事をか爲さんとするに似て、又た其の考

へ圖るところの何たるを容易に人をして知らしめず……わが押川方義は、其の偉人たり、豪傑たると共に、又一大怪物なり。其の未來や如何に變ずべきか、到底今より豫測し難きものあり。日本の社會或はわが方義の雄飛によりて其の根底を覆さるべく、或はわが方義遂に乘ずべき風雲を得る能はず、胸中種々の矛盾衝突ありて、爲めに何のなす處なく朽ちはて終はるやも又知るべからず』

『而して彼れ押川師若し此のまゝに他界の人とならば、外形的の歷史は毫も彼れの事を傳ふる事なからむ。然れども現在主義の人何ぞ憂へんや、自我の擴張これ彼れの大事業なれば也』

人物を知る事豈易からんや、子を見る事親に若かずと雖も、親もまた子を謬り見る事多し、況んや局外者をや。唯天に日月あり、光明爛として聖なる帝座神はとこしへに萬軍を統べたまふ。眞にわれを知る者はわれ也。而して最もよくわれを知る者は神なり。

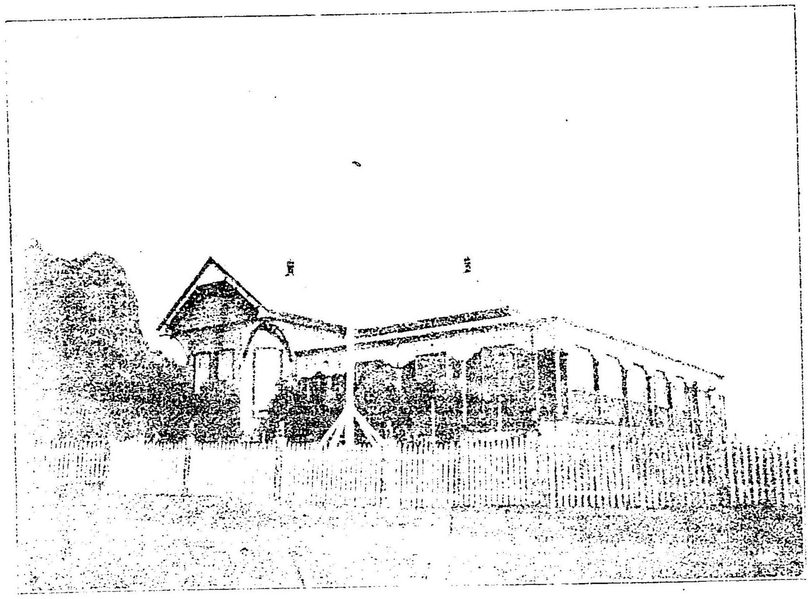


新島襄氏且つてはじめて師を見て『われ今日日本に於いてはじめて恐るべき人物を見たり』と感嘆せられしといふ押川師が、捲土重來、天下の風雲に乘じて再び社會の表面に現はれ來るの時はいつなるべき。余は八千のわが會員諸君と共に、眺目して光ある其の幔幕の開かるべきの日を俟たんなり。

（編者識）

編者無辭、加ふるに冗長、意のある所を知るに苦しむ。編へに諸君の諒諒にまつ。（四月十三日）

ク井上ミッション女學校の中學校



小川一眞製

同上日本紙事館

讀賣

▲讀者諸君へ謹告▼

一、本誌前號の本欄へ「古河市兵衛氏と淺野總一郎氏」と題して掲げた記事のうち、淺野總一郎氏を既に故人となつたやうに記したのは、全く同筆者の思ひ違でありましたのを、輕々しく此處へ掲げましたのは、全く編輯者その人の疎漏の罪と云はねばなりません。こゝに謹みて淺野總一郎氏をはじめ讀者諸君に謝し、併せて淺野氏の長壽萬歲を祈つて置きます。

一、本誌は七月發行すべき次號、即ち第十七號で第一期が完結するのです。それやこれやで諸話の紙數が増加する爲めに、思ふやうに讀賣以下の紙數を滿すことが出來ませぬ。これも偏に諸君の御高恕を願ひたいのです。

編輯者しるす

新室内遊戲法

文學士　多田幾雄

『兄弟よ、智慧に於いては嬰兒となる勿れ。惡に於いては嬰兒となれ、智慧に於いては成人となるべし。』

哥林多前書十四の二十

青葉若葉、そこの野や彼處の原に萠え出づる今日この頃、これぞ誠に青年の時期！野外運動の時機である。

されども好事魔多し。降りみ降らずみ此のころの空を、折角指を折り數へて樂みて樂しめる野外運動も出來ず、さりとて、心こゝにおらざれば、碌々書籍も讀めず、頭腦は岑々とする、あはれ辛氣くさいことよ。

このような時の最も好き治療法は、實に此の頭腦に新しき空氣を吹き込むことである。かような時こそ、何か目新しい室内遊戲をして見たいとは誰れしもの人情であらう。吾人がこゝに新室内遊戲法を說くのも、全くそれやこれやの爲めに他な

らぬのである。が、しかし限りある本誌の紙數、無論であるから、その答をば互に見せ合はぬようにすることが必要である。

そう〳〵澤山に紹介する譯には行かぬので、こゝには眞の少しばかりを……。その他はまたの折に、紹介したいと思ふ。

かくて、各自、それ〴〵の項をばすべて書き終つた後、それをば一々高らかに指揮官が讀み上げるのである。

猶はこゝに附記して置くのは、此度こゝに掲げるのは、すべて英語練習の爲めの、新室内遊戯法だと、豫め諸君に承知して貰ひたいをである。

▲CONSEQUENCES.

そこで指揮官が問ふべき事項とゝふのは

一、Her name.　二、His name.
三、Place of meeting.　四、What he said.
五、What she said.　六、What the world said.
七、The consequences.

以上の七問である。

譯して云へば、結果を求める遊戯とでも云はうか。扨て、この遊戯をするのには、其處に集ふて遊戯すべき人々は、先づ第一に各自に紙と鉛筆とを準備せねばならぬ。

それで之れ等遊戯者のうちから一人の指揮官を選む。此の指揮官は、次に記せる各項を順次に讀み上げると、遊戯に列つて居る人々は、一々それに相應した各項の答案を、それ〴〵持ち合はせた紙に認める。勿論、その座に居合はす五人なら五人、八人なら八人が各自別箇の答案を認めるのは

この遊戯の面白みと云ふのは、つまり各自の答に飛びはなれたことがあるからのことで、雨中のつれ〴〵なぞには、この遊戯は隨分面白いことだらうと思ふ。次に答案の一例を擧げれば

EXAMPLE.

Lydia Pinkham and John Sullivan
Met in London.

He said: "How wonderful!"
She said: "It must be true!"
The world said: "I told you So!"
The consequences were, They were very happy.

▲THE HOUSE THAT JACK BUILT.

これは一名文章引き延ばしの遊びと云つても宜しいのであつて、此の遊びをするのには、遊戯者が先づ圓陣を作つて坐る。それで、例へば先づ第一番目の人が、次ぎのように云ひ出す

"Here is the key of Blueheard's closet."

すると、第二番目の人は、これに續ぎ足して

"Here is the string that was tied to the key of Blueheard's closet."

と斯う云ふ。

ざつと先づ此のように、次ぎ〴〵に文章を續ぎ足して行く遊びである。

それで此の遊戯の名を "The house that Jack built" と名づけたのは、ナショナル第一讀本を讀まれた方々は、恐らく何人でも覺えて居るをであらうが、此のような標題の下に、順次に文章を引延ばして行くようの書き方になつた一文章があつて、これは至極面白く思はれるのである。多分、これ

と云ふ。

これに續ぎたして、第四番目は

"Here is the farmer that sowed the hemp that made the string that was tied to the key of Blueheard's closet."

と斯う云ふ。

ざつと先づ此のように、次ぎ〴〵に文章を續ぎ足して行く遊びである。

それで此の遊戯の名を "The house that Jack built" と名づけたのは、ナショナル第一讀本を讀まれた方々は、恐らく何人でも覺えて居るをであらうが、此のような標題の下に、順次に文章を引延ばして行くようの書き方になつた一文章があつて、これは至極面白く思はれるのである。多分、これ

から起つたものであらう。

▲SUSPENDED APPLE.

丁度、林檎の期節であるから、此の遊びも面白からうと思ふ。

此の遊戯の名を譯して云へば「つるした林檎」と云ふのであつて、先づ成るべく大きな林檎を糸でつるして、椽先きに繋けて置き、その周圍に砂糖蜜を一ぱいに塗つて置く。

扨て其の席に列なる遊戯の五人なり八人なりが順次に、此の林檎を糸でつるしたまゝ、手をかけずして、喰ひ取るのである。

何しろ林檎は大きくはあり、それに周圍に砂糖密がついて居ることであるから、つる〳〵して、仲々歯をあてることが困難である。

そこが即ちお慰みであつて、第一番目に、この林檎を喰ひ取ることの出來た人は、その褒美として此の林檎を貰ふのである。

此の遊びは少し野蠻のようではあるが、仲々、捨て難い面白みもあるのである。

▲FLY FEATHER.

譯して云へば『飛ぶ羽』。これは徐程、無邪氣な遊びである。

遊戯者は、二重にならぬように、出來るだけ相接して圓陣を作つて座るのである。それで、その中央へ大風呂敷ほどの大きさの切れを廣げて、各自の膕で、それ〴〵の一端を、決して離すことのないように押へて居る。

それで、その中の何人かゝ、一片の鳥の生毛を飛ばすのである。そして、その鳥の羽が、落ちて來ないように各自に、それを吹くのである。

それで、若し誤つて其の羽を、その中の何人かの頭の上か、若しくは、布の上に落したものがあれば、その人は罰せられるのである。それからまた、誤つて膕から布をはなした人があれば、その人も罰せられるのである。

▲"SIMON SAYS."

『サイモン、セイス』——此の遊びも亦た、無邪氣で仲々面白い遊びである。

この遊戯をするのには、先づ第一に指揮官を作らへて、之れをサイモンだと假定する。

それで、此のサイモンが、其處に遊戯をして居る衆人に向つて

"Simon says thumbs up."

と云ひながら、自分は拇指を上へ向ける。

すると、斯う命令された、遊戯に連つて居る人々は、一整に、それと反對に拇指を下に向けねばならぬ。

それからまたサイモンは

"Simon says thumbs down."

と命じ、自分は拇指を下へ向ける。

すると、遊戯に連つた人々は、一整に、それと反對に拇指を上に向けねばならぬ。

このようにしてサイモンは "up", "down" と幾度となく繰りかへしつゝ、此の遊戯をつゞけるのである。

それで、遊戯者のうちで、指の動かし方を間違へたものがあれば、その人は罰せられるのである。

* * * * * *

この度は先づ、此の邊にして止めて置き、またの折、改めて、いろ〳〵變つた、他の遊戯を紹介することに致しましようが、最後に、こゝに、この遊戯のことについて、この頃出版された書籍の一つを紹介して置かうと思ふ。

それは『中學新遊戯』といふ書物であつて、著者は高山源助氏と呼ばれ、出版書舗は、例の合資會社富山房である。

『今の時に當りて、事新しく体育的遊戯の奬勵を說くの要なし、寧ろ進んで之れが實地演習の方法を攻究すること目下最大急務なるべし。頃者文部省は中學校新令を下して、新たに遊戯の一科を加へられたり。然れども坊間未だ一の中學遊戯書なるもの、著述あるを見ず、隨つて各中

學校に於いては徒らに此の新令に辜負するの止むを得ざるものあり、是れ吾れ人ともに大いに遺憾とするところにあらずや。云々』

とは、此の書の緒言である。勿論、これは主として、戸外遊戯法を説明したものであるが、諸君が遊戯の參考には、仲々面白いものであろうと思はれる。

それで此の書の要目を擧げると

旗送り　梯子潜り　どぢょう取り
雷　觸　一能相撲　工兵演習遊び
團隊兎　患者送り　輪取り競爭

右の外、まだ數十種ある。一々叮嚀に説明が加へられて、畫が挿んである。それで定價は金二十八錢であると云ふことも、こゝに序でに、書き添へて置く。

フリードリッヒ大王の逸事

村山鳥徑

普魯亞王フリードリッヒウヰルヘルム陛下は特に多くの逸事に富み給ふ方にぞ在しける左に掲ぐるものもその二三なりけり。

大王曾て不眠症に罹り玉へる事あり。特にその扈從等に命じ玉はく順次己が寢所の隣室に侍し召しに應して直に傍近う詰れよとの御沙汰なりき。或る夜の事明方の二時頃呼鈴を以て誰かあると召し玉ひしに常の如く應ずる者なく再び召し玉ふに又あらず遂に高く叫びて呼び玉ふに又答ふるものなく夜は寂として御枕邊の燈火只耿々と人の來る氣わいもあらず今はやゝ憤り玉ひて自ら臥床を出て寢衣を引き上靴を召して隣室に樣子を見にと出でさせられたり。

室に入りて見給ふに扈從の一人机に靠れて熟睡し

居るなり書翰紙を前に伸べ筆を手にし手紙を半書きかけて未だ了らぬに眠り込みしものと覺し頭を安樂椅子に推付て口を開きたり。

「とんだ夜の番の扈從殿かな。あら心地好くも寢ねたり。朕も斯く眠を得れば如何にうれしからんを」

少焉青年を諦視して王は身を几邊に近け玉ひ

「偖何物の斯く彼を疲憊せしめけん」

曰ひつゝ机上の書翰を覗ひて讀み玉ふ

愛する母上

私の律義に儲け申候少々ばかりの金を御手許に御送附申上候事を欣び申候御承知の如く私の俸給は少額に候まゝ只今迄僅少の金さへも御送り申上兼居候處這回陛下は私共扈從に毎夜御寢所の隣室に順次宿直の旨仰出され候處仲間の者は皆厭がり候て私に一夜一圓の割にて代理させ申候今晩にて早や三晩を其爲め徹夜致此金は其より得候ものに御座候私は今夜は餘程睡もねく眠

を見開き居り候事も仲々難義に有之明日は最早勤め難しと存候又其内陛下の御不例も御全快の事と奉存候……

手紙は未だ結了せざれ共睡魔は此處に彼の青年を魅して得堪へず熟睡の中に陷れたりしもの、如し王は其を見そなはせ寢間に急きて金を滿たせし財布を取來りそを青年の衣兜に入れ置きて復び寢所に入り給ひぬ程經て隣室の中に微かなる音を聞き青年目覺めたるを知り給ひて又もや呼鐘を響かせ給ふ青年は直に入り來りて其時何氣なく手を衣兜に差入れけるに觸れけるものは彼の金に滿ちたる財布なり驚きの餘り涙さへ差汲まれて直立たる顏を大王は見そなはし

「如何にかせし汝の顏持の常ならぬは」

と問ひ掛け玉ふに彼の青年は懼れながら

「陛下僕は隣室に在りて疲勞の餘り實は少焉假寢しける間に何者か來りて衣兜の中に金の充ちたる此財布を置きて去りたり恐らくは盜人の吾に

罪を假さん爲め企みし事にこそといと心元なう覺へ侍るになん」

斯く言も終らぬに王は

「否々そは盜人の仕業に非らずかし朕が卿の衣兜に置きつるものなり。卿は善き正直なる青年なるかな今よりは母にも多く送らん爲め俸給を數倍して得させんに。」

* * * * *

フリードリッヒ王郊外に離宮を造營ましまし其處に著述家フォルタイレイなど召し給て樂み玉ふ事屢〻なりき

或日王は其周圍の地を公園になしたらんにはいと樂しからんと覺してそを目論ませ玉ひけるに先づ其地先なる粉挽小屋を取り毀たしめんとしてその侍從の者に買ひ取んとの聖旨を傳へしめ玉ひしにその小屋の主人名代の一酷者にて仲々聽かざりけり、王は少く氣色を損じ給ひ然ば朕親ら其下賤に面ひて申聞する廉あらんと乃ち小屋の主人召喚さ

れて王の御前に罷れば王はいと優しく

「儕粉挽そちの粉挽小屋を高價にて買ふて取らせうと思ふが什麼ぢやな」

「いや御免を蒙りませう那の小屋は祖父の代より受繼だる重代の遺物僕は彼の裡と存じ安心を致しそれのみならず息子も孫奴も彼の小屋に辛き浮世を面白く送らせんとの僕の願には御坐りますればその儀ばかりは御受け致されません」

さすがの大王陛下粉挽の餘りの執拗さに半は呆れ半は又片意地となり給ひて聲を荒らげ

「其方は聞しに增る頑固な奴かな如何程強情張りても朕が取らんとすれば無價でも取り得ざる事やある」

云ひ掛け玉ふ御言葉に粉挽は冷かなる笑を浮べて

「大王陛下。御心の儘に取らんとならば取り給へ去りながら直に又誰かに取られて御了ひなさるイヤそれは當然なる道理で御座る。盜人は天下

の御法度で罰せられずには濟みませぬ。宜敷御座る」

と言ひ放ちて皈りかゝるを王は又呼返し玉ひ

「善哉老翁卿の言正に理に當れり。爾と爾の子孫は絶へず彼の小屋の持主たれよ。」

* * * * *

フリードリッヒ大王陛下は己が軍隊中に他國民を入營せしむるをを介意し給はず一日佛蘭西の青年又其軍籍に身を投じて置きけるその狀貌魁偉性情温謙卒たるの器に非る事を上長官に見込まれ拔擢せられて少尉の職をぞ授けられける然るに當時は年に幾度か陛下の親閱あるを例とし頃日又その御沙汰ならんとの噂ありければ長官は彼の佛少年の少尉を呼び云ひけるは

「近頃陛下の軍隊御親閱ある由なるが卿は新き顏なれば陛下の慧眼必ず御身の何物なるかを御下問あるは必定其時獨逸軍隊少尉ともあるべき身が獨逸語にて御答への出來ざる如きは恥しき次

第。それもさして六ケ敷き御下問にも非ず誰にも定りて聞かせ玉ふは

第一に爾は何歳に相成るか

第二　予が軍隊に何年勤務するか

第三　被服と給金は不足なく支給さるゝか

の三點にて此は一度も異ひしをなし卿今獨逸語に熟さんとするも及ばざる所なれば此の三問に相當する奏答を暗記して置ては如何に。」

との事なり少尉は委細畏まりて

第一問の年齢は　二十一才（アインウンドツワンチツヒ　アインヤール）

第二隊に居るを　一年（バイデイ）

第三被服も給料も兩方其時を誤らず受くと只管に暗記したりけり、

按の如く三四日を經て陛下の親閲あり彼の佛青年は又推察の如く御目に停まり質問擧りぬ。然に此日に限り大王は

「爾は予が軍隊に何年間勤務せるや」

と思ひ設けし第一問ならぬ第二問を先して問ひ玉ひけり。少尉は此處ぞと

「二十一才」

とぞ答へける。訝しげに見へける陛下は

「されば爾は何歳なるか」

少尉謹で眞面目に奉答しけるは

「一年間」

是に於て陛下は少しく逆鱗の容に鬚を弄りつゝ

「爾が逆上して居るのか朕がのぼせて居るのかいづれ普通ではなし」

との玉ふを聞きもあへず彼の被服と給金の事を問はれしならんと固く信じて居たる少尉は

「兩方共」

と答へけるに此時陛下も初めて偖てはと暗記の內幕を悟られ玉ひて少尉の側に寄りて肩を打ちつゝ

「もちつと獨逸語の稽古をしたら什甚ぢやの」

話の種子

中島孤島譯

▲運は棒の尖にも

誰れも運知らぬものはあるまい。人によつては年が年中好い運の人もあれば、時々に運の廻つて來るやうな人もある、かと思へば、また一生に一度好い運に邂逅はすともう夫れ限りといふやうな人もある。左樣、運の來方には幾通りもあらうが左りとて運を知らぬといふものはない。

改めて言ふまでもないことだが、神樣が小兒をお授けになる時は、何時でも母親の懷へ潛とお置きになる、華族樣のお屋敷の中でも、左樣だ、金持の温たかいお坐敷でも其の通り、がまた時によると冷たい風の吹きつける、野中の一軒家でも取て變りはない。是れは誰れでも知つて居ることだが、此の時神樣が其の子と一緒に、其の子の運までもお授けになるといふをは、恐らく誰れも知つては居まい。誰れも知らぬからと言つて、虛僞だとは言へぬ。イヤ全くのところ、夫れが決して小兒の傍に轉がつて居るといふのではない、たゞ毎日見て居る此の地球の何處かの隅に隱れて居て、何時か一度は屹度發見かるといふ處が、お慰さみなのだ。

此の運が或る時は林檎の中に隱れて居た。此の林檎が枝から落ちる所で、ニュートンといふ人が、其の運を發見け出した。若し此の話を知らぬ方があつたら早速先生に聞いて御覽なさい。僕は一つ他の話をしやう——左樣、僕のは梨の話だ。

先づ或る處に一人の貧乏人があつた。此の人は貧乏の中で生れ、貧乏の中で育ち、而して貧乏の中で家を持つた。稼業は挽物屋で、蝙蝠傘の柄や、附屬の小道具を拵らへて、手から口へ、何うか斯うか其の日を送つて居た。

『俺には迚も運が向いて來ない』

と平生口癖のやうに斯う言つて居る。

是れは本當に有つた話で、僕は其の仕んで居た國の名も、町の名もよく知つて居るが、茲には必要がないから言はぬ。赤い、酸い秦皮の樹が、家の周圍にも、庭の中にも澤山に生へて居た。庭には一本ぎり梨の樹があれど、果といつては一顆も見たをがない。さて〳〵此の實りもせぬ梨の果に運が宿つて居たといふのは不思議な話ではないか。

一晩恐ろしく風の吹いたことがある。新聞を見ると其の夜一臺の乘合馬車が、土塊か何ぞのやうに吹き飛ばされたと書いてある。されば朝になつて、梨の樹の大枝が割けて、窓の下に横はつて居たのも不思議はない。主人は此の梨の枝を仕事場へ持ち込んで、細かに挽割り、手頃な梨の實を一つ、もう一つ同じ位なの、夫れからもつと小いのを一つ、更に小いのを三つ四つ拵らへたが

『此の樹も何時か一度は此樣な梨が實りさうなものだ』

と言つて、子供の翫具に夫れを與つた。

雨の降る時に無くてならぬものは蝙蝠傘だが、其の蝙蝠傘がたゞ一本あつて、家中で夫れを其通に使つて居た。其の一本限りの蝙蝠傘が、此の間の風の時に彼方此方破損したので、糸と扣釦を持つて來て、自分の手で繕ふて置いたが、どうも工合よく行かず、疊む度に、糸が斷れたり、釦鉦が落ちたりする。

或る日疊まうとすると、またぞろ釦鉦が脫れてしまつたので、床の上を探したが、何處へ行つたか見つからぬ。壁際で手に觸つたのを、釦鉦かと思つて取りあげて見ると、夫れは此の間子供の翫具に拵らへてやつた梨の實の一番小さいのだ。

『オヤ釦鉦かと思つたら左樣ぢやない』と獨語

『これを一つ使つてやれか』

と其の眞中へ孔をあけて、細い紐を貫して、早速釦鉦の代りに夫れを使つたが、思ひの外巧くいつて、失した釦鉦よりは餘程いゝ。

其の翌の年蝙蝠傘の柄や、其の他の小道具を町へ出す時に、此の梨形の小さい釦鉦を拵らへて見本に出した。所が此の釦鉦をつけた蝙蝠傘が、亞米利加で大層評判よく、其の次の注文には、是非此の梨の釦鉦をつけたものをと云つて來る。

此の樣なことから此の男の仕事は俄かに殖へて來て、梨の釦鉦、梨の釦鉦で、此の頃はもう眼の廻る程の忙がしさ。夜晝なしに轆轤の音で、庭の梨の樹は悉皆梨の實に變り、其の梨の實が銅貨になり、銀貨になつた。

『俺の運はあの梨の樹に棲まつて居た』

と今では口癖のやうに言つて、立派な工場の中で男や女を使つて居る。

何時も好い機嫌で、若い者に向ふと、吃度

『運は棒の尖にもあるものだ』

と言つて聞かせる。

梨の話は先づ是れ丈けだが、丁抹の國に斯ういふ諺がある、

『白い棒を口へ入れゝば、姿が隱せる』

と言ふのだ。併し其の棒といふのが唯の棒ではいかぬ、本當の運の棒でなくてはならぬ。

僕は仕合せに此の棒を一本持つて居るから、亞米利加へ行く時は、何時でも夫れを持つて行く、亞米利加へ行つて皆なに遇つてしまふ。左樣岸邊には大洋の波も寄せれば、風も吹くけれども僕の物語を人が讀んで呉れる時には僕は何時でも其の場に居て、子供達の美くしい眼に輝やき、其の可愛らしい唇から音を洩らす、あの比類なき黄金の光りも見れば、響も聞く。其の時僕は吃度其の部屋の中に居るのだが、人の眼には決して觸れぬ。

あの白い棒を口へ入れて置くのだもの。

如何にも、運は棒の先にもあるものさ。

▲豆の上の姫君

昔し〳〵一人の王子があつて、一人の王妃を娶

るといふことになつたが、是非何卒本當の姫君を見つけたい、多くある姫君の中でも本當に姫君らしい姫君を王妃にしたいと思ひ、御自分で諸方の國々をお歩きになつた。併しさあ見つけやうとなると何うも思ふやうなものがない。姫君といふ姫君は幾何もあるが、さて孰れが注文通りの本當の姫君であらうか、其の場に臨むと氣が迷ふて、また何かしら難癖が出て來て、遂々見分けがつかぬやうになる、左樣な工合で、王子は失望して國へ歸り、此の頃ではお城の中へ引籠つたぎり、たゞもう鬱ぎ込んでばかりお居でになる。

或る晩のこと戸外は大層な暴風雨で、雷が鳴り稻妻が光り、雨は打ち薙るやうに降つて、誠に恐ろしい氣色でした。時に誰やらお城の門をトン〳〵と叩く者がある。

門を開けて見ると、戸外には一人の姫君が、マアお慘しい！全身雨にたゝかれて、其の恐ろしい暴風雨の中に立つて御座る。髮の毛からも衣服からも雫が滴れて、靴の爪先と足の踵からは、瀧のやうに水が流れて、見るから痛はしい御姿。夫れでもただ自分は本當の姫だと仰有るのであつた。

『よし〳〵試して見ませう』と皇后樣は獨りで點頭き、何も仰有らずに、寢室へお入りになると、臥具を皆な取り除けて、豆を一粒寢臺の底へ置き、其の上へ二十枚の蒲團を重ね、また其の上へ雁の織毛を二十枚置いて、其の姫君を寢かせました。

朝起きると、皇后樣は姫君に向ひ、

『昨夜は熟く眠られましたかへ』

とお尋になる。

『イヽエ』と姫君は悲しさうに『妾はつひ終夜眠ませんでした。何か知りませぬが寢床の中に固いものがあつて、全身黑痕になりましたの。本當にまあ恐ろしいこと』

と言ひましたので、あの二十枚の蒲團と、二十枚の織毛の下へ置いた豆粒が分るといふのは、本當

の姫君に相違ないと、皆々感心しました。

王子は愈〳〵本當の姫君があつたと言つて、早速此の姫君を王妃にし、其の豆粒は博物館へ納めになつた。誰れか持つて行きさへしなければ、今でも乾度博物館にある筈です。

是れは實際あつた話ですよ。

▲指物針の一生

或る所に一本の指物針があつた。此の針は平生から自分をある縫針のやうな纖美なものだと獨り定めに定めて

『氣を注けて確かり持つやうにお賴み申しますよ』

と今自分を取りあげた指に向ひ、指物針が聲を掛ける『落しては厭ですよ。妾は此の通り纖美な身躰だから、床へでも落ちたが最後、もう見つかるこつちやない』

『ヨシ〳〵大丈夫だよ、此の通り』と五本の指で言ひながら、確かりと針を持つ。

『一寸御覽、妾が今尾を曳いて行くから』誰に言ふともなく斯う言つて、スル〳〵と長い糸を曳きながら針が進む。

五本の指は料理人の上靴へ眞直に針を刺す。上靴の表の革が二つに裂けた、其の裂目を綴ぢくらうとする。

『マア此樣な鄙しい仕事を』と指物針は顏をしかめ『妾には迚も貫らないよ、アヽ折れるーアヽ折れる！』と言つたが其の通り二つに折れてしまふ『言はないこつちやない、妾は纖細いからつて、あれ程言つたのに』

『最早何にもなりはしない』と指は銘々に心の中で思つたが、尙は前の樣に確かりと持つて居る。夫れは料理人が此の針の頭へ封蠟の塊を着けて襟飾に刺さうと思つたからだ。

『妾は斯う留針になつたのだよ』と指物針は獨語『此の上まだ出世するに定まつて居る、左樣何時までも同じつてことはありはしない』

斯う言つて腹の中で笑つた――指物針の笑ふのは外からは見えはしない。針は馬車へでも乗つたやうに傲然と澄して、其處へ坐り、四邊を見廻して居たが、

『失禮なことを伺ひますが、貴女は黄金で出來てゐ居でなさるんでせう』と自分の隣の留針に向ひ『貴女は本當にマアお美くしいこと、夫れに御自分のお頭なんだもの、今こそ此樣な小さくつて在らつしやるが、乾度御成長くなりますよ封蠟で頭を拵らへた輩なんどとは違ひますわ』。と餘り身躰を乘り出したので、其の拍子に襟飾から抜けて、今料理人が何か洗つて居る溝の中へ落ちた。

『ナーニ、全で見失なはれてさへしまはなければ、鳥渡旅に出るも同じことさ』

と指物針は口の中で謚いた。

が併し、實際は見失なはれたのだ。

『妾は此の世界で餘り纖美過ぎる』と針は尤もらしく『だが、自分丈けは自分をよく知つて居るから、マア何時も不足はないやうなものさね』。斯樣な風に自分一人で高く棲まつて、上機嫌で居ると、頭の上へ、木片や、藁の屑や、新聞紙の切端や、其の他樣々なものが泳いで來る。

『アレ、種々なものが通ること』と指物針は口の中『誰れも自分の下に何があるか知らないんだよ。妾が此處に居るのに、妾が此處にジッとして居るのに、アレ、木片が行くよ、自分の事より他は何も考へずにさ！アヽ、其處へ藁が行く、彼樣に渦を巻いてさ！彼樣に轉輾つてさ！自分のことばかり考へて居るものぢやありませんよ、お前さんは、鋪石の所だつてスーツと通つて行けるぢやないか。アヽ、此處へ新聞紙の片端が泳いで行くよ、何か書いてあるのだか、疾の昔に人が忘れたことだらうが、夫れでもまだあゝやつて自分から傳れて歩く。妾は此處に靜かに耐として坐つて居る。妾は自分をよく知

つて居るから、此處に斯うやつて居るのだ。』

此の指物針の傍に何かピカ〳〵光るものがある。夫れは玻璃纏の碎片だが、あまりピカ〳〵光るので、これは乾度金剛石だらうと針は思ひ、

『貴君は金剛石ですか？』

『ナニ、エヽ、似寄りのものです』

是れで双方共互に貴いものだと思ひ込んで、夫れから世界の自慢話が初まる。

『妾は貴夫人の手函の中に居りましたのです』

と指物師がいふ。『其の貴夫人といふのは料理人なんですが、銘々の手に五本宛指があつて、此の指程無益なものはありませんね、たゞもう妾を函から出して、また元の函へ納れるより外は用がないのですもの』

『夫れは光輝のあるものですか？』と纏の碎片が口を入れる。

『光輝！』と針は仰山らしく『イヽエ、威張るより他は何もないんですよ。兄弟五人さ、指の家族が總体でね。夫れが銘々頭を擡げ合つてゐるの、尤も同じ長さぢやないのですがね。外の方にあるのが拇指といつて短かい、肥つた、他の指の一列になつた前へ、ズン〳〵歩いて行く、背中に一つ限り關節があつて、唯た一つ屈折の出來るのですが、若し此の指がなかつたら、人は何も出來ぬとかいひますよ。示指といふのは、甘いものや、酸いものゝ中へ入れたり、日や月を指したりするので、何か書く時に一番骨を折るのは此の指ですつて。長指は三番目で他の指の頭を見下し、輪指といふのは腰の周圍へ黄金の輪を箝め、子指といふのは何もせずに遊ぶのを自慢にして居ます。夫れはもう何時でも威張つて、威張つて、妾は其れのために溝の中へ落ちましたの』。

『夫れでも我々は今茲へ座つて、光つてるのだ！』

と纏の碎片が言つた。

此の時大層な水が來て、此の溝の緣へ溢れこし、其の拍子に孃の碎片を攫つて行く。

『アレ、彼樣なに高く上つて行く』と指物針は呆氣にとられ、『妾は此處に殘つてる、餘り纖美過ぎるから。だが、これが妾の自慢なのさ、價値のある自慢なのさ。』

夫れで針は頭を擡げて其處へ坐り、種々なことを考へて居た。

『妾は何うも日の光りから生れたのだらうと思ふが、斯んなに綺麗なんだもの！、お日樣が始終水の中を覗いて、妾を探して居なさるのぢやあるまいか。アヽ、妾は生みの親にも見つけ出せない程纖美なのだ。若し元の眼があの儘着いて居たら、妾は聲を立てたらうと思ふよ、だが其樣なことは出來はしない、聲を立てるなんて其樣な野蠻なことは。』

或る日町の子供が二人、此の溝へ入つて水を浚ひ出し、古い針や、鏽びた錢や、其の他種々なものを拾ひわげて居た。其の中に、

『ヤア』と言つて一人の子が、あの指物針を足から抜き取り『君此奴を與らう』

と言ふのを聞いて、

『此奴だつて？妾は若い貴夫人なのに！』

と針は呟いたが、夫れは勿論誰れにも聞えなかつた。

此の時は最早封蠟は殘らず脫れて、眞黑に鏽びて居た。其の黑いのが却つて纖細く見せるので、自分では以前よりも纖美だと思つて居る。

『卵の殼が浮いて來た！』

と言ひながら子供は其の卵の殼を拾ひ、其の中へ此の針を入れる。

『壁が白くつて、妾が黑い！マア、よく似合うたこと』と針は四邊を見廻し『何うかして船に暈はないやうにしたいものだ、暈へば直ぐ二つに割れてしまふから』

と言つて居たが、好い鹽梅に少しも暈はなかつた。

が俄かに

『ミシリツ！』

と凄まじい音がして、卵の殼が荷車の齒に觸れる。

『ヤレ、ヤレ、滅茶々々だ！』と針がいふ「アヽ、何だか暈ふやうな心持になつて來た——アヽ、苦しい、愈々割れてしまひさうだ！」

併し車の齒には觸つたが、割れはしなかつた。今迄の儘で地面で轉がつて、もう拾ひ上げる人もない。

▲マッチ賣の少女

嚴い嚴い寒さだ、雪が降つて、日が暮れて、其の歲もう是れぎりといふ大晦日の晚であつた。此の冷たい暗い中を、貧らしい少女が一人、露頭で、赤脚で、町から町へ通つて行く。家を出る時は確かに上靴を穿いて居たが、其樣なものが何にならう？、夫れは大きな、大きな上靴だつた、今迄は母樣が穿いて居たのだもの、大きい筈さ。併し道を橫斷つた時、向ふから馬車が二臺恐ろしい速力で來た、其の拍子に此の靴を遺失してしまつた。一つはもう見つからなんだが、片方は小僧が拾ひ、俺の赤子が出來たら搖籃にすると言つて駈け出して行つた。

夫れで今此の少女は、寒さのために赤靑くなつた、其の少さな赤脚で歩いて行く。前垂の中に幾何かのマッチを入れ、一束は手に持つて。

終日歩いても誰れ一人買て呉れぬ、銅貨一つ呉れる者は無かつた。餓えて、凍えて、可哀想に身を縮めて歩いて行く。長い、黃い、肩の上で可愛らしく渦を卷いた髮の毛の上へ、雪片はヒラ〳〵と落ちかゝつたが、今はもう其樣なことを考へる暇がない。窓には、皆な燈が點いて、燒鳥の香がプン〳〵と匂つて來る、これこそ新年の晚に違ひない、少女の心の中で左樣思つた！、

とある家の隅へ身を寄せて、其處へヒッタリ坐り、小さな足を寄せて見たが、餘計に寒い。夫れでもマッチが一つも賣れず、銅貨一つ持たぬ故、

何うしても家へは歸られぬ。父樣は打つたり何かするし、家へ歸つたつて矢張寒い、家根があるといふばかりで、風がヒユー〳〵吹込むのだもの、藁や、襤褸片で大きな穴丈けは閉いでおつても。

小さな手は寒いのでもう感覺がない。アヽ、あの束の中から小さなマッチを一つ拔いて、壁で擦り、夫れで指を温めたら、まだしも少しはよからうに。

やがて一本拔き取つて、シユッ！、と擦る、パチ〳〵と音を立てヽ、パッと燃える。其の上へ手を翳すと何てマア温かい、美くしい焔だらう、小さな蠟燭のやうな、本當に稀代な小さな光だよ！此の小さな娘には宛でピカ〳〵する眞鍮の脚と、眞鍮の蓋のある、大きな磨き立てた暖爐の前に居るやうに思はれた。其の火は美くしく燃へて、まだ誠に暖たかい——脚も序に暖ためやうと思つて兩脚を開いた——其の時序に丁度火が消えて、暖爐が消えて、——燃えさつたマッチの端ばかりを持つて坐つて居た。

また他のを擦つた。燃えて、光つて、壁を照すと、壁が網のやうに薄くなつて、部屋の中が透いて見える。其處には食卓があつて、白い布が掛り、陶器が並んで、燒いた鵞鳥が、林檎や乾葡萄を塡め込んだまヽ、ポッ〳〵と湯氣を立てヽ居る。夫れよりも素張しいことは、其の鵞鳥が見る間に皿から躍り出して、小刀や肉叉を胸へさしたまヽ、床の上を透通け回り、此の少女の方へやつて來た。と思ふとマッチが消えて、たゞ厚い、濕つた、冷たい壁があるばかり。

他の一つへ火を點けると今度は美くしい聖誕祭の樹の下に坐つて居た。其の樹は前に大きな商人の玻璃窓から見たのよりも、大きくつて、立派なのだ。綠色の枝の上には蠟燭が幾千ともなく燃へて、此の前店の窓から見たやうに錦繪もある。少女が兩手を其の方へ伸した時に、マッチが消えて、聖誕祭の火は高く昇つて行く、アヽ皆な星になつ

てしまつたと思つて空を見て居ると、一つ飛んで火の線を長く曳いた。

『オヤ、誰れかが死ぬよ』

と少女が言つた。これは後にも前にも唯た一人、此の少女を可愛がつた、あの死んだ祖母樣が、『星が飛ぶ時には、魂が一つ神樣のお側へ昇るのだよ』と敎へたからだ。

新らしいマッチを拔いて壁で擦る、と夫れがまた燃へて、其の光りの中に、燦然と輝いて、優しい、懷かしい、あの祖母樣が立つて居る。

『祖母樣！』と小兒は大きな聲をして『オヽ、妾も連れてつて！、此のマッチが燃へてしまへば、祖母樣も行つちまふんだらう。妾は知つてるよ。あの温たかい暖爐や、佳味さうな鵞鳥や、大きな、立派な聖誕祭の樹のやうに行つちまふんだらう！』

と斯う言つて、祖母樣に行かれては大變だから、忙がしく、一束マッチを皆な擦つた。其のマッチは晝の日中よりも明るい程の光りをして燃へ、祖母樣は今迄になく、大きな立派な祖母樣になつて、此の娘を抱きあげると、二人共光りと喜びの中に、高く〳〵飛んで行く。もう寒いことも、飢じいことも氣に掛かることも、何も無い——二人は神樣のお側へ行つたのだ。

併し此の家の隅に、赤い頬と笑つた口元をして、座つたまヽ、大歲の晩に凍死をした娘がある。新年の日が此の小さい身躰に當つた時、見るとマッチを持つて座つたが、其の中一束丈け燃えさつて居る。屹度夫れで身躰を温ためやうとしたのさと、人々が言つた。何樣な奇麗なものを此の娘が見て、何れ程立派に、祖母樣と一緒に、元日を迎へたか、夫れは誰れも知らないのだ。

非豪傑時代の豪傑

有本次郎

"Hero of unheroic age."

「非豪傑時代の豪傑」とは、是れ曾て英國の一新聞が、彼のツランスヴァール事件に有名なる、所謂當代の奇傑、セシル、ジョーン、ローヅを謳つた讃美である。

彼は實に千八百五十三年七月五日。英蘭ハートフォードシャーに生る。父はフランシス、ウキリヤン、ローヅと云つて、ストートフォードの寺院の管長で、彼の兄弟は十一人と聞く、而して彼は其の六人目であつた。八歳の時同地の小學校に學び後オックスフォード大學に入つたが、早く既に神童ローヅと云はれ、遂に一世の偉人として世界に名を知られたのである。

其のオックスフォードの在學中、彼は家兄ハーバートがキムバレーに金剛石の採掘に從事せるを助けて、ロンドンの惡寒の健康に適せざるより、常に茲に避寒の傍ら、課業の書を手にして、土人が採掘の土砂中より金剛石を洗ひ分ける際に、其の金剛石を窃取されざらんことの監督に怠り無かつた、焉んぞ知らん、此の時既に、南阿の運命はこの一學生の掌中に握られてゐつたのである。

後年南阿マタベルの事起るや、英本國はローヅ等のために兵を送つて、其の戰ひを助けたのであるが、是れに要する一切の軍費は、即ちローヅの主宰する南阿非利加特許會社の負擔なるに、會社は此時種々の事情より多額の出費に堪へ兼ねる處から、ローヅは一大冒險手段を企て、單身マトツボの山寨に入り、親しく土蠻の首魁を說服せんと思ひ、身に寸鐵を帶びず、一人の醫師サウアーと、ケープタイムスの通信員ステント大尉と、外に同地の老獵夫コーレンブランダーの三人と共に、一條の鞭を手にして悠然マトツボの山寨に向つた。時は千八百九十六年五月中半のことで、人皆其の無謀冒險の策を危まぬものは無かつた。

一行マトツボの山麓に至り、先づ一人の嚮導を雇ひて土蠻等の所在を探らしめ、且つ彼等が和を欲するや否やを窺はしめた。丁度其の時、土蠻等は山寨の平坦に集まりて方に白人の處置に對する會議中であつたので、嚮導者は靜かに土蠻等に告げて、ローヅの今しも山麓に來たりて、切に和を求むる由を說いた。すると、首魁等の多くは默して暫らく其の說を聞いてゐたが、中に少壯血氣の輩は密かに逸らんとするので、首魁中の老者は夫れを制して嚮導に云ふに「我等幸ひにローヅ氏に會する事を得ば無上の光榮とする處であるが、恐らく氏は輕々しく來たらざる可ければ、氏の行中に在るコーレンブランダー氏に見へんことを望む。若しローヅ氏にして此處に來たらば、我等は禮を以て必らず是れを迎ふるべし」と約した。コーレンブランダー氏は同地の老獵夫で、マタベル語に通じて土蠻等の間に最も勢力ある老人だ。

其處で嚮導者は山麓に歸り來たり、土蠻の意向をローヅに語る。ローヅ大いに喜び、直ちに山に登つて往つた。

彼等土蠻の會議所と云ふのは、山巓の一平地で、四方絕峯を以て圍まれ、自からの城廓をなせる處であつた。で、ローヅ一行が其處に達した時は、四方の絕峯悉く土兵を以て充たされてゐたので、彼等素より嚮導との約の如く、禮を以て一行を迎へたけれど、果して是等無賴血氣の蠻奴を制し得るや、見るも戰慄するほどであつた。

時に山巓高く白旗を掲げ、首魁等は一列に幷んで降り來たり、懇篤禮を極め、頗る柔順にローヅ一行を圍繞し、首魁等は前方半圓形に地に坐して早速會議を始めた。ローヅは徐ろにコーレンブランダーを通辯として、先づ彼等土蠻の不平のある處を尋ね、諄々として相互の往違ひを說き、又大いに彼等を慰さめた末、ローヅは決然起つて、厲聲一番目を瞋らし。「予は强ちに汝等が白人に對して戰ひを挑みたるを、必らずしも咎め立てをするに

には非ず。然しながら、汝等は何の故を以て、罪無き我等が婦人を殺し、又我等が小兒を害したるか。是等は斷じて許すこと能はず」と云つたので、土蠻よりも一行は其の豪膽なる放言に心膽を寒からしめた。

實に彼等土蠻の、能くこの一言に抗して、反噬を弄せざるこそ幸ひ、コーレンブランダーが通譯を憚りたるに、土蠻等は不思議にも、却つてローヅを恐るゝこと鼠の猫に於けるが如く、叩頭平伏して其の過ちを悔ゆるのみ。又一言を發するものも無かつた。

ローヅ再び面を和らげ、さりとて今更過ぎたるは追ふべきに非ず。只今後を警しむ。汝等果して和を欲するや、或ひは飽くまで戰はんとするか。是れに對する土蠻等の確答こそ、ローヅ一行が特に危險を侵して此處に來れる主意で、一行の運命も亦定まる處であつたから、皆片唾を呑んで彼等の答え如何にと、半圓形をなせる首魁等の座中を見渡した。

やがて彼等の中の、尤も年長なる一人の首魁は突と身を起してローヅの前に恭しく進み寄り、手に持ちたる一條の杖を高く頭上に捧げ、一種異樣なる聲を發して、「乞ふ見たまへ、これ我等が銃砲なり。我等謹んで是れを閣下の脚下に投ず。」と云つて其の杖をローヅの足もとに投げ、再び取上げて前の如く高く差上げ、「これ我等の刀槍なり。我等謹んで是れを閣下の脚下に投ず」と言ひ終り、一揖して席に復するや、土蠻一同立て異存なきことを誓つた。

如斯してマタベルの反亂は一時平定されたのであつた。で、ローヅは尙土蠻等を慰さめ、優然山塞を下つた。土蠻等は歡呼して一行を山麓に送り歸したと云ふことである。

其の後キムバレーの平和破れて、ローヅ同地に籠城中、敵兵ローヅの寓居を知り、菅りに其の旅亭に向つて發砲を試みたが、不思議にも常に一彈

をも被らず。のみならず、ローヅ身の一小區域内に蟄居することを厭ひ、他の警戒八釜しきを顧みず。平然飄々として守備線を出で、單身市街に散歩し、或ひは馬を驅り、然も服裝を改めたこと無く、年來人に知られたる灰色の上着に、白フランネルのパンツを穿ち、鼠の中折帽を蒙りなれば、敵兵に取りては此の上も無い目印なれど、ローヅ更に怖れず。敵兵も是れを如何ともすること能はず。而して一彈をも受けざるは、畢竟幸運の致す處とは云へ、一奇と云ふべしだ。

又曾てケープタウンより或る海岸に達する枝線鐵道の落成した時。ローヅは喜望峰政府の事務長官として其の開通式に招かれた。式は海岸の或驛に催されるので、所謂田紳連中の會するもの多く、先づ同地に於て晝餐の饗應あり。終て停車場に至り、一場の式を擧げんとするに、肝心なる主賓ローヅの姿見えぬに、會主等驚いて其の所在を求め、人を四方に派して尋ねたが更に見當らぬ。この日

は八月中半のことゝて、暑氣甚だしかつたので、ローヅ堪えかねて獨海中に飛び入り、暫らく暑さを忘れてゐたが、急に停車場の式に臨む時間を思ひ出でゝ、慌てゝ衣服を着けて式場に臨んだ時はまだ頭髮から海水の雫タク〳〵滴れてゐたくらゐで、ローヅ其れを拭ふ遑もなく、起つて式辭を述べたと云ふ。

千九百〇二年三月廿六日、ローヅ心臟病の醫療屆かずして死するに臨み、友人ジエームソンの手を執り、「予が今日まで成し得たる處甚だ少なく、成さんと欲する甚だ多し、今や即ち君と別れんとす。君願くは多幸なれ」と云つて息を引取つた。この訃を聞いた喜望峰殖民地では、直ちに八音を封じ、門を鎖して業を廢した。政府は國葬を以て彼をマトツポの山巓に葬つた。これは彼が遺言に依つたので、マトツポはローデシア中に於ける尤も風光明媚の地。ローヅは是れを（世界一觀）と稱して、特に自己が永眠の地に定めたのである。

彼は尚遺言書に、所有せる巨萬の財産の處分方を其の管理人に托して、英領殖民地間の關係を一層密接ならしめんことを思ひ、各殖民地より定數の給費學生を募り、是れをオックスフォード大學に入れることにした。

ローデシアより總員九名、　毎年三名以下、
喜望峰殖民地南阿非利加大學三名、　年一名
同殖民地ステッレンボッシュ大學　仝、
同殖民地タイオシサン大學　仝、
グラハムスタウン聖アンヅリユー大學仝、　仝
ナタル殖民地　三名　仝
ニューサウスウエールス殖民地　仝、　仝
ヴイクトリア殖民地　仝、　仝
サウスオースツラリア殖民地仝、　仝
クキーンスランド殖民地　仝、　仝
ウキスタンオースツラリア殖民地仝　仝
タスメニア殖民地　仝、　仝
ニュージーランド殖民地　仝、　仝

加奈陀オンタリオ州　仝、　仝
加奈陀クヰーベック州　仝、　仝
ニューフォンドランド殖民地　仝、　仝
バーミュダス殖民地　仝、　仝
ジャメーカ殖民地　仝、　仝

この外北米合衆國をも附近を圖り、各州より二名づゝの給費生を募り、毎年一名づゝの新給費生を補足し往くことを書き加へた。

而して其の給費生は如何なる性質のものかと云ふに、徒らに讀書に耽りて、他には何等の才能無き、所謂ブックワームの輩を採らず、條件として左の注意をも遺記した。

(1) 學　力。

(2) クリッケット、フートボール等の如き、男子的戸外遊戯の嗜好あるもの、及び其の技倆。

(3) 男子的にして信實なるべく、勇敢なるべく、義務の念に強かるべく、弱を扶くるの義俠あるべく私無かる可く友愛なるべき性質。

(4) 其の既往在學中に同窓學生を指導したる才能の表證明かなるもの。

右の四條件に缺けざるものに限り、これを審判し、且つ採否の方法としては、

(1) 予が理想の學生は以上の四條件を、左の割合を以て具備せざる可からず。

第一に對しては十分の三。第二に對しては十分の二。第三に對しては十分の三。第四に對しては十分の二。

(2) 第一の條件は試驗に依りて是れを採點し、第二、第三の條件は同窓學生の投票に依りて採點す。更に第四の條件は其の學校長に依りて採點すべし。

(3) 採點の結果は速かに給費學生選定委員に送附せしめ、委員は其の諸點を平均して、最高點者より順次にこれを採用すべし。

斯くして彼は死後に於ても、其の抱懷せる理想を行はんとしつゝ眠つたのである。

報告　編輯だより

報告

中等教育會の求めに應じて、若しくは諸子の厚意により各地方より時々珍奇なる寫眞を贈與さるゝは本會の最も感謝するところなり。されど誌上自ら制限ありて、一時悉く之れを掲ぐるを得ざるを遺憾とす。依てこゝに最近寫眞寄贈者の芳名を掲げて感謝の意を表し、併せて漸を追ひ、本誌に掲ぐべきことを暫ひ置くものなり。

一、在布哇ヒロ市　合志賞男君
一、三重縣宇治山田町　久保茂親君
一、愛知縣尾張春日井郡　久野賢之助君
一、鹿兒島縣高麗　龍岡久熊君
一、三重縣（二度目）　久保茂親君
一、長崎縣小島郡　河野榮雄君
一、北海道函館　泉　虎三君
一、台灣台南　竹村壽雄君
一、石川縣　金澤　千田登代三君
一、東京本郷　金岡梅吉君

編輯たより

▲露しげき夏の小川邊に螢を追ふべきの時と相成り申候。日は日を追ひ、月は月を追ひ、行きて返らぬ歳月のさても早きものに候はずや。本誌も愈〻來る七月を以つて第一期を終るの時に際會いたし候、過去十五ケ月間熱心なるわが會員諸君の全情は深く感謝する所にして、而も記者の不肖なる、充分諸君の厚意に酬ゆる事能はざりしは深く遺憾とする所に候。

▲さはれ本誌が兎に角一異色ある雜誌として、世の所謂浩らん事をのみ是れ昌むる滔々たる雜誌界にありて、聊か有爲なる青年學生諸子の爲めに貢獻する所多かりしは識者の等しく認識する所、記者は一層舊つて愈〻本誌の特色を發揮すべき決心に候。

▲夕、うすれゆく夕日の影を仰いで人生窮極の問題に思ひ至りて記者は何となく涙こぼれ申候、語るべき事こそ候へ、餘白は猶ほ禿筆をしやぶるべく、幾十行をこゝに存するをや。

▲噫彼や逝けり、涙多かりし五月廿六日よ、第一高等學校哲學科の秀才藤村操は、朝露にも似たる人生のはかなき幻影を追ふに忍びずして、青春の夢いちはやく人生窮極の問題に無限不可解の恨を抱いて華嚴の瀧に投じぬ。暮春の若葉に愁雲低うたなびく日光の山色思ふに永久の悲恨を語るなからんや。

▲さりや、人生は遂に不可解なるか、こはまさしく疑問に候はずや。勉學また勉學、小學より中學、高等學校より大學、而して學士となりたりとせよ、留學生となりて博士となりたりとせよ、而して其の結果は？大學の教授となるべく、國家顯要の地位に國政を料理すべく、あらず妻を娶り子を産んでさて何とすべき運命ぞや。死の限は冷かに、見よ日夜人生の淚を洗ふ。

▲あゝ白く塗りたる墓畔の感慨はとりも直さず人生不可解に哭するの叫に非ざるか。死！是れ實にくだらなき俗界の煩累より脫すべく、無意味なる生活の軌道を離るべく、最もうるはしかるべき唯一のパラダイスにあらずや。

▲而も人生は終にかくの如くにして離くさるべきものなるや否や。基督は識者の參考すべき所に屬す。佛者は說いて極樂といひ、基督は然り天地萬象何物か果して不可解ならざる、花の美はしきも、月の冴けきも悲く是れ不可解にあらずや、而かも人は不可解なるか故に樂しむべからずといふべからず、不可解必ずしも樂しむべからずとせんや。

▲曰はく活動、曰はく靈の生活、こは此の問題に對して最も吾人の耳にせし所に候ひき。天地道悠久、希はくは諸君と共に健全なる解釋の下に希望ある人生觀にほゝ笑むの時あらん事をたのしまん也草々不一。

明治三十六年六月六日

讀叢

アブラハム、リンコルンの逸事

長田秋濤

凡そ棟梁の材となるの要件はといふに第一が、膽の大きな事即ち度量の廣い事で、之と同時に心のこまやかなる事即ち注意綿密に細事を洩らさぬ事である、もし其一つを欠いたならば到底人の上に立つて事業を成す事は出來ない。例へば膽が大きい斗りでは屁のくゝりが無いから事が成らず、さらばとて心が細かい斗りではこせ〳〵して居て人の長たる事も出來ねば思ひ切つた仕事も出來は仕ない。だから古來の英雄豪傑を見るに皆殆と神經過敏といはんばかり細心の處がある。リンコルン亦其の例に洩れずで驚く斗り細心綿密な人であつた。

千八百六十年彼が米國合衆國大統領に選まれて多年欝積して解けなかつた南北問題を、一刀兩斷戰爭に決して、終に南北關係を永久に定め、奴隷制度を全然廢止し去つた如き、よく膽の斗の如きあるに非すんば能はざる所で、彼の人物の大なる事は今更らしく喋々するの要はあるまい。予は玆に唯彼の半面にして最も世に知られたる細心の方面を聊かお話しようと思ふのである。

彼は漠然一國一地方の利害などゝ大きな捉へ所の無い事を知るを努めるよりは、先づ一個人々々を知り、よく心易くなつて知り拔いては他に及ぼし、已れが選出された一地方を知り悉し、次に一州に及ぼし、更に一國を知つたので、凡そ政事家中彼ほど多くの人を知つた人はないだらふ。

千八百六十一年例の南北戰爭の時彼は北軍總督

として今や戰地に臨むべく華盛頓まで來た、所が肝腎の軍隊が無い。陸軍も海軍も新たに作らねばならぬ。所で彼は從來有り來りの物で滿足しない。是非何か新らしい物、是迄のよりは良い物を用ゐたいといつて非常に苦心した。今日武器の進歩して居るのは或は發明家の苦心の結果とはいひながらリンコルンの此際の盡力の如き其發明を呼び起すに非常の力があつたものである。

所謂彼の『モニター』の出來たのが此時で、リンコルンの命令に依て作られた事は世人も知つて居るが其詳細の狀況を知つた者は極尠ない。當時彼の求めに應じて發明品を見せに來る者殆ど其數を知らぬ程であつたが、孰れも彼の感服する程の者はなかつたが、一日偶〻ブッシュネルといふ男が彼を其邸宅に訪ふて、例の有名なモニターの發明を見せた。所がリンコルン切りに熱心に之を檢べて殆ど何も言はずひねくつて試驗して居たが、直ぐに海軍士官の會議を召集して之が適否を決せしめた。何さま複雜な發明であるので會議大體の意嚮は不贊成の聲であつた。リンコルン始終列席して贊否兩派の討論を聞き傾首して考へ居たが、終りに兩說に對しては可否の聲も與へず、唯直ぐにモニター築造に着手するの命を下したといふ事である。

此時迄世間に行はれて居たのは所謂マスケットといつて單發銃でしかも筒口から一度々々掃除をして丸を込めるのであつた、軍艦といつても未だ非常に幼稚なものであつた。

彼は砲艦の不完全なるに苦心して其改良方案を求めると世間からは其案が雨の如くに彼の手に集つた。リンコルンは一々自ら之を檢閱して熱心に調査し曾て倦んだ色もなく、とう〳〵一個の新式を定めて之を作らせたが其戰爭の結果を見るに頗る良好であつたとの事である。

軍器の中でも改良を提議して來る者に隨分おかしな物があつて到底一笑にだも値せぬものもあつた。

又今の儘では使ひ途にはならぬが、今少し考案をめぐらしたならば隨分物になりさうなのもあつて夫等は一々其長所と欠點とを擧げて、一層の工夫を求めるなど實に人の意想外とする程の熱心であつた。殊に彼の困つたのは步兵に使はせる武器の足りない事で、國民の敵愾心が一時に盛になつたので吾も〳〵と義勇兵に出掛けて來る、買ふ後から兵器の不足を告げ、兵器局に備へ付けてある軍器は悉く出し拂ひ、歐羅巴から古い武器を買入れても未だ足りない。武器の新調となつて來た。

今日聞けば可笑しな譚だが其時分の兵器局の人々は皆例の先込め單發銃の方が良いと思つて居てリンコルンが折角檢案して是認せんとする元込め連發銃を誹り素人考だとてなし付けなかつたのである。併し一方は綿密周到に試驗をした結果なり、一方のは昔の者を喜ぶといふ感情丈で其優劣はいはずとも知れて居る、リンコルンは確信があつた。其頃或人に向て斷言して曰ふには今こそわからずやが那んな馬鹿を言つて居るが、遲き將來に於ては元込め連發銃は必ず世界中に用ゐらるゝ樣になるに違ひない。殊に步兵斗りでなく騎兵も之を用ふる樣になる事受合ひだと公言した。實に當時兵器局の黑人連中にすら知れなかつた事を、文官たる彼が將來を豫言して誤らなかつたのは、全く彼が熱心なる調査によるのである。然り彼が連發元込銃を採る事に決したのは實驗の上の事で當時リンコルンの部下に居て現に其實驗に携はつた人の話によると彼はある朝六時半に射的上手と聞えた人を連れて近傍の野へ出て、自らも擊ち、人にも擊たせ、以て新舊兩種の銃の優劣を試み、愈其功驗を確めた上で、初めて之を採る事に極めたのである。

彼は大統領としては大元帥ではあるが元來が文官で軍事には門外漢であるにも拘らず、此位熱心綿密に事を取扱つたのである。況んや本職たる文事に於てをやで、一を以て他を推して可なりだ。

曲亭馬琴の話

平澤木堂

馬琴の小說——その長短——自然を觀察する三態度——馬琴の小說と倫道的精神——馬琴と其の時代——馬琴の家庭——如何にして學びしか——建部綾足——大逆境——作者に志せし動機

▲馬琴の小說

惣じて、自然を觀察するに方つて、人の常に取るところの心の据え方に三つある。その三つと云ふのは(一)利用を主とする心の据ゑかた、(二)考察を主とする心の据ゑかた……即はち此の三つである。

利用を目的とするものを名けて應用的態度と云ふことが出來るなれば、考察を主とするものを假に究理的態度と云ふことが出來、賞翫を主とするものをば鑑賞的態度と云ふことが出來る。

「衣食足りて榮辱を思ふ」といふをは、その往時から云ひ傳へられて居ることではあるが、これは人間の天性から生じ來たつたものであつて、苦を避けて樂に就きたいと云ふ心は、人間に生れながら備はつて居る。これが即はち人間の實際的精神とも云ふべきものであつて、即はち之れは應用的態度の一つである。而して此の實際的精神に他の究理的態度と鑑賞的態度とが附隨して來ると、同しく實際的精神ながらも、一層高尚なものとなつて、倫道的精神となるべきものである。

曲亭馬琴の小說のうちには、主として此の倫道的精神が含まれて居る。これ馬琴の小說が、その普及を致し、當世に於いても猶は、もてはやす人のある所以である。けれども、彼の小說のうちには怪しいことや不思議なこと、驚くべきことゝすべてかゝる現象に對して、一つも科學的に研究すること無く、疑惑は其のまゝの疑惑として、一つも其の理を極むることなく、これに對して研究的態度を取ることなしに書き流して終ふてある、よし

や、多少は此の態度を取つたとしても、いかにも不完全極まる研究的態度であつた。それからまた馬琴は其の小說をものする際、兎角倫道的精神に偏る結果として、利用と理窟を離れた心の据ゑかた、即はち鑑賞的態度を取ることに吝であつた。云ひ換へれば、馬琴は自然と人間を條理の側からばかり見るに急であつて、趣味の側から見ることに於いて、あまり狹量であつた。この二つの點からして馬琴の小說は、今の世に於いて、或る人々からは忌まれ、面白からず思はれて居る。

それは兎にも角にも、馬琴は一代の小說家であつた他に、若し云ふことを許し得べくば一代の學者であつた。この一代の小說家たり、學者であつたところの曲亭馬琴は、いかなる時代に生れて、いかなる家庭に養はれ、いかにして學んだことであらうか。こゝに其の一般を述べて見ようと思ふ。

▲馬琴と其の時代

國學者には加茂眞淵、加藤千蔭　村田春海、本居宣長。

漢學者には細井平洲、井上金峨、松崎觀海、千葉芸閣。

俳人には蓼太、存義、買明。

書家には三井親和、松下烏石、澤田東江。

以上のように、それ〴〵立派な學者が居つた。けれども、小說家としては、殆んど一人も立派な人の居なかつた時代に、馬琴は其の初發聲を上げたのであつた。

その時代と云ふのは、今から百三十餘年、明和四年の六月九日。これが馬琴の生誕日月である。

▲馬琴の家庭

父の名は運兵衞、姓は瀧澤。數年仕へた松平兵庫頭の家を浪人して、この頃には江戸は深川の淨心寺門前に侘住居。夫婦の他に、長男の左馬太郎、(二男は夭死)三男の清次郎、四男の左五郎(即はち

馬琴）の五人の家族であつたのである。

然るに此の頃、天災しきりに引きつゞき、それが爲めに、靈岸寺門前といふ程近いところへ引き越したのではあるが、馬琴四歳の時、即ち明和七年八月の十一日と云ふに、また〳〵靈岸寺から失火した〳〵め半燒失の有樣になつた。さらぬだに不足がちなる此のころの生活、馬琴の兩親は殆んど途方に暮れたことであつたが、先きに天災のあつた後、家の繕ひが出來ても、まだ借家人の無かつたのを幸ひに、再び淨心寺門前へ引き移つたことであつた。

かく、いろ〳〵と難儀な生活をして居るうちに二人まで妹が生れた。長は名を蘭、妹は菊と呼ばれたのである。

馬琴の家庭といふのは、先づ此のようなものであつた。かゝる家庭に生れた馬琴は、果して何のようにして勉學したことであらうか。

▲如何にして學びしか

これを記す前に、恐らく之れが、馬琴の小說家となつた動機かと思はれる事柄をば、ちよいと述べて置きたいと思ふ。

父の知人に建部綾足と云ふ人があつた。常はあまり來たことの無かつた人であつたが、或る時、何處かへの出掛けに、ちよいと立寄られた。すると、父も敬ふ人と見えて、父の言葉も改まり、一種二種物語りした後、頓て此の人は歸つて行つたが、子供心にも、馬琴は何うしたものか、此の人がしきりに奥ゆかしくてたまらぬので、いろ〳〵と此の人のことをば父に尋ねた。

すると、彼の人は學識があつて、今の世の俳諧宗匠は取るに足らずと見下して、俳諧といふものをば、古の風に引き直して片歌といふものにして弘めた人であつて、弟子は千人の上もあり、繪も畫ければ、和學も深い、實に世にも稀な才人であると話された。

それに附けて加へて、父は、汝も好く學んで、

彼の人の藝能の一つでも好いから、身につけるようにしたが好いと、染を話されたのであつた。實に馬琴は此の人をば、世にも珍しい人ではあると思ひ込んだ。まことに、これぞ馬琴が小說家になつて見たいとの動機であつたらしいのである。

それは扨てをき、安永四年の三月二十六日といふに、父の運兵衞は死んで終うた。この時、兄は十七、中の兄は十一、母は三十八、妹は七つに四つ、而して馬琴は此の時、僅かに九歳であつた。されば、此の時、母子、父の棺を取りまいて、途方にくれたのも尤もなことであつた、が、これと云ふのも、或ひは天の大任を此の人に下さんが爲めに、先づ斯く、いろ〳〵の試みに遭はせたのかも知れぬ。

家庭の事情が此のようであつたので、馬琴は母が恩愛の羈に繫がれ、止むなく醫師にならうとしましたが、その功名に驅られた心、空望に充たされた心は遂に自ら匙を投ぐるようになつた。その後、坊主にならうとしたが、これも、まんまとなり損つたのである。

かく失敗に失敗を重ねた馬琴は、こゝに暫時母の姉の世話になることになつたと云ふのも、この伯母は三人の甥の中でも、取り分け馬琴を愛し、その才智のすぐれ、氣力の健かであつたのを認めたからであつた。然るに此の伯母は手が好く書ける、淨瑠璃本も好きなり、それに其の所夫の鈴木三太夫と云ふのは好んで太平記を讀んで居たのでその寫本が一部あつた。元來無爲にして居られぬ馬琴は、此の太平記を二度三度繰り返へして讀んだ上、仲の兄なる清次郎の俳諧七部集と鴨長明の方丈記とを借りて寫し、兼て自分が愛讀して居つた風俗文選をば唯一の友として居つたのである。

この頃、馬琴は如何なる希望を胸に保つて居たかと云へば、彼はしきりに俳諧師とならうと思つて居たのであつて、斯くて伯父の家に居るうち、伯父から賴みの寫し物などする間にも、俳諧師と

なるには短冊面の好いのが第一であるからとて、一心不亂に御家流を學んで居たのであつた。しかるに、此の鈴木の隣家の悴に二十年ばかりの若者があつて、しきりに國學に志し、加藤千蔭の門に入つて、その手筋をも學んで居ると聞いたので、だん〳〵に此の人と親しくなり、此の人の習ひ上げた手本を借りては、しきりに習字を勉強した結果、天然器用であつた馬琴は、忽ち我流七分、千蔭流三分の一体を書き出すようになつた。これ等は實に、いかに馬琴が學事に熱心であつたかを證據立てゝ餘りあるものであらう。尚ほ又た、馬琴は、この息子から、その頃流行の草双紙黄表紙三四部を借り受けたところ、これは太く馬琴をして興味を覺えさせたのであつて、これを熟讀して面白く感じた結果、馬琴は、これほどのもので世に名を知らるゝことが出來るならば、世に名を知らるゝことは如何にも容易ことであると斯う思つたが、素より馬琴は之れをば氣振にも顯はさなかつたのであつた。

馬琴が作者として世に立たうと云ふ動機は、まことに此の時に萌したのであつた。

扨て、これから後の馬琴の生涯は仲々複雜なものであつて、僅々數頁のうちには仲々寫しきれぬことであるから、こゝに一先づ筆を擱き、第二期の『中等教育』紙上に、折を見て、更らに題を新たにして掲げることにしよう。

新刊紹介

▲中學東洋歷史教科書　共に文學博士坪井九馬三氏著、中學校用、師範學校用とは別にはなつて居るもの、、違ふは第一頁と最後の頁もだけで、其の他は全く同じ。主として支那の歷史を書いたもの、書き方がさつぱりして繁簡宜しきを得て居る。美はしい考證的插畫も少なからずある。惜しいことは文章が左傳まがひの漢文調で味ひが少ない。（定價各々一圓五錢、日本橋區本町文學社發行）

▲中學西洋歷史教科書卷下（文學博士坪井九馬三氏著）　著者も、躰裁も、文章も略々前の東洋歷史教科書に似て居る。文藝復興から現今までの歷史を、四號活字二百六頁に書いたもの。よい教科書。（定價九十錢、文學社發行）

▲中學校用作文教科書卷一（友田宜剛氏著）　曾て作文教範を著はした友田氏の著、とにかく平明で組織の立つて居る所がよい。作文教授者の參考として適當なものであらう。（定價二十五錢神田區駿河臺西紅梅町光融館發行）

▲經濟讀本（工藤重義氏著）　一般國民をして經濟學の原則と適用とを知らしめむが爲めに著はしたもの。序に曰はく國家の富强を圖るには勤勉なる國民を要し、勤勉なる國民を作るには青年をして國民經濟の尊重すべきことを知らしむるを要す。經濟學は來して少數學者の獨占物に非すして一般國民の必修科目なりと。含む所、總論、生產及び消費論、交換論分配論國家の財政の五編。趣味と實用とを兼ね備へたること、論述の權衡を得たること、等主として著者の苦心せる所、又本書の特色と云ふべし（定價三十八錢、神田區裏神保町光風館發行）

▲のもり草（馬場孤蝶氏著）　孤蝶氏の抒情文十數編を集めたるもの、文致優雅、やさしみ到るところに充てり。

▲梅王松王櫻丸▲葛の葉姫　前なるは少年世界文學の第八編後なるは其の九編、共に坪内逍遙氏の閲、正宗白鳥氏の著。共に我が古院本の名作を平易に縮寫して、少年の讀むに相應はしい短編としたもの。前者には『梅王、松王、櫻丸』、『菅原傳授手習鑑』の外『いがみの權太』、義經千本櫻』、『狐忠信』（義經千本櫻）の二編を收め、後者には『葛の葉姫』（蘆屋道滿大内鑑）の外『先代萩』、『伽羅先代萩』、『熊谷直實』（一ノ谷嫩軍記）の二編を收めたり。文章平易穩健にして趣味あり。少年の好伴侶たるべし（定價各々十二錢、神田區裏神保町富山房發行）

▲物理學講義（田中三四郎氏著）　中學程度の學生の爲めに物理學の參考書として編纂したもの、緒言に教科書でないから、説明を叮嚀にする爲めには文章の冗長に流るゝをも厭はず又成るべく文意を明確ならしむることを期したとある物理の學と

いふ點から見た價値は問外漢には一寸わからぬが、大体よく出來て居るように見える。唯だ叙述の体裁が法文的、個條書的で、連續して讀む上の趣味に乏しいのは遺憾だ。(定價一圓三十錢、神田區今川小路金剛芳流堂發行)

▲漢文故事熟語詳解(杉山孚富氏著)　專ら普通學を修むる者の爲めに、漢文によくある故事熟語を解釋したもの。詳解といふよりは寧ろ略解といふ方が適當だが、兎に角漢學修業に志ある學生には至つて重寶なものである。(神田區金剛芳流堂發行)

▲新選英語異同辨(横山砂氏編著)　著者の自序に曰く近來我が中等教育の英語教授法は大いに進歩して來たが、英語の中最も困難な同義字の意義用法を等閑に附するのは遺憾である。又邦語を以て同義字を解釋した書物も絶無といつてよい程だ本書は此缺點を補はむとして編纂したとある。趣意やよし、又英語の初學者に便利なものには相違ないが、文意のわかり悪い所が少なからぬのと直譯口調のあるのとは面白くない。例へば Plain を釋して「見らるゝことほと滑かに且障害物なきことを意味す」の如き然り。更に熟考を要する點少なからざるに似たり。(定價四十五錢、神田金剛芳流堂發行)

▲獨逸作文詳解(岡倉一郎氏著)　著者の緒言に曰く近時我が國に於いて獨逸語を學ぶ者日に多し。然れども文法の困難なる英佛の比に非す。作文に於いて殊に然り。本書は此の困難を排除せむが爲めに編纂したるもの、初め和文國語を與へ、之れに適用すべき名詞、動詞、及び前置詞の使用法に綿密なる説明を加へて、之れを獨逸文に綴らしめ、巻尾に附したる解答によりて尚ほ自得せしむる方法を採れりと、以て本書の性質を知るべし。(定價二十三錢　神田金剛芳流堂發行)

編輯だより

▲會員諸君。我が中等教育がはじめて諸君と此の世に相見てより月を閲する事十五ケ月、幸ひに會員諸君の親厚なる交情を得て、今や愈〻本誌第十七號を以て第一期を終はる事と相成り申し候。是れ記者の非常に光榮とする所にして、更に將來の責任一層の重きを加ふるを自覺するものに候。

▲第一期は終はりぬ。第二期は已でに旭日の勢を以で開始せられたり。二巻に向かつてわかたれたる記者の精力はこゝに一致して第二期の三號よりは充分に手腕を揮ふの余地を得申すべく、作戦の計畫は今や着々として記者の胸中に開展せられおり候。

▲是れまでは兎角多忙に取り紛れて等閑に附する傾ありし會員諸君よりの各種の質問其の他に對しては、今後可成親切に應答可仕諸君よりの注意は喜んで歡迎可致候。

ナイル河の戰

"Battle of the Nile"

村羊生

世界の英傑ナポレオン、ボナパルトの盛名は、三歳の童子猶はよく是れを記憶するところ、彼れの光榮ある風雲の生涯に就いては、曩に浮田先生が本誌第十三號の西洋歴史講話に於いて詳はしく述べられてあるから、茲には贅言を費さないが、實に百戰百勝向かふ所是れ悉く無人の境、殆んと歐洲の天地を蹂躙し、其の名を聞いてさへ震慄せもめたといふ堂々たる當時の威風はどんなに盛んなものであつたらう？而して、獨逸、墺太利、西班牙、皆いづれも其の威風に靡いた間に獨り蟄々たる小島に據り、よく連戰に倦撓して巧みに其の鋭鋒を挫き、雄然社稷萬年の聲名を墮すことなかつたのは唯だ英國あるのみである。堅實忠勇なる英人の眞手腕は玆る所に發揮されて居るのであるが、此の時に於いて最もよく發揚せられたのである。而して英國をして此の様な盛名を保たしめたのは、三人——政事家としてのピット、遠征軍總督としてのウエリントン侯、それに水師提督のネルソンを加へて、英國は實に千金の重きをなしたのである。其のうちでもウオータルローに於けるウエリントン侯の雷名は、トラファルガルに於ける將軍ネルソンの偉勳とならび稱されて、英國外交史上不滅なる万朶の花を飾つてゐる。

其のウオータルローの戰や、トラフ

ネルソンの戰は、よく人の知つてゐる所であるから、いづれ折を見て詳しくお話する事として、此の度は特に如上の題を撰んで第一期掉尾の本誌を綴り、聊かネルソン將軍の偉勳の一部分を語りたいと思ふ。

* * *

時は西曆一千七百九十八年、ナポレオン自ら指揮官政府に請うて潛かに埃及に向かふ事になり、雲霞の如き精鋭の大軍を指揮してまづマルタ島を占領し、進んで發し、地中島よりしてマルタ島を占領し、進んで亞弗利加に上陸し、アレキサンドリア府を破り、破竹の勢を以てカイロに迫り、遂にかの有名なるピラミッドの戰（"Battle of Pyramids"）にエヂプトの大軍を破り、連戰連勝殆んど埃及全國を平定するに至つた。

かくと聞いた英國は何條猶豫すべき、恰かも、佛軍大擧ツーロンを發したといふ警報が到着すると全時に、是れまで地中海の附近に居て佛軍の動靜を窺つて居た英の水師提督ネルソン將軍は、（俄かに旗艦バンガード（"Vanguard"）以下十四隻より成る艦隊を引率れて埃及に急航した。處がついて見ると案外そんな模樣も見えないので、ネルソンは直ぐに引き返へしてシリアに向かつた。其の後へ行き違へたやうについ〳〵とやつて來たのがナポレオン。日は七月の一日。

こちらはネルソンそれとは知らず、血眼になつて探がしたが敵の隻影も見ないので、再び舳艫相銜んで埃及に來て見ればこれは〳〵とばかり。ネルソンは嚇となつた。

頃しも仲夏葉月の一日、雲霓を天の一方に望むの時、艦隊は愈滿帆に風を孕んでアレキサンドリアの沖にかゝつた。天宇滿碧にして万里波起こらず、涼風はのかに征衣を拂ふ心地よさ。

時正に四時、先鋒艦ゼーラス（"Zealus"）の檣頭高く一箇の信號旗がひらめいて、左舷アブーキル灣（"Aboukir Bay"）に於いて敵の艦隊十數隻の碇泊して居るを報じた。歡呼喝采、我れ勝ちに俟ち焦がれた艦隊はいづれ雀躍して喜んだのである。ネルソンの眼は輝いた。丁度夕餐の卓につかうとする時に、思はず一士官の肩を叩いて如何にも愉快そうに、明日の朝は愈々華族の榮爵を賜はるか、さもなくはウエストミンスター寺の土になるか、此の二つ一つだ。と例の莞い笑いを漏らされた。

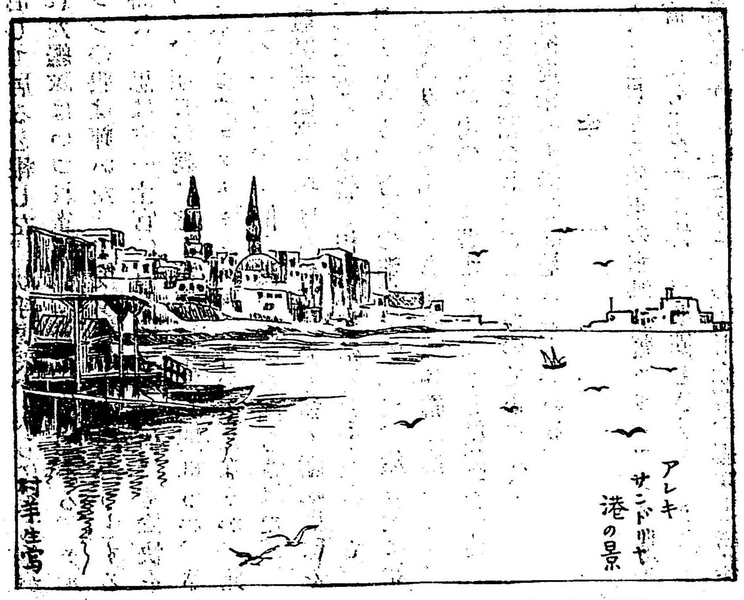
戰闘旗は高く揭げられて、光り輝く艦隊は徐々として進み、敵艦と相巨る事殆んど十浬にして、一旦とゞまり、万端の準備を整へて、然る後に始めて敵の先鋒を衝くべき命令は各艦に傳へられ、さらでも脾肉の嘆に堪えなんだりし精鋭なる英の將卒をして奮ひ起こさしめたのであつた。

龍闘虎奮の大活劇は是れからである。

中の（一）

かくと見たる佛軍の水師提督カサビアンカ將軍は直ちに令を各艦に傳へて準備をさ〳〵怠りなく旗艦ヲリアン（"Orient"）以下廿余隻の艦隊を密集せしめ、海岸に沿うて凹字形に一列をなし、兩檣船や、水雷敷設船や、小砲船（ボンベルト）（ガンボート）が其の間を巡邏し、灣頭のアブーキル島（Aboukir Island）には特に砲臺を設けて数十門の大砲巨砲を据へ付け、威武堂々として遠く是れを望めば大艦巨船海を蔽ひ、帆檣波に映じて搖蕩し、陸には劍戟燦々として壘寨旌旗の間に閃めいてゐる。望遠鏡を取つて睥きもせず敵軍の動靜を見詰めて居たネルソンの眉には胃すべからざる決心の色が見はれた。實にネルソンの前には敵がない。旗艦堂々たる敵の陣營も彼れの眼には坦々たる平路を行くのと選ぶ所がないのである。轟く一發の號砲と共に、猶豫なく全艦隊は敵の中堅をめざして進んだのである。

日漸く傾いて落日海にあり、夕陽赫として映ずる所悉く是れ金色、みどりふかき埃及の連山はほのかに金煙を帶び、かすかにそよぎ來たる海風にうねりうねる金波銀波は、艦に碎け、岸に碎け、浪に碎けて白虹の飛沫を散らして居る。艦も、海



も鳴りをしづめて、其の有樣はさながら風雲を叱咤する大偉人の出現をまつかのやう。

中の(二)

猛然として近づき來たる英艦隊の檣頭には、いづれもセントジョルヂの赤十字旗が翻翩としてひるがへり、殊に旗艦バンガードの大檣頭には、綠、白、紅、紫、黃、靑などの六旒の麗はしい彩旗が掲げられ、それが金煙に溶け來る微風にゆらめいて、夕榮の空に反映する時の美くしさ。

五浬、四浬、三浬、彼我の距離はだん〳〵に近づいて來るのである。

唯見れば敵艦の一兩艘船アレルト號は、殊更に英艦隊の前に近づき來たりて詐り走り、其の追擊し來るを俟つてアブーキル島外の暗礁に導からんと試みたが無効であつた。ネルソンはなほ冷靜にミラネの艦長フートに Hood に灣內水理の測量を命じた。即ちフートは巧みに左舷轉帆を利用して暗礁を避け、更に右舷風を移して灣の水理を探

ぐり、各艦是れに從つて進み、一意に滿帆進擊の信號を共に十四隻の艦隊は、ゴリアス Goliath を先鋒としてジーラス號是れにつぎ、優々然としてアブーキル灣內深く侵入した。

時鐘六時、俟も搆へたる佛國艦隊は、空に靡く戰鬪旗のあひ〳〵を宣戰の喇叭いさましく、やがて第一艦コンケラン "Conquerant" の前部砲門のあたり、忽として白煙うづまき出づるよと見れば、轟然たる響きは一灣の平和を破ぶりてアブーキル灣の天地をゆるがした。

戰は已にはじまつた。砲門は開かれた。島上の砲臺また盛んに白砲を連發し、砲煙天に漲り、時に浪さかしらに立つ事十丈、各艦の運動は刻を追うて活潑になつて來た。

刻は秒をきざんで正に六時半、直然佛艦の戰鬪線を橫ぎつたゴリアス號の艦長フォレー Foley は、まづ佛艦グリアー "Guerrier" に向かひ、其の內舷に出でんとして果さず、却つて第二艦コンケラン

ナイル河の戰

ンと相對して砲戰を開ちき、尋いで進むゴリアスは早くも二隻の中軍艦を擊沈した勝に乘じ、無二無三にグリアーの內舷を目がけて敵の戰線に進み入り、盛んに砲門を開いてブツポルスベラン "Peuple-Souverain" の下甲板を射擊し、更らに左舷砲によりてフランクリン號 "Franklin" に當たり、オリオン "Orion" 次いで進み、敵艦セリユーズ "Sérieuse" を擊つて之れを沈め、最後列にあつたヲーダシヤス "Audacious" の艦長ゴールド "Gould" は驀然波を蹴つてグリアー號に肉薄し、更にコンケラン號を走らし、勇敢なるゼーザス "Thoseus" の艦長ミラー "Miller" は、グリアー攻擊の餘力をあげて、敵の第二艦スパルチアット "Spartiate" 內舷を砲擊した。

此の時まで猶は後列にありて戰況如何にと見成つて居た旗艦バンガードは、內舷の戰漸く闌なるを見るや、直ちに外舷に向かつて棹を進め、スパルチアットの右側に投錨し、新手の銳鋒遽かなし

に砲火を浴びせかけた。すはこそ旗艦よと見たる佛軍の眉は昂がつた、いづれも期したるやうに砲門はバンガードに向かひ、勇氣百倍全力を盡くして奮撃突戦、殊にスパルチアット號は第四艦アキロン（Aquilon）と共に全員死を堵してつるべ放ちの攻撃に、何かは以て耐まるべき、僅かに數分間にして忠勇なるブリテッシュの將卒は算をみだして打ち倒され、火と血を以て洗はれたるバンガードの甲板は、見るも酸鼻の極であつて、事に死するもの忽ちにして六十余人。僅かに生を保つものも雖も悉く深傷淺傷を負はなきものはなく、前部三門の大砲は粉微塵に破壊されてしまつた。（かく）と見たるミノトオー（Minotaur）の艦長ルイス（Louis）は、すは一大事と叱咤勵聲、まつしぐらに彼我の間にわつて入り、獅子奮迅の勢鋭どくスキロンに撃ちかけたので、さすが強猛なる敵艦も當たり難く、一と先ず兵を收めて戦闘線外に免かれ、ヤレセヲオン（Bellerophon）エフェンス、

（Defence）メゼスチック（Majestic）の三艦は更に外舷にまわつて砲撃をつゞけたのである。

中の（三）

時既でに晩そく、落日おはく西天にほのめいて星斗光りあざやかに、大空を横斷する銀河の、影もおぼろげに立てこめたる硝煙の轟き、高く低く一灣の暗黑をゆるがし、彼我の艦隊は入りみだれてうす黑く〳〵浪のうへに浮んで見ゆる許り。

今しもネルソンは、旗艦の檣頭に心地よくも飜めく六彩旗を仰いでは、比類なくも勇ましきルイの働きぶりを、如何にも愉快げに見成りて、やゝともすれば血糊に滑べる甲板に足蹈みしめて衝立てる時。

一瞬間！一流丸あり、忽焉電の如く飛んでネルソンの前額を撃つた。さつと迅る鮮血に眼思はずもくらめいて、よろ〳〵と倒れる樣に甲板に俯伏した。驚いて艦長が驅け付ける。軍醫が飛んで來る。直ちに治療にかゝらうとする軍醫をネルソンは靜

制して先ず前傷者を治療せしめ、自らは擔荷に運ばれて治療室の眞白な寢床の上に横へられた。傷が傷、所が所、艦中晝色を失つた。ネルソン自身も亦到底起つべからず、今こそ永く屍大君の御爲に死する時なるを期し、法敎師を請じて最愛なる其の妻に告別の辭をかゝしめ、其の友ハーデー（Hardy）をバンガード號の指揮官に任ずる——艦長はリロは戰勝の報知を本國政府に齎らすべく既に指命されて居たので——の辭令に自署し、別に使してミノタオーの艦長ルイを枕頭に招き、懇ろに其の手を握り謝していふには『自分は今喜んで天國に行かうと思ふ。其の前に、君の是れ迄の勇敢絶倫なる手腕と、深き其の友愛の至情に向かつて、一言の謝辭なくしては迚も眠る事が出來ない。君の至情の愛は決して〳〵忘れ得ない』とて思はず眼をしばたゝかれた。實に瞑目し來たれば泡沫にも似たる三十年の生涯は、ネルソンに取りてはどの樣に光榮を以て輝いたであらうか。

ナイル河の戰

けれども天は大人を無爲に殺さない。上帝は今にしてネルソンを天國生に招くに忍びなかつた。漸く他の負傷兵の治療を了つて驅けつけた軍醫の斷案は滿艦をして狂喜せしめたのであつた。深傷は深傷であるが決して致命の患ひはないとの吉報が艦の內外に傳はるや否や、天をもゆるがす歡呼の聲はおさまたび珠方の將卒によつて繰り返へされたのである。

下の（一）

戰ふ事二時餘、八時に至つて暗黑はわまねく灣內をたてこめ、今はたゞ閃々たる砲火の闇の中を縱橫に縫ふばかりである。各艦の運動については一々之れを語るの煩に堪へないから、さつとかいつまんで御話しする事にしよう。

二時の進むに從つて英の勝算は愈々歷々たるものであつた。佛の三艦は無慘にも破壞せられ、二艦は捕獲せられた。けれども英艦の損害もまた非常なもので、殊にベレロフオンの如きは、敵の旗艦

アリアンの爲めに散々に砲撃せられ擊破せられて僅かにスヰフトシュア（Swiftsure）艦に救はれて戰闘線外に遁れた位。そこで、スヰフトシュアはアレキサンダー（Alexander）號と力を合せて、アリアンに當たり、全力を盡くして激烈に是れに酬ひ、苦戰慘憺の末我より放てる一發の砲丸覗あやまたず、敵の後檣の眞中美事に粉碎し、轟然怖ろしき響もろともに、たかと思ふとアリアンの後部甲板に破裂し、俄かに燃えあがる焰の光、くる〳〵とくるめくよと見れば早や甲板は一面の火！風が煽る紅の舌はさながら阿修羅王の狂ふとばかり、さすがの巨艦は見る〳〵炎の中に包まれたかのやう。陽炎のどよめき、歔欷のさけび、生きながらの地獄をこゝに赫奕して俄かに醒めたる海も船も、陸地、島も、たゞもう一面に天地に漲る硝煙に燃へたつばかり。火光に照らされたる彼我の甲板は、各艦を至る所死屍累々として堆をなし、淋漓たる鮮血は血潮の海の如く、帆はちぎれ、檣倒れて艦体に完膚なく、腥風殺氣は一灣にみちみちて眼もあてられぬ慘狀である。

かくと聞ゆるネルソンは、敵の不幸を坐視するに忍びず、痛苦を忍んで甲板に出で、自ら指揮して端艇を下ろさしめ、波間に漂ひ呻吟く敵の將卒を救ひあげさせ、瞬く間に七十餘人を助けあげたが其の餘は皆果敢なく水底の藻屑となつてしまつたのである。水師提督カサビアンカ、其の息子も——此の時漸く十歳、勇敢無比の英童であつた、——其の一人であつた。副水師提督ブルエーも戰死を遂げた。敵の彈丸によりて三ヶ所まで負傷したが、猶は彼れは自分の位置を去らなかつたといふ——。

接戰は夜半に至りて僅かにやんだ。啾々の鬼哭恐らくは天上にも達したことであらう。

（下の一）

曙の光は動いた。戰は再び開始せられた。トンナント（Tonnant）、ギロー（Guerrier）、

最もよく戰ふた。わがアレキサンダー、マゼスチックの二艦之れに當たり、ジーロス艦はジユスチス（Justice）を相手に其の北するを追ひ、砲煙再びアブキールの灣内に漲つた。

此の時まで猶は其の國旗を朝風に靡かして居るのは、佛艦の殿軍ともいふべきギローム、グレナエーク（Genereux）の二艦であつたが、而も形勢遂に如何ともすべからざるを見るや、いち早く二隻の中軍艦に信號して錨纜を解き、一方の血路を開いて北に走つた。かくと見てジーロス號は直ちに全速力を以て追跡したが、未だ半ばならずして旗艦より歸れとの信號を見て引返へした。ウールー、ネルキユールの二隻は白旗を掲げ、七隻は美事に捕獲せられた。恐らくはネルソンが負傷するやうな事がなかつたなら、一隻と雖もアブーキル灣を出る事が出來なかつたであらう。況んや、輕快なるカロデン（Culloden）が此の戰に加はる事が出來たなら、其の働きは更に目醒ましく、必ずや英國海戰史上最も美はしき光榮を荷ひ得た事であらうと思はれる。思ふ、ゆうべ夕陽に映じて綺羅星のやうに輝いた佛の大艦隊は今果たして何處にかある。戰艦、砲艦以下二十余隻の戰艦はちり〳〵ばら〳〵になり、旗艦ラリアンは燒失し、八隻は降伏し、其の他は或は沈沒し、破壞せられ、命からく逃け負したものは僅かに二隻、實に佛國の精銳なる海軍はこゝに全滅せられたといつてもよいのである。

時や曉の空早やく、晨霧やゝにうすれ〳〵て旭日東天にあり、新潮のおごりさやかに、よする漣もゆめのやう。

あなたには燃えのこるヲリアン、チモレヲンの横はるあり、こなたには沈沒した艦の檣ばかり現はれて居るのもある。浮べる英の艦隊も見るかげもない、破れちぎれたる帆、折れくだけたる檣、いづれも昨夜苦戰の名殘りをとどめないものはないのである。

ネルソン傳の一

ネルソンは各艦に令して其の前に感謝の祈禱を捧ぐべく命じた。式は午後正時といふに旗艦ベンガードの甲板にあげられた。式場はされいに洗はれて、艦長以下悉く其處に整列し、法敎師は起つて式を司り、祈禱、感謝、讃美は順序正しく執り行はれて嚴肅莊重、艦員いづれも涙をおとさなかつたものはなかつたといふ事である。各艦また是れに倣ひ、思ひ〳〵に報恩の式をあげた。

終つてネルソンは鄭重なる手書を一々各艦長に送りて祝意を表し、かゝる空前の大捷を收め得たるは神の惠ではあるが、一つはわが親愛なる各艦長、士官、水兵の平素の訓練技揃を遺憾なく發揮せられた結果である。諸君の忠勇無比なる精神誠意は必ず司令長官に向かつて推薦するであらう。と盛んに其の勞をねぎらつた。

＊　＊　＊

「ナイル」河の戰ひはかくして光榮ある全勝を以て終つた。古來海戰史上これ程激烈な戰爭はなかつたと稱へられて居る。思ふにネルソンの大偉勳はナイルの河の逆流せざる限りは榮譽ある歸ふるを以て永遠に語り傳へらるゝであらう。

寄語す諸君、今や西力東漸の歷史は更に新たなる考證を供すべく、暗雲陰霧天の一方に蹲るや已に〳〵久しである。有爲の男子正に須らく警醒すべきの時ではないか。安動や暴擧や、是れ君子の取らざる所、唯だ國家万一の時に處して、奮然劍を按して起つの覺悟は是非とも持つてはしいものである。余が禿筆を特に此の篇に起こしたのは決して〳〵徒爾ではないのである。

本書は帝國統治學の大家ルイギー、ユッド氏が其深遠なる研究を基き該博なる不學識を以て斯學の大綱を說述したるもの理義公正、所說簡約而かも內容豐富なる其ほとを敎科書たるに過ぎるのみならず一般研究の基礎となすに恰當なるを信ずるを以て之を觀ずるところなり

全一冊　紙數二百五十頁　正價金壹圓　郵稅金拾錢　〒上乘

發行所　東京牛込早稻田　早稻田大學出版部

博文館　東京日本橋本町

ネルソンは各艦に令してまづ前の前に感謝の祭壇を築くべく命じた。式は午後二時といふに旗艦バンガードの甲板にあげられた。式場はきれいに洗はれて、艦長以下悉く其處に整列し、法敎師は起つて式を司り、祈禱、感謝、讃美は順序正しく執り行はれて嚴肅莊重、艦員いづれも涙をふとさなかつたものはなかつたといふ事である。各艦また是れに倣ひ、思ひ〳〵に報恩の式をあげた。

終つてネルソンは鄭重なる手書を一々各艦長に送りて祝意を表し、かゝる空前の大捷を收め得たるは神の惠ではあるが、一つはわが親愛なる各艦長、士官、水兵の平素の訓練技術を遺憾なく發揮せられた結果である。諸君の忠勇無比なる精神誠意は必ず司令長官に向かつて推薦するであらう。と盛んに其の勞をねぎらつた。

* * * * *

『ナイル河の戰』はかくして光榮ある全勝を以て終つた。古來海戰史上これ程激烈な戰爭はなかつたと傳へられて居る。思ふにネルソンの大偉勳はナイルの河の逆流せざる限りは榮譽ある輝きを以て永遠に語り傳へらるゝであらう。

寄語す諸君、今や西力東漸の歷史は更に新たなる考證を供すべく、暗雲陰霧天の一方に蹲るや已に〳〵久しである。有爲の男子正に須らく警醒すべきの時ではないか。妄動や暴擧や、是れ君子の取らざる所、唯だ國家万一の時に處して、奮然劍を按じて起つの覺悟は是非とも持つてはしいものである。余が禿筆を特に此の篇に起こしたのは決して〳〵徒爾ではないのである。

御注文の節は本誌廣告に據る旨御附記を乞ふ

經濟學叢書

社會經濟原論

伊國ルイギー、コッサ原著
法學士 永井直好重譯

本書は伊國經濟學の大家ルイギー、コッサ氏が其深邃なる研鑽に基き該博なる學識を以て斯學の大綱を說述したるもの理義公正、所說簡約而かも內容豐富なれば之を敎科書として適するのみならず一般研究の基礎となすに恰當なると他に其遇を觀ざるところなり

全一冊 總クロース上製 紙數三百五十頁 正價金壹圓 郵稅金拾錢

發行所 東京牛込早稻田 早稻田大學出版部
發賣所 東京日本橋區本町 博文館

經濟學叢書

經濟統計學（下卷近刊）

米國 メーヨー、スミス原著
日本 吳文聰譯述

本書は各種の經濟問題を捕へ統計的に批評研究せしものなり今や世間漸く空論の無益有害なるを覺り事實に據りて經綸を行はんとす先つ本書を讀破し統計的經濟論の如何に精確を期するかを知領し以て經濟策の指導と爲さば其世を益すると蓋し尠少にあらさる可し

全一冊 上卷發行 紙數四百餘頁 正價金壹圓 郵稅金拾貳錢

發行所 東京牛込早稻田 早稻田大學出版部
發賣所 東京日本橋區本町 博文館

經濟學叢書

歐洲貨幣史

英國 タブリュー、エー、ショウ原著
日本 信夫淳平譯述

（附日本貨幣史）

本書は筆を歐洲に於ける金貨鑄造の創始に起して輓近印度政廳の銀貨自由鑄造停止に到る其間或は時の政策を學理に究め或は民人の休戚を實際に徵し或は貨幣の消長に關する古來學者の謬見を道破する等說き去り說き來りて考證周到統計精確蓋し近時有數の好書なり

全一冊 總クロース上製 紙數四百餘頁 正價金壹圓 郵稅金拾貳錢

發行所 東京牛込早稻田 早稻田大學出版部
發賣所 東京日本橋區本町 博文館

歴史叢書

再版

法學博士 高田早苗校閲
山本利喜雄編著

露西亞史

總クロース上製 紙數四百五十頁
正價金壹圓貳拾五錢 郵稅金貳拾錢

全壹冊

石版着色地圖挿入

本書はラムボー！ド氏の名著を基とし傍ら博く東西の史書を參考して編成したるもの露國建國以來今日に至る盛衰消長より其人情風俗宗教文藝に至るまで博說詳叙漏す所なしされば從來露國史の欠乏に苦める學者は勿論東洋の風雲甚だ急なるの今日志を天下國家に存する人士の必ず一讀せざるべからざるものは本書なるべし

發行所 東京牛込早稻田 早稻田大學出版部
發賣所 東京日本橋區本町 博文館

御注文の節は本誌廣告に據る旨御附記を乞ふ

歴史叢書

早稻田大學講師 松平康國編著

英國憲法史

總クロース上製 紙數四百五十頁
正價金壹圓貳拾五錢 郵稅金拾四錢

全壹冊

石版着色地圖挿入

松平康國氏は早稻田大學に講師として多年憲法史を講義し諸書を涉獵せり吾人はこの種の良書の我國に乏きを知り玆に之を上梓す近時我國憲法の運用及議院の行動に就て多少の感を懷ける者を始めとして一般歷史の研究者又法制史研究に思を潛むる者之を讀まは蓋し無量の稗益あるべし

發行所 東京牛込早稻田 早稻田大學出版部
發賣所 東京日本橋區本町 博文館

歷史叢書

米國シカゴ大學政學部教頭 ハーリーブラット、ジャッドソン著

日本大内暢三譯（再版）

總クロース上製　紙數四百餘頁

正價金壹圓貳拾五錢　郵稅金拾貳錢

石版着色地圖挿入

世界の歷史ありて以來十九世紀の歷史ほど複雜にして而かも趣味に富めるものはあらず然れども簡潔明快の筆を以てし卷を繙く者をして一讀忽ち百年間の風雲を掌に指さしむるものは最も稀なり本書の原著は此點に關してマッケンジー氏の『十九世紀』を提げ一讀して實にマッケンジー氏の『十九世紀』を提げ一讀をも凌駕すと稱せらる要を撮み綱を提げ一目瞭然歐洲最近歷史を知悉せしむるもの蓋し此書に若くものなかるべし

全壹冊

發行所　東京牛込早稻田　早稻田大學出版部
發賣所　東京日本橋區本町　博文館

歷史叢書

早稻田大學講師 松平康國編著

世界近世史

總クロース上製　紙數四百餘頁

正價金壹圓貳拾五錢　郵稅金拾貳錢

石版着色地圖挿入

歷史は近世史より有益且つ面白きはなしるに世間の著譯は唯筋書を讀むが如く趣味なく活氣なし今や松平氏の近世史は新面目を以て世に出たり記する所東西交通に始りて維納會議に終る宛も歐州十九世紀史の前編とも云ふべき時代を包括せるものにして其長技なる文章は縱橫に發揮せられ簡明にして雄麗一讀覺えず大喝采を以て之を迎ふべきを知る

全壹冊

發行所　東京牛込早稻田　早稻田大學出版部
發賣所　東京日本橋區本町　博文館

文學叢書

英文學史

文學博士坪内雄藏著（特製全一冊總クロース頗美本 正價金貳圓小包料四百匁迄）

本書上は英國上古史に起り英文學の起原より英詩の曉星たるヂエツフレー、チヨーサーに說き及ほしエリザベス朝の全盛内亂時代の一頓挫十八世紀の波瀾を經て終に最近の文學史に至る或は評論壇或は哲學神學科學等の諸學界或は詩人小說家の事蹟或は其の傑篇の評論等深切丁寧雅馴明晰初學者といへども讀下一番英文學の精髓を窺ふことを得べし實に本邦空前の歐洲文學史なり

全三冊 紙數凡壹千頁 正價各金六十錢 郵稅各金八錢

發行所 東京牛込早稻田 東京日本橋區本町 早稻田大學出版部 博文館

御注文の節は本誌廣告に據る旨御附記を乞ふ

文學叢書

社會劇

高安月郊譯（再版發行）

本書はヘンリック、イブセン氏の二大傑作『社會の敵』『人形の家』の二種よりなる、題して社會劇といふ月郊氏の筆世已に定評あり特に以上の二作物はイブセン氏か自ら「我新劇は古代の所謂悲劇にあらず我は人間を描かんと欲するなり」との揚言の實現せる、所謂社會劇中の傑作なり。附するに月郊氏の筆に成るイブセン氏の略傳を以てしスカンヂナビヤ文學の由來よりイブセン氏の平生を叙述せり。

全一冊 特製正價金壹圓 郵稅金拾貳錢 並製正價金八拾錢 郵稅金拾錢

發行所 東京牛込早稻田 東京日本橋區本町 早稻田大學出版部 博文館

文學叢書

英詩文評釋

文學博士坪内雄藏著（特製全一冊總クロース頗美本 正價金壹圓六拾錢郵稅拾八錢）

卷中収むる所古くは沙翁の傑作「マクベス」「ハムレット」よりベーコン、ドライデン、クーパー、アヂソン、ウォオヅヲオス、テニソンの諸作十數篇の評釋及び英文教授の心得等凡七百頁とす譯語の適切は批評の簡明と相俟つて指導懇切を極め且つ最も意を訓讀法に用ひて在來の譯讀法の如く前後轉倒して訓ずる煩なく讀下直ちに彼是の文意を融合し得るやう一々原文に順ひて都訓なる訓讀文を沿へられたれば一は以て美文飜譯の好參考書たるべく學者之を一讀せば以て英國詩文研鑽の秘鑰を悟了し泰西文學の精華を味ふに足るべきなり

全二冊　上卷正價金七拾錢　郵稅金拾錢
　　下卷正價金六拾錢　郵稅金八錢

發行所　東京牛込早稲田
發賣所　東京日本橋區本町　早稲田大學出版部
　　博文館

文學叢書

巢林子撰註

饗庭篁村著（近松翁自筆書翰寫眞版挿入）

巢林子の好く巢林子の精髓を得たるや何人と雖も疑を容れざる處てゝに近松門左衞門の院本中の傑作、出世景清　長町女腹切、蟬丸、傾城反魂香、曾根崎心中の五種を選み校正を精密にし委しく頭註を加へ名づけて巢林子撰註と云ふ抑も近松研究の第一着は先づ本文を明晰に解讀し腦裡一點の疑問を遺さしめざるにあり故に大方諸氏此篇によりて五種の佳作を反復熟讀せば他は多く解釋を俟ずして其の妙文の秘訣を知得するや勿論なるべし

全一冊　特製正價壹圓　郵稅金拾貳錢　並製正價八十錢　郵稅金拾錢

發行所　東京牛込早稲田
發賣所　東京日本橋區本町　早稲田大學出版部
　　博文館

東京專門學校英文學講師

增田藤之助編幷附譯

英語文章軌範

第參版

本書は英の文豪碩儒の散文十四編を撰び輯めたる者其文體は論文なり叙事文なり書翰文なり其事柄は文學道德歷史社會政治上等諸般の事項に亘れり且つ後半には其飜譯を附載したれば對照獨學に便なり以て教科書に用ゆべく以て參考に充つべき世間無比の良書なり

總ページ數 全一冊

正價金五拾錢 郵稅金四錢

發行 早稻田大學出版部

發賣 東京日本橋本町 博文館

最新刊

早稻田叢書

新美學

早稻田大學講師

島村瀧太郎著

背皮金文字入上製 紙數五百參拾餘頁

正價金壹圓參拾錢 郵稅金拾四錢

本書は全然著者の新見に成れる者、文章論より入りて美學に歸結し、以て大方の批判を得んとす、且初學者の爲には、文學の入門たるべき準備と、研究の過程とを有せり、文字に志あると否とを問はず、國民の座右缺くへからざるの書也

發行所 東京牛込早稻田 早稻田大學出版部

發賣所 東京日本橋區本町 博文館

倫理學專攻

綱島榮一郎著

發行所　東京牛込早稲田　**早稲田大學出版部**

發賣所　東京日本橋區本町　**博文館**

早稲田叢書

西洋倫理學史

背皮金文字入上製
紙數五百五拾餘頁
正價金壹圓參拾錢
郵稅金　拾　四　錢

最新刊

本書特色

(一) 本書は希臘羅馬の古代より英佛獨の近世に至る迄の有ゆる重要なる倫理思想を網羅せる著作なるが故に讀者一讀の下によく泰西二千年の倫理史思想史の大體に通するを得べし

(二) 著者は斯學專攻の名家而かも本書は再三稿を更へて成れる苦心の著なるが故に叙述の繁簡其の宜しきを得て文章また簡勁明暢一筆苟も下さゝる概あり

(三) されは教科書としても學者研究家の參考書として從來此類の好書を闕きし我邦人多數の渇を醫するに足るべしと信ず

外交時報　五十六號

九月二十日（毎月二十日）發行　定價郵稅共一部十六錢六部前金九十一錢十二部前金一圓七十七錢

駐埃及英國代表者クローメル卿肖像　日本語の移植と東洋の勃興　最近トルストイ翁肖像略傳　果して地中海上に於ける英國の地位に變動あり（有賀博士）　半月（有賀博士）　外交史（牧野）　伊國王の露國訪問（中村博士）　馬來半島（宮本學士）　三國同盟の更新　英國下院に於ける（牧野）　英國首相更迭　英國新首相と佛國なる對外政策討議（野）　相バルホ（煙山）　浦潮斯德と旅順及大連（下村學士）　西伯利亞旅行談（有賀博士）　南阿戰爭遷延（煙山學士）の原由其敗因（學士）

發行所　東京牛込早稲田　早稲田大學內　外交時報社

發賣捌　東京——有斐閣——東京堂　大阪——吉岡——其他

早稲田學報

○七十二號　毎月一回廿五日發行　定價一册十五錢　六册前金八十五錢　十二部前金一圓六十五錢　郵稅一部一錢宛の割

正大の議論　綿密の調査　世界の智識を集むる本誌の一大特色

論說　信用保險に就て（栗津學士）　北海道の人口及耕作地反別（內田學士）　東洋に於ける文明（建部博士）　技術家と法律家（岩井尊文）　獨逸帝國殖民政策（石黑定美）　非社會主義論（川崎定五郎）　政法經濟　自二條至改正の賢義　非刑請願の執行猶豫　保險業法　金融の狀況　貿易の消長　物價の調査　物價の趨勢　同盟罷工と砲兵工廠　職工扶助令　氣候と米作　文藝教育　自然主義　演劇　十種（ツルゲネーフと）時代病　海外現象　世界的日耳曼帝國の理想　三國同盟　埃露新　世界外交の伊墺爾國　協商　波陽と　ボーア　羅の現況（海外文壇ゴルキー　フォーマ、ゴルデイエフ）　新刊紹介　早稲田記事

發行所　早稲田大學內　早稲田學會

發捌所　有斐閣東京堂　盛春堂　福田屋

御注文の節は本誌廣告に據る旨御附記を乞ふ

全部完成報告

法學博士 有賀長雄著

早稻田叢書 國法學

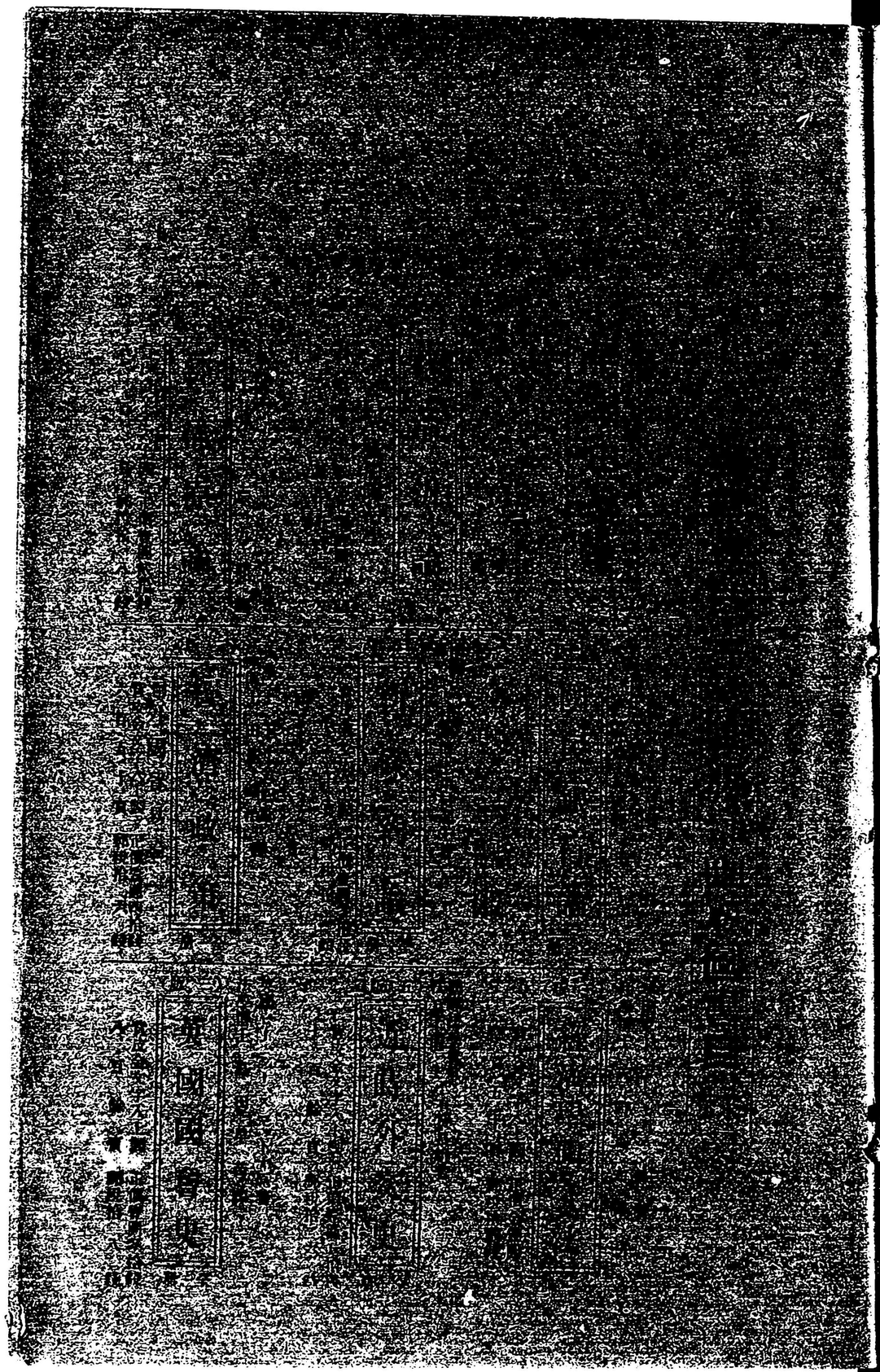
上卷正價金一圓七拾五錢郵稅拾八錢
下卷正價金一圓二十五錢郵稅拾四錢

有賀博士の名著國法學は曩に上卷を發刊し江湖の喝采を博したるが今や下卷稿なるを告ぐ其特長とする所を擧れば第七編に於て自治制の國家に於ける地位を明かにし第八編に於て法律命令の原義を說き第九編に於て大權行政及び準則行政を區別し第十編行政監督の部に於て訴願並に行政裁判に關し政府が本年議會に提出したる法案に就き長短を論したる等他の學者の未だ論及せざる處を說明し其學徒を裨益する至大なり蓋し上卷と共に斯學の一大寶典たらんか

脊皮上製美本
全二冊
紙數千三百頁

發行所 東京日本橋區本町 東京牛込早稻田 早稻田大學出版部
發賣所 博文館

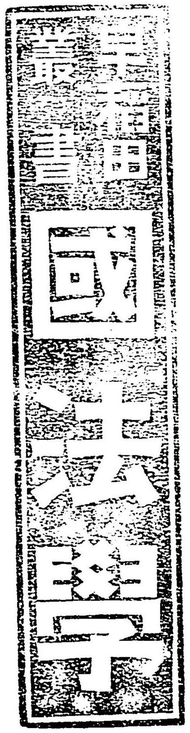
十九



御注文の節は本誌廣告に據る旨御附記を乞ふ

全部完成報告

法學博士 有賀長雄著



上卷正價金一圓七拾五錢郵稅拾八錢
下卷正價金一圓二十五錢郵稅拾四錢

有賀博士の名著國法學は曩に上卷を發刊し江湖の喝采を博したるが今や下卷稿なるを告ぐ其特長とする所を擧れば第七編に於て自治制の國家に於ける地位を明かにし第八編に於て法律命令の原義を說き第九編に於て大權行政及び準則行政を區別し第十編行政監督の部に於て訴願並に行政裁判に關し政府が本年議會に提出したる法案に就き長短を論したる等他の學者の未だ論及せざる處を說明し其學徒を裨益する至大なり蓋し上卷と共に斯學の一大寶典たらんか

背皮上製美本
全　二　冊
紙數千三百頁

發行所　東京日本橋區本町　東東牛込早稻田　早稻田大學出版部
發賣所　博文館

早稻田叢書

米國プリンストン大學政治科教頭 文學博士ウッドロオ、ウイルソン原著
法學博士 高田早苗譯

政治汎論（八版）

全一冊

一名 沿革實用政治學
背皮金文字入上製 正價壹圓五拾錢
一千二百五十頁 小包料四百匁

英國ケムブリアルフレッド、マーシャル原著
ッヂ大學教授 法學士 井上辰九郎譯

經濟原論（大訂十一版）

全一冊

背皮金文字入上製 正價壹圓貳拾錢
八百頁 郵稅拾八錢

東京專門學校出版部圖書目錄

英國 法學博士 ウオルフ原著 天野爲之閲 柏原文太郎譯

國民銀行論（四版）

全一冊

一名 信用組合新策
背皮金文字入上製 正價金壹圓
五百餘頁 郵稅拾四錢

國際法專攻 法學博士中村進午著

新條約論（三版）

全一冊

背皮金文字入上製 正價壹圓參拾錢
六百五十頁 郵稅拾六錢

英國 文學士 法學博士 シヂウヰック原著 土子金四郎 田島錦治共譯

經濟政策（三版）

全一冊

附外國貿易論
背皮金文字入上製 正價壹圓四拾錢
六百五十頁 郵稅拾六錢

英國ジー、エー、キーエンス原著
法學博士 天野爲之譯

經濟學研究法（三版）

全一冊

背皮金文字入上製 正價金壹圓
四百五十頁 郵稅拾貳錢

國際法學會員 法學博士 有賀長雄著

近時外交史（五版）

全一冊

背皮金文字入上製 正價壹圓壹拾錢
七百餘頁 郵稅拾六錢

英國ピー、ジー、スコットオ原著
法學博士 高田早苗譯

英國國會史（三版）

全一冊

背皮金文字入上製 正價壹圓參拾錢
八百餘頁 郵稅拾八錢

英國　エー、ヴイ、ダイシー原著
法學博士　高田早苗共譯
文學士　梅若誠太郎共譯

英國憲法論

附英國憲法講義
背皮金文字入上製　正價壹圓七拾五錢
九百餘頁　郵稅貳拾錢

全一冊

英國シー、エフ、バステーブル原著
法學士　井上辰九郎共譯
法學士　高野岩三郎共譯

財政學

背皮金文字入上製　正價貳圓貳拾錢
一千六百頁　小包料四百匁

全一冊　（再版）

佛國　アド、ピヴオール原著
故　酒井雄三郎譯

今世歐洲外交史

背皮金文字入上製　正價參圓五拾錢
一千六百頁　郵稅參拾六錢

全二冊　（再版）

露國フリードリッヒ、フオン、マルテンス原著
國際法專攻　法學博士　中村進午譯

國際法

背皮金文字入上製　正價金四圓
一千八百頁　郵稅四拾錢

全二冊　（再版）

英國　ジヤスチン、マツカアシー原著
日本　高田早苗共譯
吉田巳之助共譯
石井勇

英國今代史

・一名女皇之御宇
全部三卷上卷千百餘頁背皮金文字入上製正價貳圓參拾錢
文學士　姉崎正治著

上卷

米國　ギチーング原著
文學博士　元良勇次郎閱
文學士　遠藤隆吉譯

社會學

背皮金文字入上製　正價壹圓四拾錢
五百五十頁　郵稅拾四錢

全一冊　（再版）

文學博士　桑木嚴翼著

哲學概論

背皮金文字入上製　正價壹圓四拾錢
五百五十頁　郵稅拾四錢

全一冊　（再版）

米國古倫比亞メーヨー、スミス原著
日本　大學教授　矢文一聰譯

社會統計學

背皮金文字入上製　正價壹圓五拾錢
六百餘頁　郵稅拾四錢

全一冊

瑞西法學博士　野澤武之助共著
國際法專攻　山口弘一

國際私法論

背皮金文字入上製　正價壹圓四拾錢
百頁　郵稅拾六錢

全一冊　（再版）

米國　ウヰルソン原著
文學博士　有賀長雄譯

宗教學概論

背皮金文字入上製　正價壹圓五拾錢
六百餘頁　郵稅拾六錢

全一冊

米國コロムビヤ大學政學部行政法教授　フランク、ジェー、グッドノウ原著
日本　東京專門學校講師　浮田和民譯

比較行政法

背皮金文字入上製　正價金貳圓
八百頁　郵稅貳拾錢

全一冊

英國ミカエル、マルホール原著
ドクトル、オフ、大石熊吉
フイロソフイー
日本　前川九萬人共譯

萬國國力比較

背皮金文字入上製一千頁
精巧圖面三拾餘頁挿入
正價貳圓五拾錢　小包料四百匁

全一冊　（再版）

安部磯雄著

社會問題解釋法

背皮金文字入上製正價金壹圓貳拾錢
四百五十頁　郵稅拾貳錢

全一冊　（再版）

男爵　林董
法學博士　有賀長雄　共閱
佛國學士會員　アナトール、レルア、ボリユー原著
日本　林毅陸譯

露西亞帝國

背皮金文字入上製　正價金貳圓
八百五十頁　小包料四百匁

全一冊

法學博士　有賀長雄著

國法學

下卷近刊
背皮金文字入上製　紙數七百頁
正價壹圓七拾五錢　郵稅拾八錢

上卷

佛國　エークス控訴院裁判所長　ルイ、プロール原著
日本　東京專門學校講師　松平康國譯

政治罪惡論

背皮金文字入上製　正價金壹圓
三百五十頁　郵稅拾貳錢

全一冊

米國シヨン、ダプリユ、バルツエス原著
日本法學博士　高田早苗共譯
吉田巳之助

政治學及比較憲法論

下卷近刊　上卷紙數六百頁
正價金壹圓五拾錢　郵稅十四錢

全二冊

桐島榮一郎著

西洋倫理學史

背皮金文字入上製　紙數五百五十頁
正價金一圓三十錢　郵稅十四錢

全一冊

煙山專太郎編著

近世無政府主義

背皮金文字入上製紙數四百頁
正價金壹圓　郵稅十二錢

全一冊

法學博士　有賀長雄著

國際公法

獨逸　ラバント著
法學士　副島義一譯

國法學

獨逸　シュルチエー著
法學士　副島義一譯

普國國家法論

獨逸　ボルンハツク著
法學士　菊地駒治譯

國家學原理

法學士　竹井新一郎著

帝國憲法論

英國　ニコルソン著
佐藤惣三郎譯

經濟原論

獨逸　ロッシエル著
法學博士　松崎藏之助　法學士　神戸正雄譯

經濟原論

獨逸　オルデンブルク著
三並良譯

佛陀

浮田和民著

史學原論

島村瀧太郎著
新美卯一郎譯

學

早稻田小篇

故　酒井雄三郎著

近世歐洲政治史論

十九世紀
正價金參拾錢　郵稅金四錢

全一冊　（再版）

國際法論

佛國巴里大學ルイ、ルノール原著
法學博士 有賀長雄序
法學士 宮本平九郎譯述

正價金參拾五錢 郵稅金四錢

全一冊

支那貿易

法學士 横田一著

正價四拾錢 郵稅金四錢

全一冊

非鐵道國有論

横山正修編著

正價金貳拾五錢 郵稅金四錢

全一冊

トラスト（三版）

ドクトル、オヴ、フイロソフイー高木正義纂譯

正價金參拾錢 郵稅金四錢

全一冊

南清貿易

小山松壽著

正價金九拾九錢 郵稅金六錢
各國勢力範圍、支那交通、產業圖挿入

全一冊

最近之支那

英國アーチバルド、アール、コツーン原著
法學士 立作太郎抄譯

正價 金三拾五錢 郵稅 金四錢

全一冊

菅公談

伯爵 大隈重信講演

鮮明肖像入
正價 金參拾錢 郵稅 金四錢

全一冊

快樂派倫理

綱島榮一郎纂譯

正價 金五拾五錢 郵稅 金六錢

全一冊

帝國主義論

法學博士 高田早苗抄譯

正價 金四拾錢 郵稅 金六錢

全一冊

犯罪學

法學士 三木猶太郎抄譯

正價 金四十錢 郵稅 六錢

全一冊

國家哲學

ウイロービー及ホサンケイ原著
浮田和民解說

近刊

歷史叢書

法學博士 高田早苗校閲
山本利喜雄著

露西亞史（再版）

正價金壹圓廿五錢 郵稅金拾貳錢
總クロース上製四百五十頁鮮明地圖挿入
パチエラー、オウ、ロース松平康國編著

全一冊

英國憲法史（再版）

正價金壹圓廿五錢 郵稅金拾四錢
總クロース上製四百五十頁鮮明地圖挿入

全一冊

米國シカゴ大學政治科教頭
ハーリー、プラット、ジヤツドソン原著
東京專門學校講師 大內暢三譯

歐洲十九世紀史

正價金壹圓廿五錢 郵稅金拾貳錢
總クロース上製四百餘頁鮮明地圖挿入

全一冊

世界近世史

パチエラー、オウ、ロース松平康國編著

正價金壹圓廿五錢 郵稅拾貳錢
總クロース上製紙數四百餘頁
鮮明地圖挿入

全一冊

佛蘭西史

長田忠一編著

近刊
正價金壹圓廿五錢 郵稅金拾貳錢
總クロース上製紙數四百餘頁
鮮明地圖挿入

全一冊

近刊

浮田和民編 希臘史
浮田和民編 羅馬史
松平康國編 英國史
隈本繁吉編 獨逸史
坂本健一編 伊太利史
村川堅固編 西班牙葡萄牙史
坂本健一編 荷蘭白耳義史
高桑駒吉編 北歐史
長田忠一編 土耳古波留汗史
小崎弘道編 米國史
長瀨鳳輔編 中央亞細亞史
高桑駒吉編 印度史
矢野仁一編 清國史
河合弘民編 近世殖民史

文學叢書

英文學史（再版）

文學博士 坪內雄藏著

總クロース上製美本五百餘頁
正價 金貳圓 小包料四百匁

全一冊

高安月郊譯

イブセン社會劇

總クロース上製 四百餘頁
正價金壹圓 郵稅拾四錢

全一冊

巖庭篁村著

巢林子撰註

近刊

文學博士 坪內雄藏著

英詩文評釋

近刊

東京專門學校講師增田藤之助著

英詩文評釋

近刊

宮崎三昧選

元祿名著集

近刊

近刊

宮崎三昧譯
支那小說艷史

トルストイ伯著 尾崎紅葉 瀨沼夏葉譯
アンナ、カレニナ

フライタツカ著 登張信一郎譯
ゾルウンド、ハアペン

フロウベル著 上田敏譯
マダム、ボヴリー

ハーデイー著 梅澤精一譯
テス

ホーソン著 內田貢譯
スカーレット、レター

尾崎紅葉著
俳諧七部集略解

赤堀又次郎著
有職故實

ストツダアド著 千葉勉譯
英國小說進化論

ドウテン著 中島孤一譯
シェークスピヤー

早稻田文學會編述
謠曲評釋

島村瀧太郎譯
歐米名家短篇集

森槐南著
元曲學隅

經濟學叢書

伊國法學博士ルイギー、コッサ原著
日本法學士 永井直好重譯

社會經濟原論

總クロース上製三百餘頁
正價金壹圓 郵稅金拾錢

一冊

英國タブリユー、エー、ジヨウ著
日本 信夫淳平譯

歐洲貨幣史

近刊

米國エドワード、カロル原著
法學博士 天野爲之閱
伊藤 正譯

金融之原理及其實際

近刊

近刊

法學博士和田垣謙三閱 岸田庫三譯
コンラード氏經濟學
(上)國民經濟學 (中)經濟政策學
(下)財政學

法學博士松崎藏之助閱 岩城之寬譯
ハドレー氏經濟學

文學士梅若誠太郎 增原正直共譯
アダムス氏財政學

法學博士天野爲之閱 原田駒之助譯
クレアー氏外國爲替論

法學士 永井直好譯
バッテン氏消費論

矣文聰譯
スミス氏經濟統計學

法學士 柳田國男譯
クラーク氏分配論

文學士 杉江輔人譯
クーレー氏交通機關論

マスター、オウ、アーツ千葉鐵藏譯
埃國價值論

譯者未定
ボン、バワーク氏資本論

譯者未定
デヴィドソン氏貨幣論

法律叢書

法學博士鳩山和夫
法學博士磯谷幸次郎
法學博士岡村輝彥
帝國大學教授レーンホルム
法學博士 ドルトル 桝謙次郎
法學博士菊池武夫 評
獨逸伯林大學教授ハインリヒ、デルンブルヒ原著
法學士副島義一
法學博士中村進午
法學士古川五郎 谷譯
法學士瀨田忠三郎 山口弘一 批

(再版)

獨逸民法論

全四冊

附獨逸民法正文正價金八圓

第一卷 總則 第二卷 物權
第三卷 債權 第四卷 親族、相續

●正價 ○第一卷金壹圓七十五錢 ○第二卷金壹圓七十五錢
○第三卷金壹圓五十錢 ○第四卷金壹圓五十錢
●郵稅 ○第一卷金二十六錢 ○第二卷金二十六錢 ○第三卷
金二十錢 ○第四卷金二十錢 ○附錄正文金二十錢 ○全部小包料金百錢

錄目書圖版出部版出民法學門專京東

近刊

國際私法論　法學士岩田宙造著　法學士古川五郎譯　法學士宮本平九郎譯　正價金四拾錢　郵稅金四錢

國際公法　法學士瑞口九方一譯　正價金四拾錢　郵稅金四錢

國際私法　法學士古川五郎譯　正價金四拾錢　郵稅金四錢

國際法　ベーリング著　法學士宮本平九郎譯　正價金四拾錢　郵稅金四錢

國際法　ベーリング著　法學士瑞口九方一譯　正價金四拾錢　郵稅金四錢

獨逸刑法論　刊近

法律教科書

民法總則　法學士小山溫著　正價金四拾錢　郵稅金四錢　冊一全

民事訴訟法　第一編　勞事今村信行著　正價金四拾錢　郵稅金四錢

物權法　法學士鈴木喜三郎著　正價金五拾錢　郵稅金六錢　冊一全

商法總則　法學士岩山衆司著　正價金六拾錢　郵稅金六錢　冊一全

保險法　法學士和仁貞吉著　正價金四拾錢　郵稅金四錢　冊一全

親族法　法學士牧野菊之助著　正價金四拾五錢　郵稅金六錢　冊一全

債權法總則　法學士平沼騏一郎著　正價金六拾錢　郵稅金六錢　冊一全

獨逸商法論　冊一全　正價金參圓五拾錢　小包料四百參拾錢　郵稅參千二百餘頁　背皮金文字入上製美本

法學士磯部四郎　法學士岡田朝太郎　法學士松波仁一郎　法學士梅謙次郎　法學士中古彌四郎　法學士岡野敬次郎　法學士小河滋次郎　法學士田部芳　法學士野村泰亨　法學士山田三良　法學士松岡義正　法學士勝本正晃　法學士岡松參太郎　法學士仁保龜松　法學士松本烝治　法學士山內確三　法學士山田正三　法學士小野清一郎　法學士平賀健太　法學士田中耕太郎　法學士村川一郎　法學士中古彌四郎　法學士岡野敬次郎　法學士小河滋次郎　法學士田部芳　法學士野村泰亨　法學士山田三良　法學士松岡義正　法學士勝本正晃　法學士岡松參太郎　法學士仁保龜松　法學士松本烝治　法學士山內確三　法學士山田正三　法學士小野清一郎　法學士平賀健太　法學士田中耕太郎　法學士村川一郎

手形法小切手法　法學士小山溫著　正價金四拾錢　郵稅金四錢

民法總則　法學士小山溫著　正價金四拾錢　郵稅金四錢

商法總則　法學士岩山衆司著　正價金六拾錢　郵稅金六錢

海法學士朝倉外茂鍬著　商法總則　正價金四拾錢　郵稅金四錢

民法學士小山溫著　法律教科書　法學士鈴木喜三郎共著

目書圖版出部版出校學門郭京東

教科書類及雜書

漢文綱要

三金吉中洲駿訂序　菊池晩香洲駿訂序

正價金六拾錢　郵稅金六錢　一冊全

文章眞訣

（版五）曉齋海舍鮮海　菊池谷田三九郎百川訂引序

正價金七拾五錢　郵稅金十六錢　一冊全

刑法評論

草改案正　岡田朝太郎　松岡義正　小河滋次郎　平沼騏一郎　共著

正價金五十錢　郵稅金六錢　一冊全

獨逸新法正文

民法　商法

法學士古川五郎　山口弘一合譯

正價金六拾錢　郵稅金四錢　一冊全

商行爲

法學士　宮　山　泉　田　源　藏

正價金七拾五錢　郵稅金八錢　一冊全

英語文章軌範

愛輿校諸部諸學生諸君之助

正價クロース製美本金五十錢　郵稅紙數二百頁四錢

平家物語

綱要文

赤堀又次郎　千葉掌院共著

正價上製金六拾五錢　並製金五拾錢　郵稅金六錢

法典修正案理由書

（版三）

正價金七十五錢　郵稅一冊十四錢　菊版　全三冊　一千五百頁

民法之部

郵稅入錢　訟手續法●外三法全一冊　●施行法●民法正價四十八錢　●民法五冊郵稅五錢

商法之部

正記法●價法施司●行罰●不法入供法錢託●動產不商稅全動法六二產●錢冊登圖

新法典正文

劉鑑照頭　全三冊

刑法改正案參考書

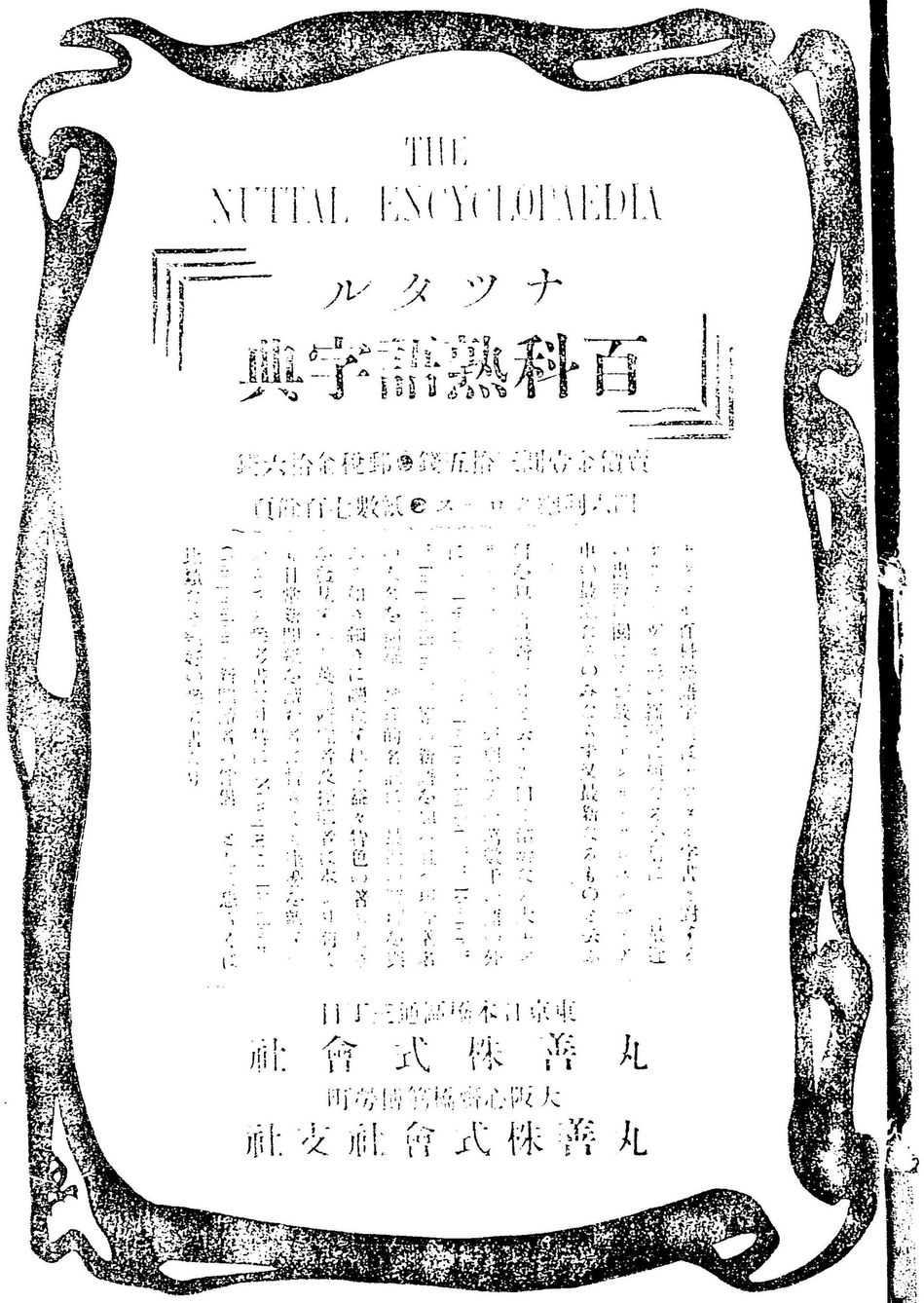
一冊全

印刷

THE
NUTTAL ENCYCLOPAEDIA

ナツタル

百科熟語辭典



東京日本橋區通三丁目

丸善株式會社

大阪心齋橋筋第四号所

丸善株式會社支社

東京專門學校出版部出版圖書目錄

色特大一の誌本む集を識智の界世密綿査調大正論議

早稻田學報

毎月一回二十五日發行

定價 一部金十五錢 六部金八十五錢 十二部金一圓六十五錢 郵稅一部一錢

論說　講演　雜纂　政法經濟　文藝教育　海外現象　早稻田記事

大賣捌 神田 有斐閣 神田 東京堂 芝 福島屋 本鄉 盛春堂

發行所 早稻田學會

東京市牛込區早稻田東京專門學校出版部內

國際法學會員法學博士 有賀長雄氏主筆

外交時報

毎月一回二十日發行

定價 一部郵稅共金十六錢 六部金九十一錢 十二部金一圓七十五錢

肖像 記事 論說 國際法 公文 萬國赤十字 外交家傳 外交史談 外交書評 雜報

大賣捌 神田 有斐閣 神田 東京堂 本鄉 丁酉社

發行所 外交時報社

東京市牛込區早稻田東京專門學校出版部內

THE
NUTTAL ENCYCLOPAEDIA

ナツタル

百科熟語字典

賣價金壹圓三拾五錢◉郵稅金拾六錢

四六判總クロース◉紙數七百餘頁

ナツタル百科熟語字典はナツタル字書と對するオクターヴォ形の繙閲に便なる小册にして最近の出版に關はるが故にエンサイクロペイディア中の最廣たるのみならず又最新なるものと云ふべし

何を以て最新なりと云ふ？曰く精粹なる大エンサイクロペイディアが與ふる一萬數千の語の外に "Dreyfus" "Impressionist" "Reuter" "Imperialism" 等の新語を加へ且つ現今著名の人名を網羅し地理的名詞には最近の解釋を與ふる如き細きに調査すれば益々特色の著るしきを發見すべし英語研究者及操觚者は本より有らゆる日常新聞紙を讀む者は暫らくも座邊を離すべからざる參考書なり特に Newspaper Readeer's Companion（新聞讀者の伴侶）として恐らくは比類なき絶好の參考書なり

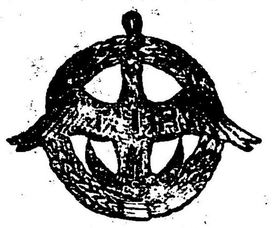
東京日本橋區通三丁目

丸善株式會社

大阪心齋橋筋博勞町

丸善株式會社支社

（明治三十六年一月十日發行）　中等教育第拾號　毎月一回十日發行　（明治三十五年五月十三日第三種郵便物認可）



創立明治十年

各學校、團体、倶樂部、共進會等ヨリ賞牌、徽章、帽章、金銀木盃等ノ製作ヲ命セラルヽモノ年々幾萬ヲ以テ數フルノ盛運ヲ見ルハ江湖諸彦ガ斯業ハ弊舖ノ獨專業ニシテ而カモ熟練精巧、迅速、廉價誠實ナルヲ賞セラレ深ク御愛眷ヲ賜ハル結果ニ外ナラス弊舖ハ此信用ヲ維持スルガ爲メニ如何ニ技術者ヲ督勵シ品質ヲ精撰スルカハ偏ニ御實見ニ依テ御判斷ヲ乞フ

御申越ニ依テ詳細ナル手續書ト鮮明ナル圖書ヲ進呈ス

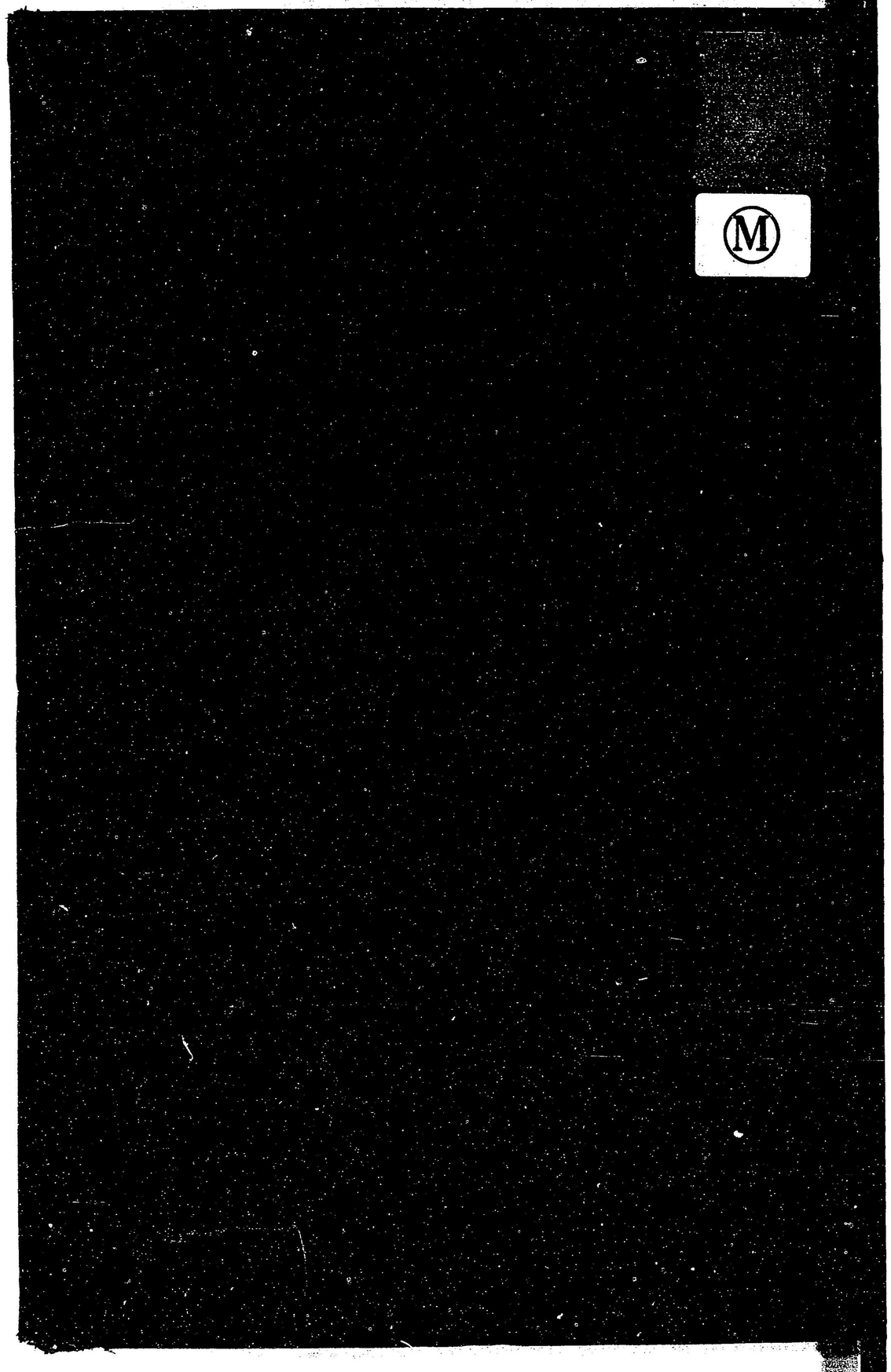
東京市勉町區飯田町三丁目拾番地

日本帝國徽章商會

（電話番町八五七番）

會主　鈴木梅吉啓具

13
489

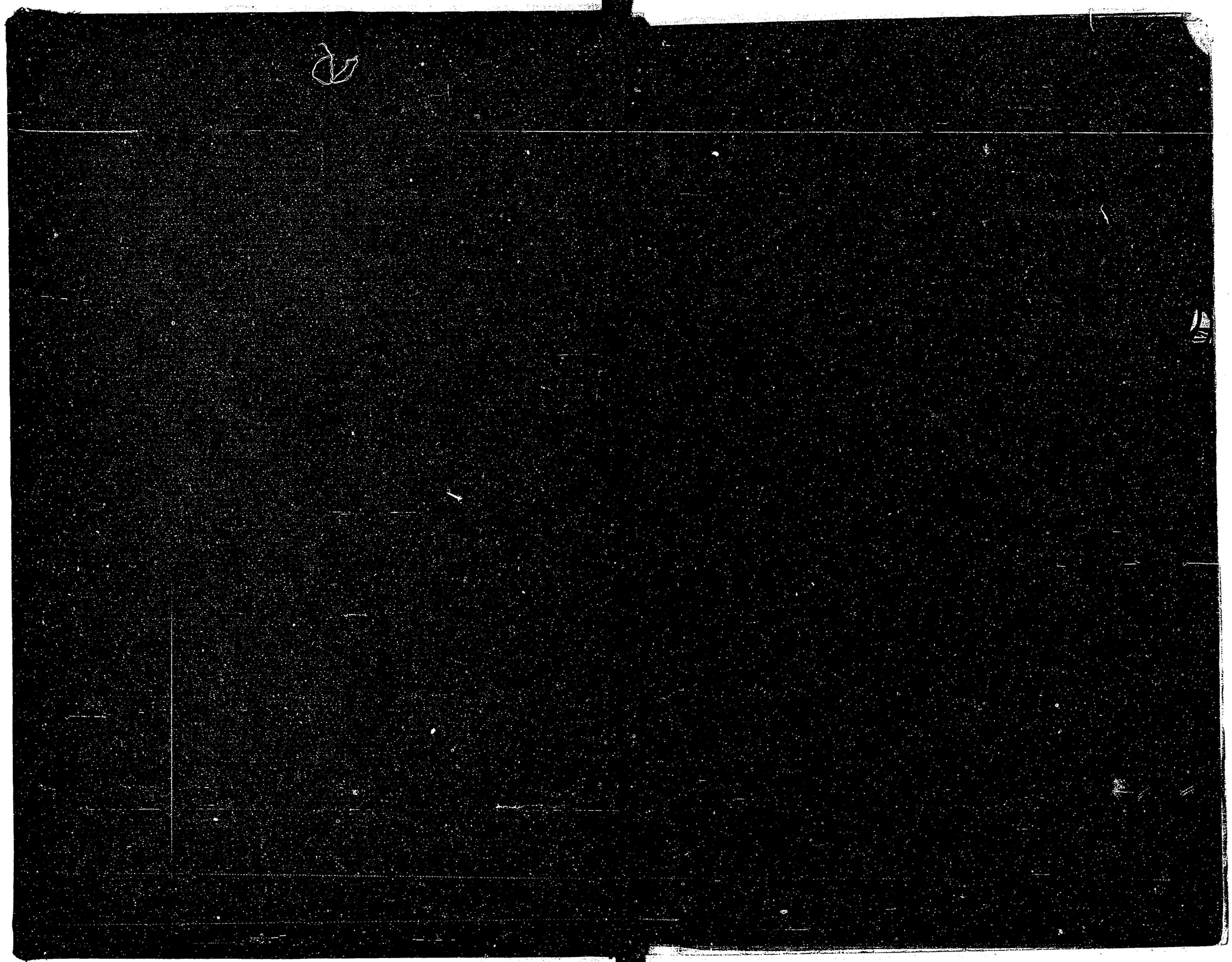


203751-007-6

13-489

中等教育　第1期

中等教育会

M35-36

EDM-0353